

A Study of Housing Needs and their Regional Defferences in Hokuriku District

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamagishi, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034878

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



北陸地方における地域性と 住要求に関する研究

課題番号 07680011

平成7年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書

平成10年2月

金沢大学 教育学部

山岸 雅子

KAREN
1997
59

北陸地方における地域性と 住要求に関する研究

課題番号 07680011

平成7年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書

平成10年2月

金沢大学 教育学部

山岸 雅子

研究組織

研究代表者 : 山岸 雅子(金沢大学 教育学部)

研究経費

平成7年度 900千円

平成8年度 600千円

計 1500千円

目 次

第1章	本研究の背景・目的・方法	1
第1節	本研究の背景	1
第2節	本研究の目的・方法	1
第2章	調査概要	1
第1節	調査対象地選定理由	1
第2節	調査対象地区概要	2
第3節	調査概要	6
第3章	調査対象者の属性	7
第1節	世帯主	7
第2節	配偶者	8
第3節	家族人数	9
第4節	家族構成	10
第5節	世帯収入	11
第4章	住宅形態	12
第1節	住宅面積・敷地面積	12
第2節	住宅タイプ	14
第3節	所有関係	15
第5章	住宅選択機構	16
第1節	前住宅	16
第2節	入居理由	18
第3節	転居希望	22
第6章	住まい方実態	24
第1節	食事	24
第2節	団らん	30
第3節	夫婦の就寝	36
第4節	子供の就寝	41
第5節	接客	46
第6節	冠婚葬祭	55

第7章	居住性評価	59
第1節	『金沢』における居住性評価	59
第2節	『松任』における居住性評価	74
第3節	『羽咋』における居住性評価	80
第8章	高齢者と住まい	85
第1節	高齢期の住まい方に対する意識	85
第2節	高齢期の不安	91
第3節	高齢者に対する住宅上の配慮	94
第9章	総括	96
第1節	住まい方及び住宅・住環境性能の評価と地域性…	96
第2節	住居観・住要求の地域性	100
おわりに		102

第1章 本研究の背景・目的・方法

第1節 本研究の背景

(1) 住宅の性能

戦後、日本の住宅をめぐる環境は、高度経済成長期を経て大きく変容し、住要求も一方で多様化、高度化、個別化、高級化を求めるとともに家族機能の低下による社会化、共同化の変化を示してきた。しかし、現在多くの住宅ストックはこのような変化に対応することはおろか、基本的な住要求をも満たしていないのが現状である。

(2) 北陸・及び石川県の地域性

一般に全国的に見て、北陸地方は人々の意識が保守的と言われており、住生活面においては接客空間の重視、同居意識の強さ、格式を重んじる姿勢等に現れていると思われる。しかし、一方で、北陸一の都市金沢市をかかえ、金沢市や周辺地域を中心に、現代の多様な住要求や合理性、快適性を求める都市的スタイルが見られる。

第2節 本研究の目的・方法

本研究は、今後北陸三県に拡大するものであるが、石川県に立地する独立住宅、集合住宅の居住性及び石川県の地域性と住居観との関連性を知ることが目的とする。

そこで、金沢市市街地に立地する民間分譲集合住宅、金沢市郊外の計画的戸建て住宅地内の独立住宅、能登地方の中都市である羽咋市市街地に立地する戸建て住宅の居住者に対してアンケート調査を実施し、その結果を分析することにより、これらの地域性や住宅形態が住宅の平面、居住性、住まい方、住居観に与える影響と、これらの相互関係について明らかにすることにより、地域特性に根ざし、居住者の住要求に適合した住環境の計画に示唆を与えようとするものである。

第2章 調査概要

第1節 調査対象地選定理由

調査対象には、地域性及び住宅形態による比較が可能であるように、(1)金沢市中心部に立地の集合住宅、(2)金沢市郊外に立地の計画的戸建て住宅地、(3)能登地方の中都市市街地立地の戸建て住宅を選定した。各選定理由などは以下に示す通りである。

- (1) 金沢市市街地立地の民間分譲集合住宅………「パークサイト玉川（金沢市芳斉1-183）」「ダイアパレス玉川公園（金沢市玉川町6-23）」「ダイアパレス玉川公園第2（金沢市玉川町78）」

これらの3集合住宅は、立地場所が近く、いずれも建築年数が8～9年とほぼ同時期に建設されており、また分譲価格、住戸タイプも同様であるため、3団地間の入居者層の違いはほとんどみられないと予想される。住戸タイプは、3LDKが中心であるため、家族向けの集合住宅である。

(2) 金沢市郊外立地の計画的戸建て住宅地……松任市山島台ニュータウン

松任市は金沢市に隣接し、山島台ニュータウンは同じく松任市にある千代野ニュータウンとともに金沢市のベッドタウンとなっている。宅地分譲、建売分譲の戸建て住宅地である。平成以降に順次分譲されており、居住年数が短い世帯である。

(3) 能登地方の中都市市街地立地の戸建て住宅……羽咋市市街地内の戸建て住宅

山島台ニュータウンのように計画的に区画整理され、分譲、建設された住宅地ではなく、既成市街地に建設されている戸建て住宅のみを抽出する。これらは、比較的古くから継続して居住していると推察される。

第2節 調査対象地区概要

各調査地区の概要については以下のものである。

(1) 民間分譲集合住宅

「パークサイト玉川」

所在地：金沢市芳斉1-183

総戸数：120戸

住戸タイプ：2LDK 22戸, 3LDK 96戸, 4LDK 2戸

構造：SRC造（一部RC造）10階建

敷地面積：3630.57㎡

建築面積：1448.45㎡

延床面積：10852.56㎡

入居開始：昭和59年12月

「ダイアパレス玉川公園」

所在地：金沢市玉川町6-23

総戸数：74戸

住戸タイプ：3LDK 70戸, 4LDK 4戸

構造：SRC造 10階建

入居開始：昭和62年2月

「ダイアパレス玉川公園第2」

所在地：金沢市玉川町78

総戸数：36戸

住戸タイプ：2DK 8戸, 2DK+S 4戸, 2LDK 3戸, 2LDK+S 3戸, 3LDK 8戸, 3LDK+S 4戸, 4LDK 6戸

構造：SRC造 11階建

敷地面積：928.15㎡

建築面積：333.31㎡

延床面積：2944.17㎡

入居開始：昭和63年9月

(2) 山島台ニュータウン

所在地：石川県松任市山島台

総面積：23.1ha (約7万坪)

建ぺい率：50%

容積率：80%

住宅用地：約450区画 1区画坪数70坪～120坪 (平均83坪)

計画人口：1800人

交通：北陸鉄道バス三反田松任線、金沢辰口町線の2線

松任市概要

人口：65132人 (平成9年1月末現在)

世帯：18668世帯 (同)

面積：59.93km²

(3) 羽咋市

人口：26955人 (平成8年3月現在)

男：12781人 女：14174人

世帯数：7793世帯 (同)

面積：81.61km² (平成3年10月現在) (国土地理院)

表2-1 羽咋市人口・世帯数の推移

各年12.1現在

年	世帯数	人口		1世帯当人数
		男	女	
昭和43	6955	13809	15942	4.23
45	6753	13772	15304	4.31
50	7413	13952	15300	3.92
55	7476	14193	15432	3.96
60	7642	13924	15331	3.83
63	7708	13605	15021	3.71
平成1	7717	13545	14986	3.70
2	7727	13427	14865	3.66
3	7755	13330	14801	3.62
4	7766	13221	14689	3.59
5	7744	13040	14509	3.55
6	7793	12950	14390	3.50

資料：羽咋市市民課

表2-2 羽咋市 年齢別人口の推移

各年10.1現在

年	幼年人口 (0～14才)			生産年齢人口 (15～64才)			高齢人口 (65才以上)		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
昭40	7416	3843	3573	19476	8753	10723	2198	915	128
45	6760	3483	3277	19235	8810	10425	2535	1068	1467
50	6961	3561	3400	18666	8663	10003	3099	1324	1775
55	6813	3449	3364	18404	8802	9602	3567	1453	2114
60	6134	3088	3046	18571	8754	9655	4084	1665	2419
平2	4801	2414	2387	18065	8754	9311	4651	1882	2769

表2-1のように、羽咋市の人口は、昭和43年には合計29451人であったのが、昭和63年(28626人)までは増減をくりかえすものの、平成元年に28531人に減少し、以後減少の一途を辿る。平成3年には28131人、平成6年には27340人である。しかし、世帯数は増加し、従って1世帯当たりの人員数は昭和45年には4.31人であったのが、平成6年には3.50人と減少し、世帯の縮小化がすすんでいるといえる。また、表2-2より、人口の減少しているのは、幼少年年齢層、生産年齢層であり、高齢層は急増している。特に幼少年年齢層の減少は著しく、今後ますます高齢化が進むだろう。

また、表2-3では、調査対象地域の金沢市、松任市、羽咋市の面積、世帯数、人口、人口密度、1世帯当たりの人員数を比較している。石川県内のその他の全ての市、羽咋郡の全ての町、人口密度の低い鳳至郡柳田村のそれらも参考に記載している。

金沢市は石川県の人口の37.4%を占め、人口密度も非常に高く、石川県の中心的な都市である。多くの都市機能が集中し、中心地の夜間人口は減少しているものの、周辺地域、郊外地には大規模ニュータウンの開発が相次ぎ、人口の増加がみられる。

松任市は人口は4.6%にすぎないが、人口密度は高く、金沢市と同程度である。金沢市の隣接都市であるため、金沢市のベッドタウンとして機能している。調査対象地の山島台ニュータウンの開発より前に、昭和52年分譲開始の千代野ニュータウン(団地敷地規模80ha、計画戸数1600戸)もある。

羽咋市は、能登半島の西海岸沿いに位置する。比較的金沢市に近いにも拘わらず、前述のように年少人口が減少、高齢人口が増加、総人口、世帯人員数も減少している地域である。石川県人口の2.6%を占める。

表2-3 石川県内 市町村人口および世帯数

平成2.10.1現在

	面積 (km ²)	世帯数	人口 (人)	人口密度 (1km ² 当たり)	1世帯当たり 人員
総数	4184.52	338086	1152325	278.3	3.22
金沢市	467.77	141097	430481	946.8	2.87
松任市	59.93	13473	52585	970.2	3.77
羽咋市	81.58	7608	28789	337.3	3.58
七尾市	143.87	14248	50582	348.2	3.31
小松市	371.13	28144	106041	285.8	3.63
輪島市	268.63	9072	31843	112.3	3.33
珠洲市	247.06	7125	25860	95.0	3.33
加賀市	151.6	20284	68630	456.5	3.27
羽咋郡	358.42	11803	47134	127.4	3.65
富来町	123.47	3242	11594	93.9	3.56
志雄町	58.26	2008	7708	132.3	3.84
志賀町	123.27	4314	17184	139.4	3.59
押水町	53.42	2239	9194	172.1	3.75
鳳至郡					
柳田村	104.14	1382	5436	49.4	3.81

世帯数・人口は昭和60年国勢調査より

第3節 調査概要

調査はいずれも原則として主婦を対象に、調査票留置自記法により行った。調査期間は以下の通りである。

- (1)金沢市内民間分譲マンション（以下『金沢』と略記する）……平成7年10月9日～11月13日
 - (2)松任市山島台ニュータウン（以下『松任』と略記する）……平成7年12月8日～平成8年1月20日
 - (3)羽咋市街地独立住宅（以下『羽咋』と略記する）…平成8年5月25日～6月6日
- 各回収率は以下の表の通りである。

表2-4 調査票回収率

調査地	調査場所	配布数	回収数	無効回答	回収率
金沢市	パークサイト玉川	47	43	1	91.5%
	ダイアパレス玉川公園	38	33	0	86.8%
	ダイアパレス玉川公園第2	14	13	0	89.9%
合 計		99	89	1	89.9%
松任市	山島台ニュータウン1丁目	21	19	0	90.4%
	” 2丁目	32	29	0	90.6%
	” 3丁目	38	31	0	81.5%
	” 4丁目	16	14	0	87.5%
	” 5丁目	28	25	0	89.2%
	” 6丁目	65	56	1	86.1%
合 計		200	174	1	87.0%
羽咋市	大川町	37	34	1	91.9%
	旭町	30	26	0	86.6%
	本町	16	14	0	87.4%
	南中央町	9	9	0	100%
	中央町	8	8	0	100%
	川原町	8	7	0	87.5%
	島出町	4	4	0	100%
	釜屋町	4	4	0	100%
合 計		116	106	1	90.5%

第3章 調査対象者の属性

第1節 世帯主

『金沢』『松任』『羽咋』における世帯主の性別、職業、年齢を表3-1に示す。

表3-1 世帯主属性

属 性		『金沢』	『松任』	『羽咋』
性 別	男	N=88 89.8	N=167 97.6	N=97 95.9
	女	10.2	2.4	4.1
年 齢		N=85	N=171	N=98
	20代	3.5	6.4	0
	30代	22.4	46.2	18.4
	40代	41.2	23.4	26.4
	50代	14.1	14.0	20.4
	60代	10.6	7.6	18.4
	70代	8.2	1.8	13.3
職 業		N=83	N=164	N=94
	管理職	33.7	22.0	14.9
	事務職	12.0	10.4	11.7
	専門・技術職	21.7	32.9	14.9
	販売・サービス職	8.4	9.1	6.4
	技能・労務職	3.6	10.4	17.0
	個人業主・自由業	7.2	7.3	9.6
	パート・アルバイト	3.6	0.6	2.1
	無職	8.4	5.5	18.0
その他	1.2	1.8	5.3	

世帯主は、いずれも男性が圧倒的に多いが、『金沢』は女性の割合が他の2地域と比較し多い。この女性の世帯主は40代以降の年齢層である。

年齢は、『金沢』は40代、『松任』は30代、『羽咋』は40代が最も多い。次いで多いのは、『金沢』は30代、『松任』は40代、『羽咋』は50代となり、『金沢』『松任』は30～40代で60%を超えるが、『羽咋』は47%に止まり、30代から70代まで、

広範囲に年齢が分布している。従って、『松任』が最も年齢層が低く、次いで『金沢』、最も高いのは『羽咋』である。

職業は、『金沢』は管理職が最も多く、専門・技術職、事務職が次いで多く、これら3職種で約70%近くを占め、いわゆるサラリーマン層が多く居住していることがわかる。『松任』は最も多いのが専門・技術職、次いで管理職が多く、事務職、技能労務職も約10%ずつある。『金沢』と同様サラリーマンが多いが、年齢がやや低いこともあり、管理職の割合が『金沢』と比較し低い。『羽咋』、『羽咋』、最も多いのが無職、次いで技能・労務職となり、『金沢』『松任』と職種が異なる。無職は60代以降である。

第2節 配偶者

『金沢』、『松任』、『羽咋』における配偶者の年齢、職業を表3-2に示す。

表3-2 配偶者属性

属性		『金沢』	『松任』	『羽咋』
年 齢		N=71	N=160	N=88
	20代	2.8	20.0	5.7
	30代	46.5	45.6	23.9
	40代	28.2	20.0	35.1
	50代	9.9	11.3	9.1
	60代	11.3	2.5	20.5
	70代	1.4	0.6	5.7
職 業		N=72	N=157	N=86
	管理職	0	1.3	1.2
	事務職	5.6	9.6	11.6
	専門・技術職	4.8	7.6	16.3
	販売・サービス職	1.4	5.7	4.7
	技能・労務職	0	2.5	16.3
	個人業主・自由業	4.2	2.5	3.5
	パート・アルバイト	12.5	20.4	12.8
	専業主婦	69.4	44.6	17.3
	無職	2.8	5.1	15.1
その他	0	0.6	1.2	

配偶者の年齢は、『金沢』は30代、40代が多く、合わせて約75%を占める。『松任』は同様に30代、40代が多いが、20代も20%と多く、20～40代で85%になる。『羽咋』も30代、40代が多く合わせて約60%となるが、60代も20%ある。世帯主年齢と同様に、『羽咋』は配偶者の年齢層も他の2地域と比較し高い。

職業は、専業主婦率をみると『金沢』は70%、『松任』は45%、『羽咋』は17%である。『金沢』が最も専業主婦率が高く、『羽咋』が最も低い。『松任』は、パート・アルバイト・内職の割合が他の2地域より高く、20%以上ある。これは、住宅取得のための経済的理由が大きいのと思われる。『羽咋』は、専業主婦と回答した世帯は前述のように17%であるが、無職と回答した世帯も多く15%あり、合計すると32.4%となる。無職の回答率は『金沢』『松任』は数%であるのに対して、『羽咋』が高いのは、配偶者年齢の高い世帯の回答が多いためである。主婦が専業主婦か無職かいずれを回答するかは回答者の自由であるが、これまでの調査結果⁽¹⁾から、家事を主に担っている場合は専業主婦、家事を嫁などが行い、ほとんど担っていない場合には無職と回答する傾向がある。職業をもっている場合は、『金沢』は事務職、専門・技術職がややみられるが、ほとんどない。『松任』は、事務職、専門・技術職がやや多い。『羽咋』は就業率が高いが、専門・技術職、技能・労務職、事務職など多様である。年齢との関係を見ると、『金沢』は20代の専業主婦率は高く年齢があがるに従い、徐々に減り、60代で再び多くなる。『松任』は、最も専業主婦率の高いのは50代で、特に30代、40代はパートなどの仕事をしている割合が高い、『羽咋』もこの世代が最も専業主婦率が低い。

第3節 家族人数

家族人数を表3-3に示す。

表3-3 家族人数

		『金沢』	『松任』	『羽咋』
		N=88	N=171	N=97
1	人	8.0	4.7	4.1
2	人	26.1	18.7	27.9
3	人	20.5	25.7	14.4
4	人	36.4	32.2	19.6
5	人	8.0	12.9	13.4
6	人	1.1	2.9	14.4
7	人	0	2.3	6.2
8	人	0	0.6	0

『金沢』『松任』は4人世帯が最も多く、2～3人世帯が次いで多く、2～4人世帯で約80%となる。しかし、『羽咋』は2人世帯が最も多く、次いで多いのが4人世帯、次いで、3人、6人となる。平均家族人数は、『金沢』は3.1人、『松任』は3.5人、『羽咋』は3.8人である。『羽咋』は最も多いのが2人世帯であるが、5人以上の人数の多い世帯も多いため、平均家族人数が多くなる。

第4節 家族構成

家族構成を表3-4に示す。

表3-4 家族構成

	『金沢』	『松任』	『羽咋』
	N=88	N=171	N=96
単身者	8.0	4.7	4.2
夫婦のみ(妻40才未満)	2.3	11.1	2.1
夫婦+長子6才未満	17.0	27.4	1.0
夫婦+長子小学生	20.5	8.8	5.2
夫婦+長子中高生	19.3	7.6	4.2
夫婦+長子19才以上	4.5	11.7	10.4
夫婦のみ(妻40才以上)	17.0	8.8	25.0
三世代家族	2.3	16.4	36.4
その他	9.1	3.5	0

『金沢』『松任』『羽咋』それぞれの家族構成の特徴がみられる。『金沢』は最も多いのが「夫婦+長子小学生」世帯で、次いで「夫婦+長子中高生」世帯である。『松任』は最も多いのが「夫婦+長子6才未満」世帯で、次いで「三世代家族」である。『羽咋』は「三世代家族」が最も多く、「夫婦のみ(妻40才以上)」世帯となる。世帯主、配偶者の年齢構成と関連し、『金沢』は学齢期の子供をもつ世帯が中心となり、『松任』は『金沢』よりやや若い世代が中心となる。『羽咋』は子供の年齢が低い世帯は三世代同居が多く、年齢が高い場合は、高校卒業以上、あるいは独立し、夫婦2人になっている世帯が中心となっている。

第5節 世帯年収

世帯年収については、『松任』『羽咋』において調査を行った。その結果を表3-5に示す。

表3-5 世帯年収

	『松任』	『羽咋』
	N=133	N=52
～300万円	0	3.6
300～400万円	5.3	7.7
400～500万円	11.3	11.5
500～600万円	16.5	9.6
600～700万円	18.0	9.6
700～800万円	9.8	13.7
800～900万円	6.8	3.8
900～1000万円	3.0	1.9
1000～1500万円	25.6	24.9
1500～万円	3.9	7.7

～は前数字以上、後数字未満を指す。

世帯年収は、1000万円以上の高収入の世帯が『松任』『羽咋』ともに約4分の1を占めている。『松任』は600万円台、500万円台が次いで多く、『羽咋』は400万円台、700万円台の2つの山がみられる。

(1) 山岸 雅子 「金沢市における同居世帯の住生活の現状と二世帯住宅観」 金沢大学教育学部紀要、人文科学・社会科学編、第45号、1996年

第4章 住宅形態

第1節 住宅面積・敷地面積

調査対象者が調査時に居住している住宅の住宅面積について、集合住宅である『金沢』の住戸専有面積を表4-1に、独立住宅である『松任』『羽咋』の住宅延床面積を表4-2に示す。

表4-1 『金沢』住戸専有面積

	『金沢』	
	N=88	
50㎡～60㎡	4.5	%
60㎡～70㎡	15.9	
70㎡～80㎡	48.9	
80㎡～90㎡	26.1	
90㎡～100㎡	4.5	

～は前数字以上後数字未満を示す

表4-2 『松任』『羽咋』住宅延床面積

	『松任』	『羽咋』
	N=163	N=90
20坪 (66㎡) ～30坪	2.5 %	2.2 %
30坪 (99㎡) ～40坪	20.9	16.7
40坪 (132㎡) ～50坪	41.7	23.3
50坪 (165㎡) ～60坪	19.0	24.5
60坪 (198㎡) ～70坪	6.1	8.9
70坪 (231㎡) ～80坪	6.7	13.3
80坪 (264㎡) ～90坪	1.2	6.7
90坪 (297㎡) ～100坪	1.8	1.1
100坪 (330㎡) ～	0	3.3

～は前数字以上後数字未満を示す

『金沢』は面積の単位が㎡で分譲されているため㎡で設問を行い、『松任』と『羽咋』は日常的に使用しているであろうと予想し、坪の単位を用いて設問を行った。表4-2は㎡に換算した数字も表示している。

表4-1より、調査対象とした分譲集合住宅の住戸専有面積は、家族向けのタイプの標準的な規模である。表4-2より、『松任』は、40坪～50坪である世帯が最も多く、次いで30坪～40坪、50坪～60坪である世帯が多く、30坪～60坪で80%を占める。『羽咋』は、最も多いのは50坪～60坪の世帯で、30坪～60坪であるのは65%である。70坪以上の広い住宅である世帯の割合が高い。『松任』は計画的に宅地造成、分譲されているため、敷地面積に大きな差異がない。従って、容積率いっぱいの住宅をそれぞれ建設すると、ほぼ住宅面積も同様とならざるをえない。

次に独立住宅である『松任』と『羽咋』の敷地面積を表4-3に示す。

表4-3 『松任』 『羽咋』 敷地面積

	『松任』	『羽咋』
	N=145	N=84
～40坪	2.1 %	7.1 %
40坪 (132㎡) ～50坪	1.4	6.0
50坪 (165㎡) ～60坪	3.4	15.5
60坪 (198㎡) ～70坪	2.7	9.5
70坪 (231㎡) ～80坪	42.8	13.1
80坪 (264㎡) ～90坪	15.2	9.5
90坪 (297㎡) ～100坪	13.8	9.5
100坪 (330㎡) ～110坪	15.2	9.5
110坪 (363㎡) ～120坪	1.4	3.6
120坪 (396㎡) ～130坪	0	3.6
130坪 (429㎡) ～140坪	0	1.2
140坪 (462㎡) ～	0	11.9

～は前数字以上後数字未満を示す

前述のように、『松任』は計画的に敷地造成されているため、70坪～80坪の世帯が40%を占める。それに対して既成市街地の『羽咋』では、敷地面積にばらつきがみられる。最も多いのが、50坪～60坪で、『松任』と比較すると狭いが、140坪以上の世帯が12%もあり、住宅間格差が大きい。

第2節 住宅タイプ

各調査対象住宅の住宅タイプを表4-4に示す

表4-4 住宅タイプ

	『金沢』	『松任』	『羽咋』
	N=88	N=165	N=100
2LDK	9.0 %	1.8 %	0 %
3DK	0	2.4	3.0
3LDK	82.9	14.2	0
4DK	0	0	4.0
4LDK	2.2	41.2	4.0
5DK	0	0	4.0
5LDK	0	26.1	7.0
6DK	0	0	13.0
6LDK	0	9.1	3.0
7DK	0	0	12.0
7LDK	0	1.2	7.0
8DK	0	0	13.0
8LDK	0	0	3.0
9DK	0	0	6.0
9LDK	0	0	2.0
10DK	0	0	9.0
10LDK	0	0	3.0
その他	5.7	3.6	7.0

『金沢』は住戸タイプが3LDK中心の分譲集合住宅を調査対象に選定したため、3LDKが80%を越えている。

『松任』は、4LDKと5LDKが多く、合わせて67.3%を占める。DKタイプは4.2%、LDKタイプは95.2%でLDKタイプが圧倒的に多い。3DK、2LDKなどの部屋数の少ない住宅タイプには、「単身者」や「夫婦のみ」の世帯が多く居住している。また、3LDK、4LDKは「夫婦+長子6才以下」の割合が高い。5LDK以上の部屋数の多い住宅タイプでは、三世代家族の割合が高くなる。

『羽咋』は、『松任』と異なり、DKタイプが多く、LDKタイプが少ない。DKタイプは70%、LDKタイプは30%である。部屋数が最も少ないタイプは3DKで、最も多いタイプは13DKで、前述のように『羽咋』は住宅間の規模や部屋数の格差が大きい。『羽咋』も『松任』と同様に、居住している家族構成と住宅タイプの関係は同じ傾向がみられる。

第3節 所有関係

住宅の所有関係を表4-5に示す。

表4-5 住宅の所有関係

	『金沢』	『松任』	『羽咋』
	N=87	N=167	N=102
持ち家（注文）	—	46.2 %	79.4 %
持ち家（分譲）	60.9 %	52.6	14.7
民間借家	11.5	1.1	3.9
公的借家	—	—	—
給与住宅	27.6	0	1.0
その他	0	0	1.0

『金沢』は民間の分譲集合住宅である。しかし、購入した者から借家として借りている場合が民間借家と回答し、企業などが一括購入し社宅としている場合が給与住宅との回答になる。居住年数との関係を見ると、3年未満の居住年数の短い世帯に給与住宅の割合が高く（66.6%）、持ち家の場合は8年以上居住している世帯の割合が高い（66.7%）。また、世帯主の年齢との関係をみたと、持ち家の割合が世帯主が20代は33.3%、30代52.6%、40代54.3%、50代66.7%、60代87.5%、70代85.7%と、世帯主年齢が高くなるに従い持ち家の割合が高くなり、給与住宅の割合が低くなる。また、世帯主の職業との関係を見ると、管理職と販売・サービス職に給与住宅の割合が高い。

『松任』は石川県住宅供給公社の計画的戸建て住宅地である。民間借家と回答した2世帯以外は全て持ち家である。注文と分譲がほぼ半々であるが、分譲がやや多くなっている。住宅タイプとの関係をもても、ほとんどのタイプで分譲、注文の割合は、やや分譲が多いという割合であるが、6LDKの大型の住宅の場合は、注文の割合が1/3を占め、多くなっている。

既成市街地の『羽咋』は注文持ち家が80%を占めているのは、古くからの住宅が多いためである。宅地分譲と建て売り住宅のセット販売している地域ではないため、分譲持ち家は少ない。また、地域としては賃貸住宅アパートが比較のみられるが、調査対象として独立住宅を抽出しているため借家の割合も少ない。居住年数と所有関係との関係を見ると、居住年数が11年以上の世帯は、分譲持ち家が73.3%、注文持ち家が88.5%あり、注文住宅の居住者は古くから居住している世帯が多い。民間借家の世帯（4世帯）は、2年以内の世帯が75.0%を占め、残りの1世帯も5年以内と、居住年数が短い。

第5章 住宅選択機構

第1節 前住宅

『松任』『羽咋』について、現住宅に居住する直前の住宅について調査した。『金沢』については調査を行っていないが、平成5年度に筆者の研究室において、同様の条件で調査した民間分譲集合住宅の調査事例⁽¹⁾を参考にする。

(1) 所在地

『松任』の前住宅所在地は表5-1、『羽咋』は表5-2、『金沢』の参考事例は表5-3のようである。

表5-1 『松任』前住宅所在地

	N=171
松任市	15.2 %
加賀（松任市以外）	69.0
石川県（加賀以外）	4.1
北陸三県（石川県以外）	2.9
その他	8.8

表5-2 『羽咋』前住宅所在地

	N=88
羽咋市	79.0
能登（羽咋市以外）	7.0
石川県（能登以外）	7.0
北陸三県（石川県以外）	0
その他	7.0

表5-3 金沢市民間分譲集合住宅 前住宅

	N=96
金沢市	40.6
加賀（金沢市以外）	7.3
石川県（加賀以外）	0
北陸三県（石川県以外）	0
その他	52.1

(2) 所有関係と建て方

『松任』の前住宅の所有関係と建て方は表5-4、『羽咋』は表5-5、『金沢』の参考事例は表5-6に示す。

表5-4 『松任』前住宅所有関係と建て方

	独立住宅	集合住宅	その他	全体
親の家	11	0	0	6.4% n=11
持ち家	105	2	0	62.2% n=107
公共借家	0	11	1	7.0% n=12
民間借家	8	25	0	19.2% n=33
給与住宅	6	1	1	4.7% n=8
その他	1	0	0	0.6% n=1
全体	76.2% n=131	22.1% n=39	1.2% n=2	N=172

表5-5 『羽咋』前住宅所有関係と建て方

	独立住宅	集合住宅	その他	全体
親の家	14	1	0	16.3% n=15
持ち家	59	0	1	65.2% n=60
公共借家	2	1	1	4.3% n=4
民間借家	3	4	1	8.7% n=8
給与住宅	1	2	0	3.3% n=3
その他	1	0	0	1.1% n=1
全体	87.9% n=80	8.8% n=8	3.3% n=3	N=91

表5-6 『金沢』参考事例前住宅所有関係と建て方

	独立住宅	集合住宅	その他	全体
親の家	17	0	1	18.0% n=18
持ち家	20	7	2	29.0% n=29
公共借家	0	1	3	4.0% n=4
民間借家	6	10	3	19.0% n=19
給与住宅	5	16	7	28.0% n=28
その他	0	1	1	2.0% n=2
全体	48.0% n=48	35.0% n=35	17.0% n=17	N=100

『松任』『羽咋』ともに、前住宅が独立住宅の持ち家である世帯の割合が最も高い。次いで多いのが、『松任』では民間借家の集合住宅、つまり民間賃貸マンション、『羽咋』は親の家である。『羽咋』では持ち家と親の家の独立住宅の割合が高く、集合住宅は少ない。『松任』は、『羽咋』と比較し集合住宅の割合がやや高い。『金沢』の参考事例も、最も多いのは独立住宅の持ち家であるが、民間借家の集合住宅、給与住宅の集合住宅、持ち家の集合住宅など、集合住宅の割合が高い。

第2節 入居理由

現住宅に入居を決定する際に、居住者はどのような事を考慮しているかを知るために、いくつかの入居理由となると思われる項目を列挙し、各項目について、『松任』『羽咋』では3段階、『金沢』の参考事例では4段階にて、各項目がどの程度入居理由になっているかを回答させた。その結果を『松任』は図5-1、『羽咋』は図5-2、『金沢』の参考事例は図5-3に示す。

(1) 『松任』

最も入居理由になっているのが「日当たり・風通しがよい（かなり：59.1%、やや：33.3%）」である。次いで「周りの自然環境がよい（かなり：56.5%、やや：34.7%）」である。日当たり・風通し・自然環境などが主な入居理由である。入居理由「周りの自然環境……」と家族構成との関連をみると、単身者で「かなり理由になっている」と回答したのが42.8%、夫婦のみ（妻40才未満）では38.9%とすくないが、子どもが小学生以上の世帯では、「かなり理由になっている」と回答する世帯の割合が高くなる。夫婦+長子6才以上では55.3%、夫婦+長子7～11才では60.0%などとなる。また、「住宅の広さや間取りが

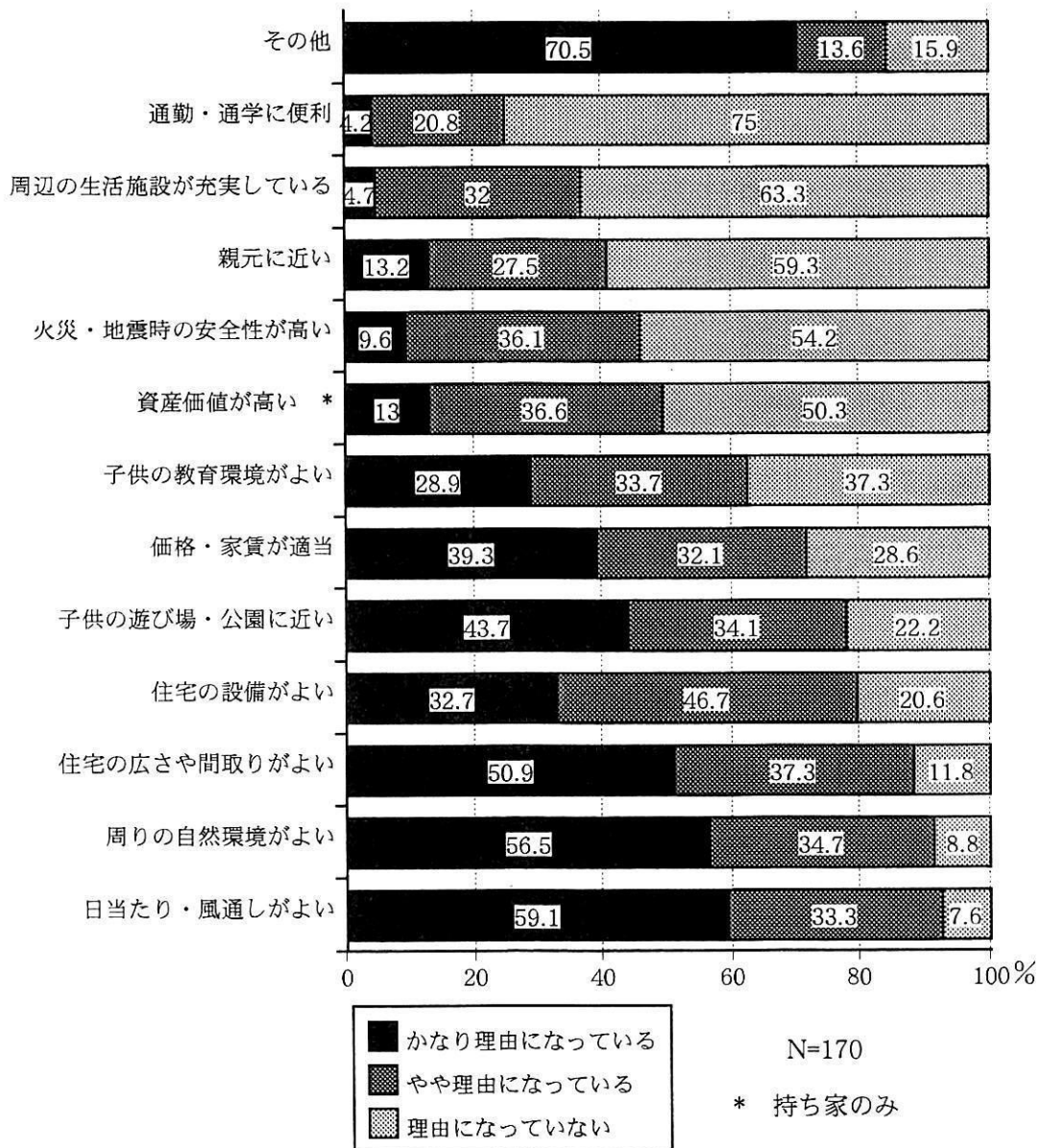


図 5-1 『松任』入居理由

よい（かなり：50.9%、やや：37.3%）」「住宅の設備がよい（かなり：32.7%、やや：46.7%）」も回答率が高く、家族や好みに合わせて注文住宅を新築、あるいは分譲住宅を選択していることからくるものである。入居理由「住宅の広さや間取り……」と前住宅の所有関係との関係を見ると、前住宅が持ち家や親の家に同居の世帯は「かなり理由になっている」と回答した世帯は50.0%であるが、公共借家では66.6%、給与住宅では75.0%と高い。借家の居住水準が一般に低いためであろう。

入居理由にあまりならない項目として、「通勤・通学に便利（かなり：1.2%、やや：20.8%）」「周辺の生活施設（商店・銀行・病院等）が充実している（かなり：4.7%、やや：32.0%）」が挙げられる。金沢市郊外で交通の便が良くないことが不満であることがわかる。これらの生活上の利便性より、経済的に理由や自然環境を優先した選択理由である。

（2）『羽咋』

最も理由になっているのが「周辺の生活施設（商店・銀行・病院など）が充実している（かなり：53.9%、やや：31.6%）」と「通勤・通学に便利（かなり：54.8%、やや：30.1%）」である。羽咋市の中心部で鉄道駅、商店街、公共施設などが徒歩圏にあるため、生活上の利便性が高いことが理由になっている。入居理由「周辺の生活施設……」と家族構成との関係を見ると、単身者はすべて「かなり理由になっている」と回答し、また、長子が7才以上の世帯では、子どもの年齢が高くなるほど、その割合が高くなる。また、「日当たり・風通しがよい（かなり：45.8%、やや：29.2%）」、「周りの自然環境がよい（かなり：48.7%、やや：37.9%）」も高い割合で入居理由になっている。

理由になっていない項目は、「資産価値が高い（かなり：20.0%、やや：23.3%）」、「親元に近い（かなり：31.8%、やや：15.2%）」、「価格・家賃が適当（かなり：22.0%、やや：26.0%）」である。

（3）『金沢』参考事例

最も回答率が高かったのは、「生活施設（商店・病院・銀行など）がよい（かなり：63.5%、まあ：28.2%）」である。次いで順に「通勤に便利（かなり：62.5%、まあ：22.9%）」「住宅の広さ・間取りがよい（かなり：38.5%、まあ：35.4%）」「価格が手頃（かなり：22.9%、まあ：49.0%）」となる。入居理由にあまりならなかったのは、「自然環境がよい（かなり：8.3%、まあ：18.8%）」「資産価値の高さ（かなり：10.4%、まあ：28.1%）」である。入居理由になる項目は、マンションの交通、商店等の利便性のよいことや、オフィス街に近接している立地条件のよさが影響している。逆に市の中心部に立地するため、自然環境のよさはあきらめているか、あまり重視しない世帯が多い。

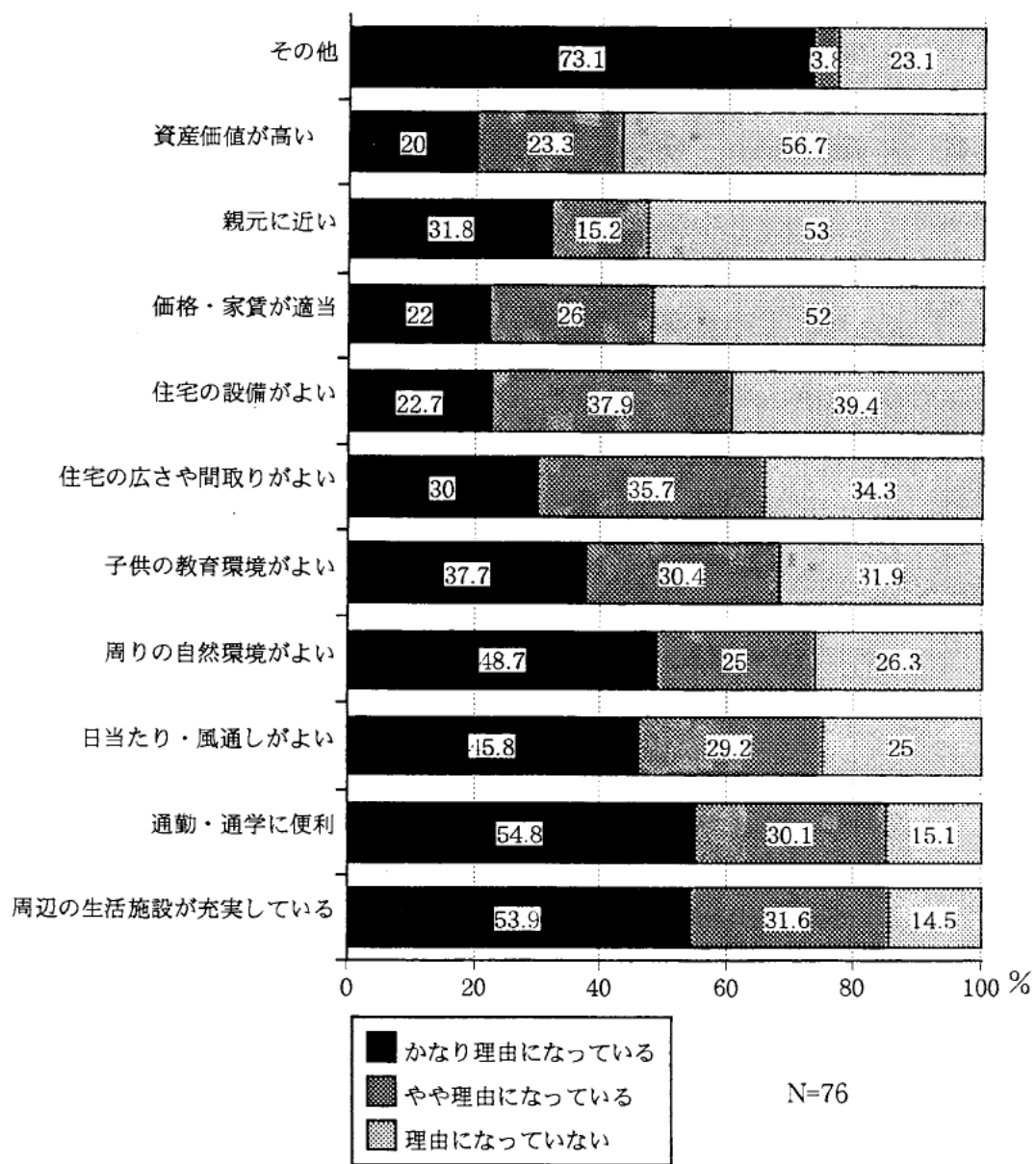


図 5-2 『羽咋』入居理由

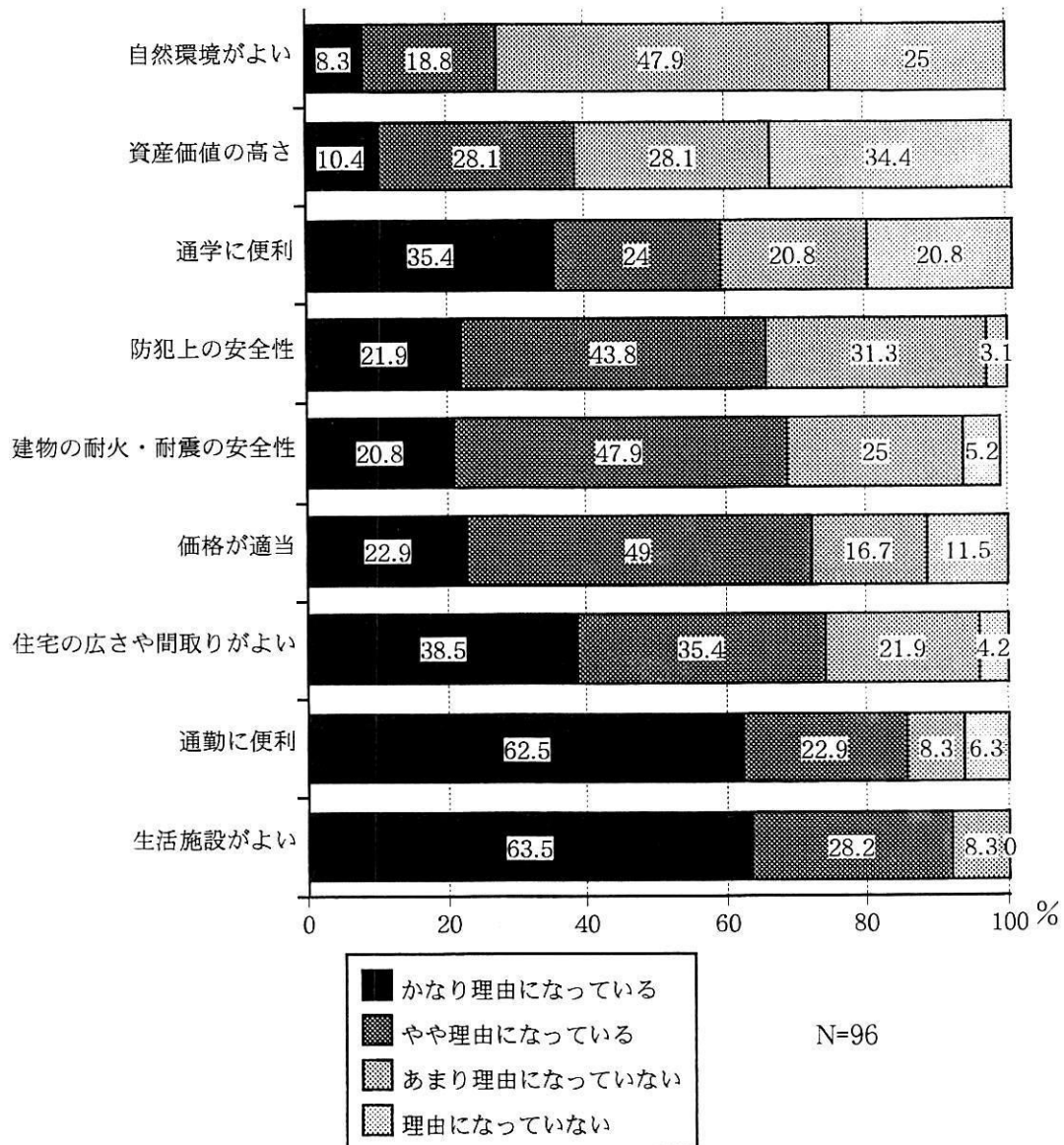


図 5-3 『金沢』参考事例入居理由

第 3 節 転居希望

『金沢』における定住・転居希望を表 5-7 に、『松任』『羽咋』における定住・転居希望を表 5-8 に示す。

集合住宅（『金沢』）の定住志向は低く、10年以上住みたいとする居住者は35%しかない。これは、「転勤するまで」が23.0%と最も多いことにみられるように、転勤族の社宅として供給されている場合や、そうでなくても、転勤するまでの住まいとして、社宅と同様の受けとめ方を居住者がしているためであり、現住宅を仮の住まいとする考え方である。また、他によい住宅（マンション・一戸建て）があればと考えている居住者は、「あと5年

くらい」を含めて28.7%あり、現住宅を定住する住宅に行き着くまでの過程の住宅と考えている。しかし、定住志向の居住者が25.3%22人おり、このうちの約80%の17人が現住宅に8年以上居住しており、これらは安定した定住層である。このように、都市中心部の集合住宅は、転勤族、転居過程層、定住層が混在しているといえよう。また、「その他」の回答で、現集合住宅以外に既に一戸建て住宅を持っており、両方を所有し続ける、週末は郊外の一戸建て、平日は現集合住宅に居住する、などの居住の拠点を2カ所持つ住み方がみられた。

『金沢』に対し、『松任』『羽咋』の定住層の割合は高い。「一生住みたい+できるだけ住みたい」をみると、『松任』では87.4%、『羽咋』では89.7%と、いずれも90%近くの居住者が定住を希望している。『松任』と『羽咋』では、『羽咋』のほうが定住志向が強い。これは、一戸建て住宅で、居住の最終目標である場合が多いこと、転勤族が非常に少ないと考えられることなどによるだろう。『松任』において、定住志向と居住年数の関係を見ると、居住期間が2年以内の居住者の定住希望は84.5%、居住期間が3～5年で定住希望が89.0%、居住期間が6年以上で定住希望が100%と、居住年数が長くなるに従い定住希望世帯の割合が高くなる。

表5-7 『金沢』における定住・転居希望

ずっと住み続けたい	25.3%
これから10年以上住みたい	10.3
あと5年くらい住みたい	16.1
他に良いマンションがあればすぐにでも移りたい	3.4
他に良い一戸建て住宅があればすぐにでも移りたい	9.2
転勤するまで住みたい	23.0
その他	12.6

N=87

表5-8 『松任』『羽咋』における定住・転居希望

	『松任』	『羽咋』
	N=168	N=97
一生住むつもり	38.1%	58.8%
できるだけ住み続けたい	49.3	30.9
いつか転居するが当分は住み続けたい	5.4	3.1
いずれ転居することになるだろう	5.4	6.2
今すぐにでも転居したい	1.8	1.0

(1) 野村和子「集合住宅における居住者の住居観」平成5年度金沢大学教育学部卒業論文

第6章 住まい方実態

この章では、日常の生活行為が主にどの部屋で行われているか、行為による空間利用の特徴を探る。『金沢』では住戸の間取り、居室構成は限られているため、居室の名称を〔リビングルーム（以下L）〕、〔ダイニングルーム（以下D）〕、〔和室1〕、〔和室2〕、〔洋室1〕、〔洋室2〕、〔洋室3〕、〔サービスルーム〕とし、回答者に各生活行為の場所を回答させた。〔和室2〕がある世帯は3世帯、〔洋室2〕がある世帯は78世帯、〔洋室3〕がある世帯は1世帯、〔サービスルーム〕がある世帯は4世帯、〔洋室1〕は1世帯だけでなく、〔和室1〕は全ての世帯にある。

『松任』『羽咋』では住宅の間取りや居室構成は本調査では全く把握できないため、居室の名称を以下の様に設定した。〔L〕〔D〕〔洋室〕〔和室〕。調査の方法は『金沢』と同様である。

第1節 食事

(1) 『金沢』

普段の家族の食事の場所として、ほとんどの調査対象者が回答したのは〔L〕または〔D〕である。〔D〕が84世帯の63.1%、〔L〕が45.2%である。〔L〕と〔D〕の両方使用しているのは9.5%(8世帯)である。その他は〔洋室1〕が1.2%あるにすぎない。ほぼ全世界帯が平面計画者の意図どおり〔L〕〔D〕で食事をしていることがわかる。

〔L〕と〔D〕で食事をする世帯が多いが、〔L〕と〔D〕のつながり方により差異が生じると考え、比較を試みた。まず、調査対象平面を〔L〕と〔D〕の関係から、以下の4つの型に分類した。

- ①《DK一体型》……………〔K〕と〔D〕が同一の室
- ②《LD一体型》……………〔L〕と〔D〕が同一の室
- ③《LDK一体型》……………〔L〕と〔D〕と〔K〕が同一の室
- ④《かぎ状連続型》……〔L〕と〔D〕が同一の室ではない(間仕切りはなく連続しているが、かぎ状になっており空間的に分離している)

調査対象住宅の「パークサイト玉川」は《かぎ状連続型》が多く、「ダイアパレス玉川公園」では《LD一体型》が多く見られたため、上記の型は、①《DK一体型》3.4%、②《LD一体型》54.5%、③《LDK一体型》1.1%、④《かぎ状連続型》40.9%の割合となった。

これらの型と食事をする部屋との関係を見ると、《LD一体型》《LDK一体型》では〔L〕と〔D〕の回答に全く差はないが、《かぎ状連続型》では、〔L〕が28.6%、〔D〕が77.1%となり、〔L〕より〔D〕のほうが回答が多い。空間的に〔L〕と〔D〕に分離した場合は〔D〕で食事をする人が多いといえる。

家族構成との関係を見ると(図6-1)、単身者や夫婦のみの世帯では〔D〕より〔L〕の使用が多い。〔L〕〔D〕両方を回答した世帯は、子どものいる世帯が多い。〔L〕と〔D〕は同時に使用するのではなく、場合によって使い分けていると考えられるが、子どものいる世帯では、生活上臨機応変な対応が必要なのであろう。

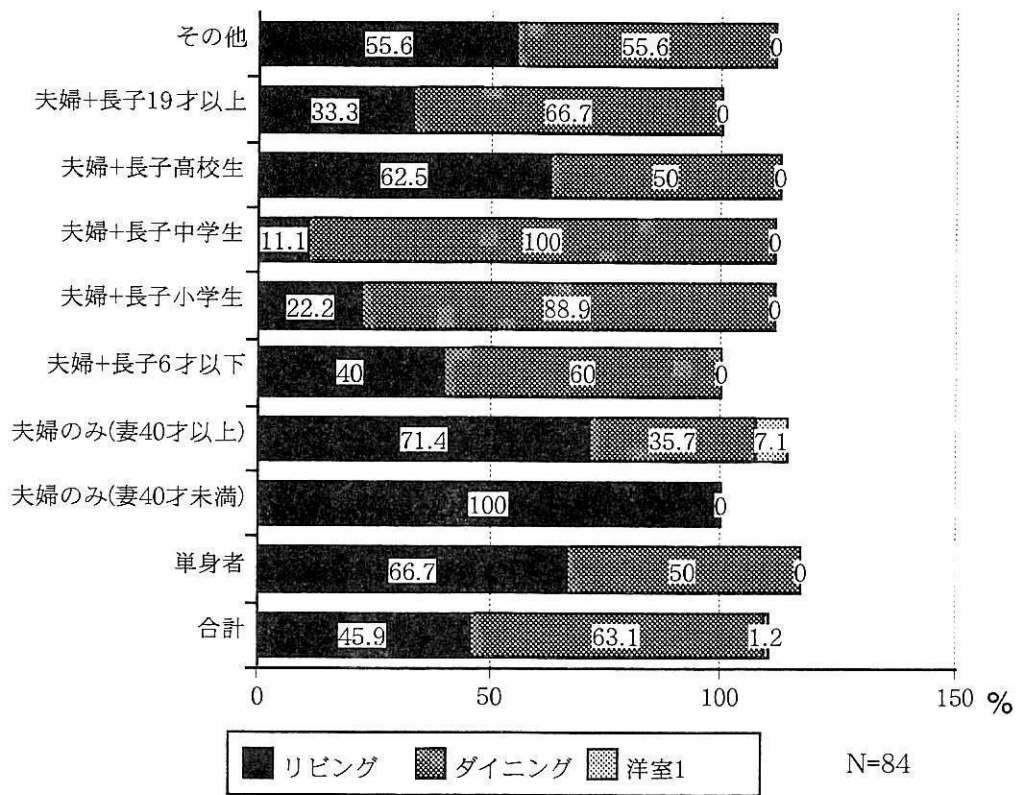


図6-1 家族構成と食事の場 『金沢』

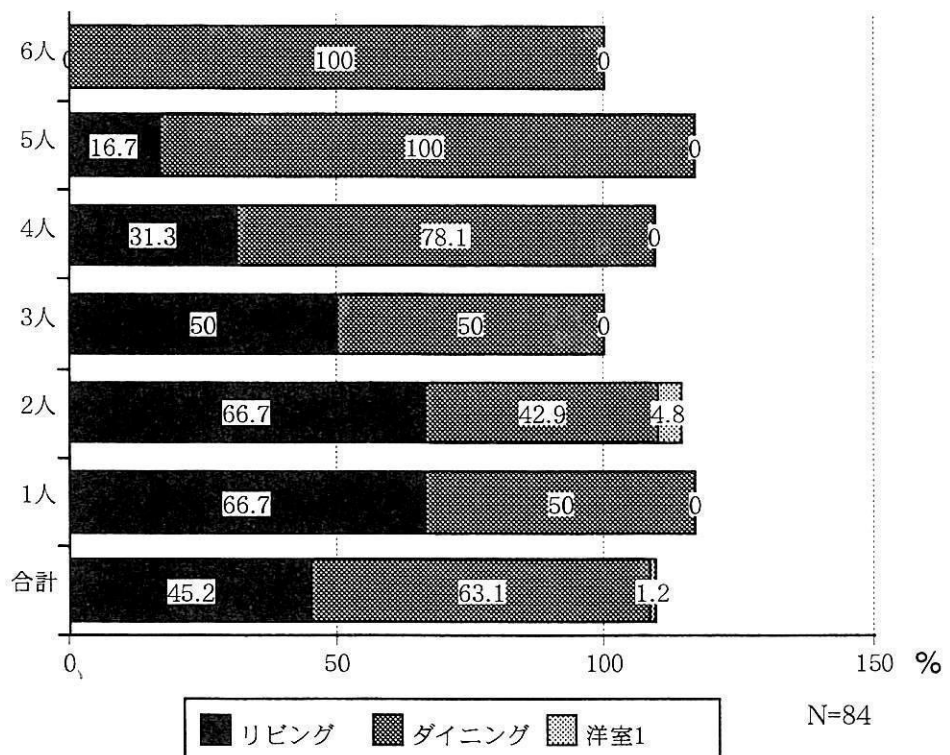


図6-2 家族人数と食事の場 『金沢』

家族人数との関係を見ると(図6-2)、家族人数が増加するに従い〔L〕の使用が減り、〔D〕の使用割合が増加する。家族人数が1人及び2人では〔L〕の使用は66.7%と最も多い。3人家族では50.0%、4人31.3%、5人16.7%、6人0%となる。3人家族で〔L〕と〔D〕の使用の割合が50%ずつで同じであるが、3人より少ないと〔L〕の使用が、4人以上の世帯では〔D〕の使用割合が高くなる。家族人数が少ない場合は、前述のように、場合によって食事場所を変更することが容易であるが、人数が多くなると空間の用途が固定的にならざるを得ない。

(2)『松任』

家族の食事に使用している部屋は、回答総数167世帯中、〔D〕が81.5%(132世帯)で最も多く、〔L〕は27.3%(44世帯)である。両方を回答したのは13.2%(22世帯)である。〔洋室〕は4.9%(8世帯)、〔和室〕は2.5%(4世帯)である。『金沢』と比較すると、〔D〕の専用使用が多い。食事をする部屋の広さをみると、表6-1のように6~8畳以上(調査対象者の回答による)ある世帯がほとんどであるが、市街地中心部の集合住宅では4畳(平面図より)あるかないかであり、食事の場の根本的な規模の相違があるため生じた差であろう。

表6-1 食事の場の規模 『松任』

	N=148
3 ~4.5 畳	8.1%
4.5~ 6	11.5
6 ~ 8	33.1
8 ~ 10	14.2
10 ~ 12	14.2
12 ~ 14	8.1
14 ~ 16	8.8
16 ~ 18	0.7
18 ~	1.4

食事の部屋と家族構成との関係を見ると(図6-3)、「夫婦のみ(妻40才未満)」の世帯で最も〔L〕で食事をする割合が高く47.4%ある。次いで多いのが「夫婦+小学生」で46.7%である。このライフステージをピークにライフステージがあがるに従いほぼ〔L〕の使用割合

が減少する。『金沢』ではこれに伴い〔D〕の使用割合が増加するが、『松任』ではどのライフステージも〔D〕の使用割合は80%前後で一定である。「夫婦+長子6才以下」以上のライフステージでは〔L〕〔D〕以外の部屋である〔和室〕や〔洋室〕の使用の割合が増加する。〔和室〕は食事は〔和室〕でとりたいとする世帯であるとみられる。〔洋室〕で食事をする世帯では、特に夫婦のみの世帯でその割合が高い。これは、夫婦それぞれの個室で別々に食事をするなど、特有の生活パターンによるものと推察される。

家族人数との関係を見ると、図6-4に示すように人数による特徴はみられず、1~5人の世帯では30%程度の世帯が〔L〕を使用し、『金沢』でみられたように、家族人数が増加するに従い〔L〕の使用が減少することはない。前述のように『金沢』の場合は家族人数上面積に余裕のある世帯で、食事の場の〔L〕への拡張あるいは変更が可能であるため〔L〕で食事をする世帯があったと考えられるが、『松任』の場合は多くは注文住宅で面積も比較的十分とられているため、『金沢』と同様ではない。

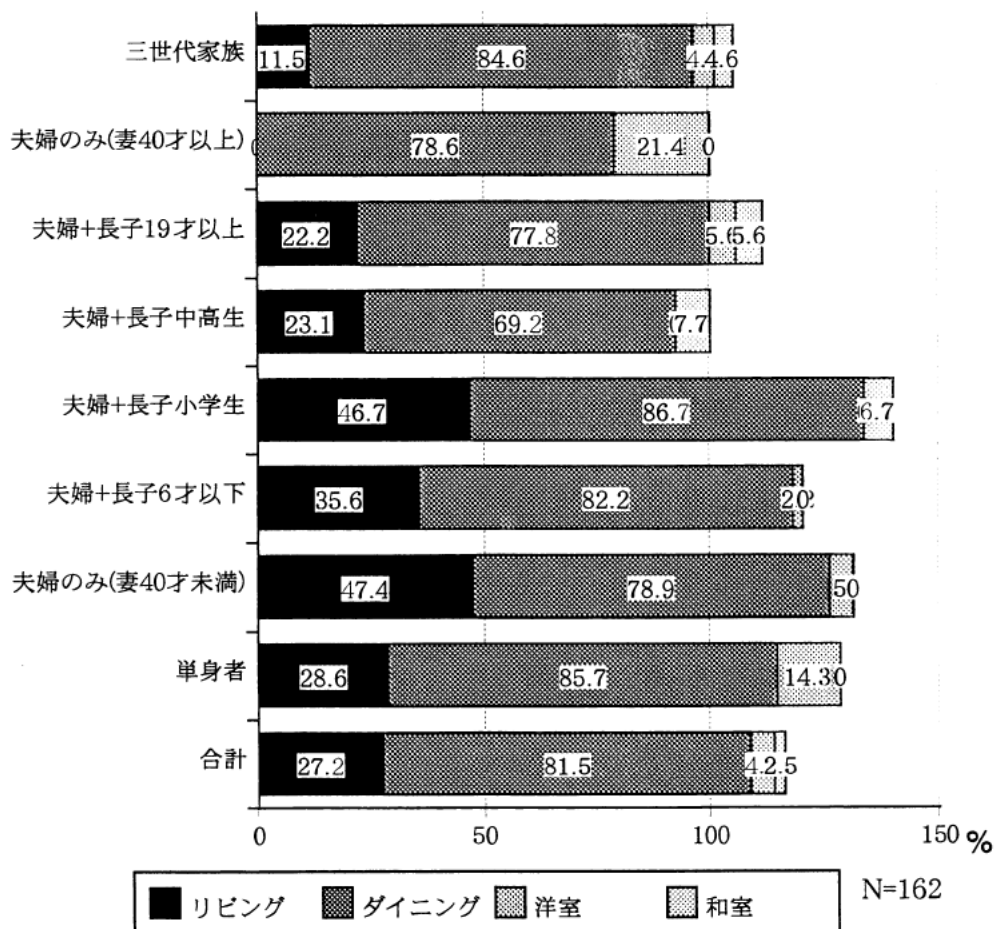


図6-3 家族構成と食事の場 『松任』

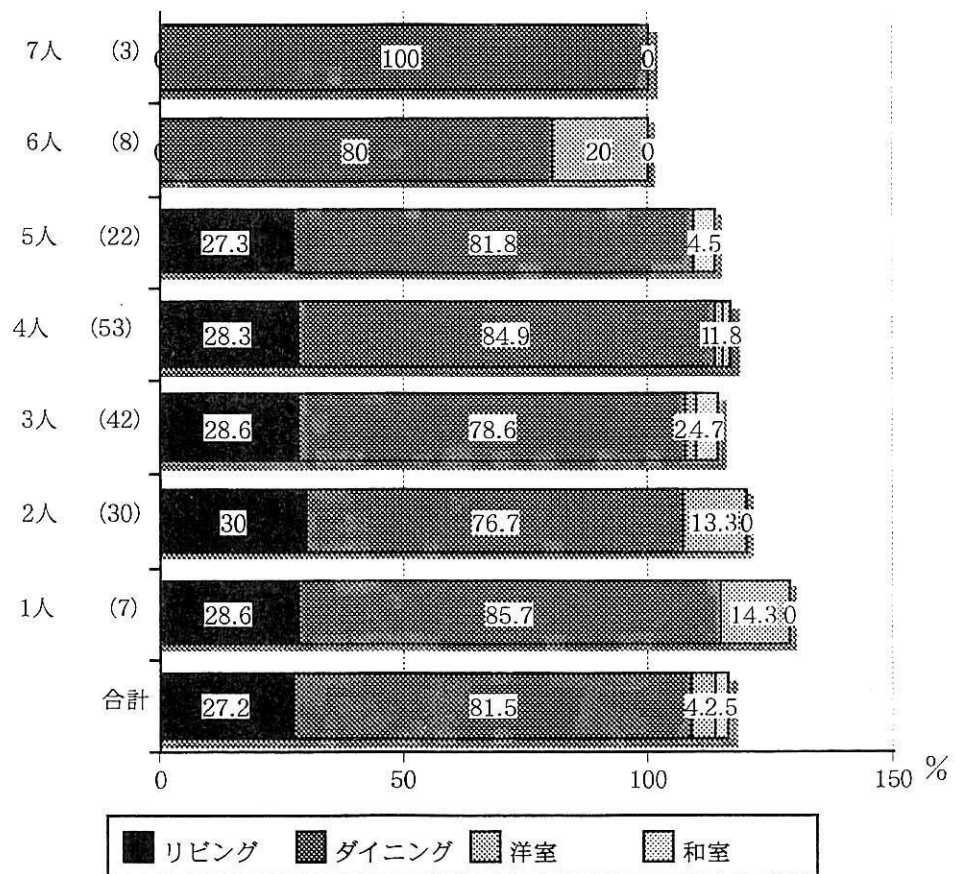


図6-4 家族人数と食事の場 『松任』

(3) 『羽咋』

家族の食事に使用している部屋は、回答総数104世帯のうち、〔和室〕が最も多く40.2% (39世帯)、次いで〔K〕が多く37.1%(36世帯)である。〔D〕は21.6%(21世帯)、〔L〕は7.2%(7世帯)、〔洋室〕は1.0%(1世帯)という結果である。『金沢』『松任』とも異なる傾向が見られる。つまり、『金沢』『松任』いずれにも全くあるいはほとんどみられない〔和室〕〔K〕が多く、あわせて77.3%を占めている。これは、第4章第2節(P14)でのべたように、『金沢』『松任』はLDKタイプがほとんどであるが、『羽咋』は30%しかなく、DKタイプが70%となっているためである。〔K〕はおそらく多くの場合DKで、通常台所と称していることが多いため回答時に〔台所〕としたものと思われる。住宅の建設年が古く、また、調査対象者の年齢も高いため、DKタイプあるいはKタイプであっても食事を〔和室〕でする世帯が多いのであろう。

表6-2 食事の場の規模 『羽咋』

	N=75
3 ~4.5 畳	0 %
4.5~ 6	1.3
6 ~ 8	44.0
8 ~ 10	38.7
10 ~ 12	8.0
12 ~ 14	4.0
14 ~ 16	1.3
16 ~ 18	2.7
18 ~	0

食事の場の規模を表6-2に示す。6~8畳、8~10畳がほとんどである。『金沢』よりはかなり広いが、『松任』のように分散しておらず、6~10畳となっている。茶の間としての和室の存在が推察される。

家族構成との関係を見ると(図6-5)、ライフステージの高い世帯で〔和室〕で食事をする世帯の割合が高くなる傾向がみられる。

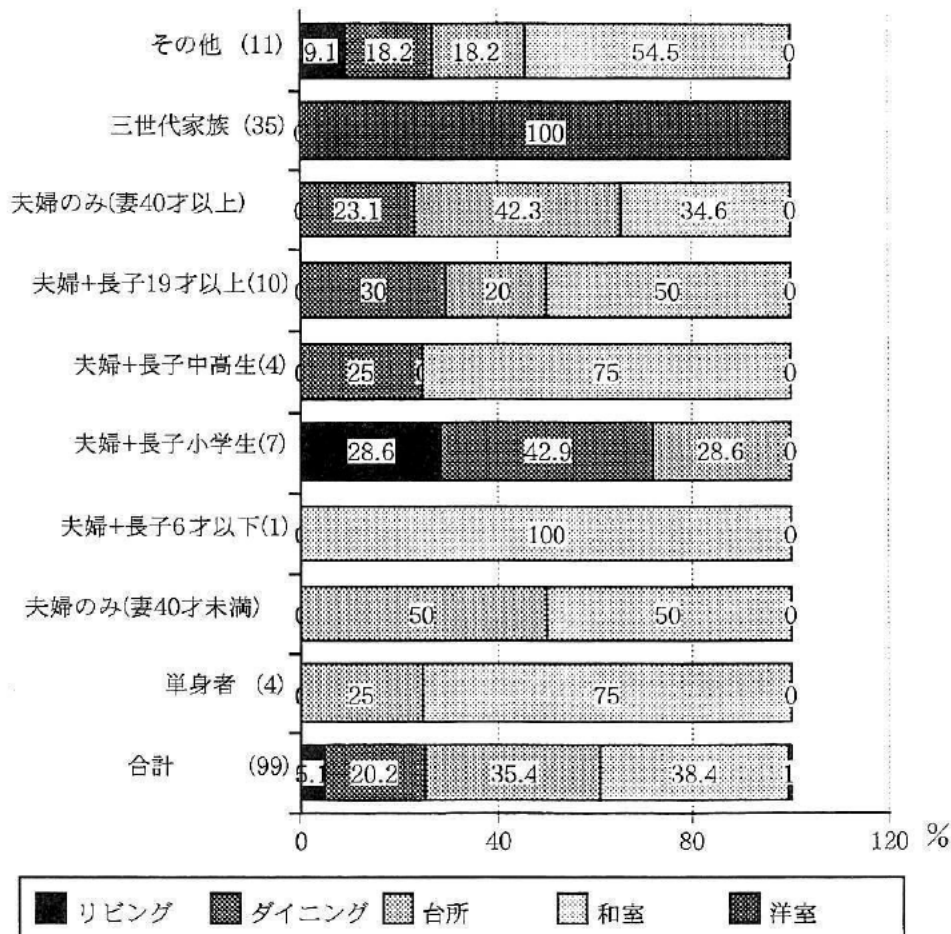


図6-5 家族構成と食事の場 『羽咋』

第2節 団らん

(1) 『金沢』

団らんをする部屋を訊ねると圧倒的に〔L〕が多く、85.0%(68世帯)を占めている。

〔D〕は28.8%(23世帯)、〔和室1〕が3.8%(3世帯)、〔洋室2〕が1.3%(1世帯)である。その他の居室には回答がない。

〔L〕と〔D〕のつながり方(6章第1節参照)が、《かぎ状連続型》である場合は、団らんは〔D〕でなされることが少なく、〔L〕で集中的にされる。つまり、《かぎ状連続型》は〔D〕と〔L〕の空間的分離がされているため、行為も分離して行われる傾向がみられる。

また、なぜその部屋を団らんの部屋にしたかを図6-6に示す選択肢で当てはまるものすべてを選択する方法で回答させた。もっとも多いのは「その部屋が居間になっている」という回答であった。集合住宅平面では、リビングは計画段階から団らんの場として予め想定されており、居住者にも入居以前から分譲パンフレットやモデルルームなどで知らされているた

め、リビングを団らん以外に利用することが少ないといえる。従って、前述のように「その部屋が居間になっている」という回答が多くなるのである。

次いで多いのが「テレビがおいてある」ことで、全体の65.1%ある。この理由は団らんがどの部屋で行われようと60~70%が理由に挙げている。日本の家庭における団らんが、テレビを中心として、あるいはテレビを仲介として成り立っている現状がわかる。

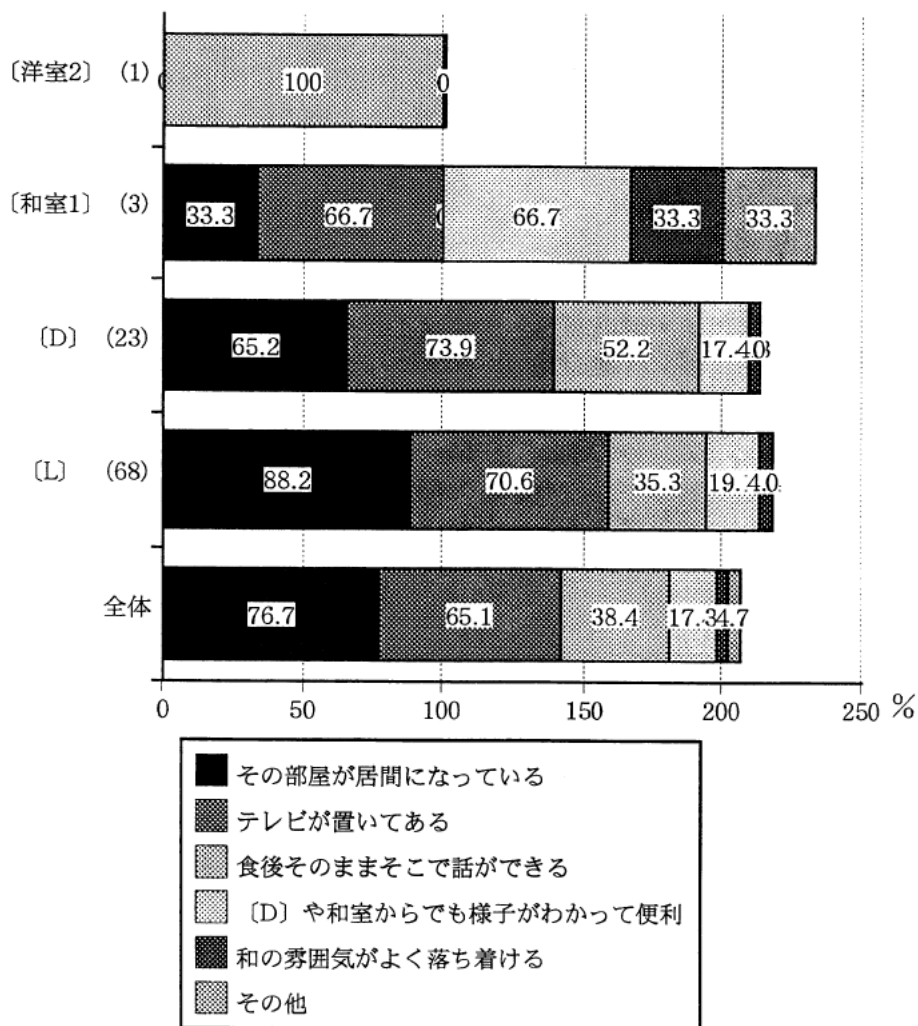


図6-6 団らんをする部屋にした理由

(2) 『松任』

団らんをする部屋は(図6-7)、〔L〕が82.0%、〔D〕が14.9%、〔洋室〕が9.9%、〔和室〕が6.2%で、ほとんどが〔L〕で団らんをしているといえる。家族構成別にみると(図6-7)、夫婦のみ(妻40才以上)、単身者は〔L〕の使用が50%しかなく、〔D〕や〔洋室〕〔和室〕など他室の割合が多い。

家族人数で見ると(図6-8)人数が多くなるほど〔L〕の使用の割合が増加する。1人は57.1%、2人69.0%、3人は80.5%、4人が88.5%、5人が90.9%、6人はやや減少するが、7人から100%となる。〔L〕を団らん室に使用することによって、他室の用途が専用化されるためである。つまり、〔L〕以外の居室は家族構成員の個室となり、団らんに使用できなくなるため、団らんは〔L〕に限定されがちになる。

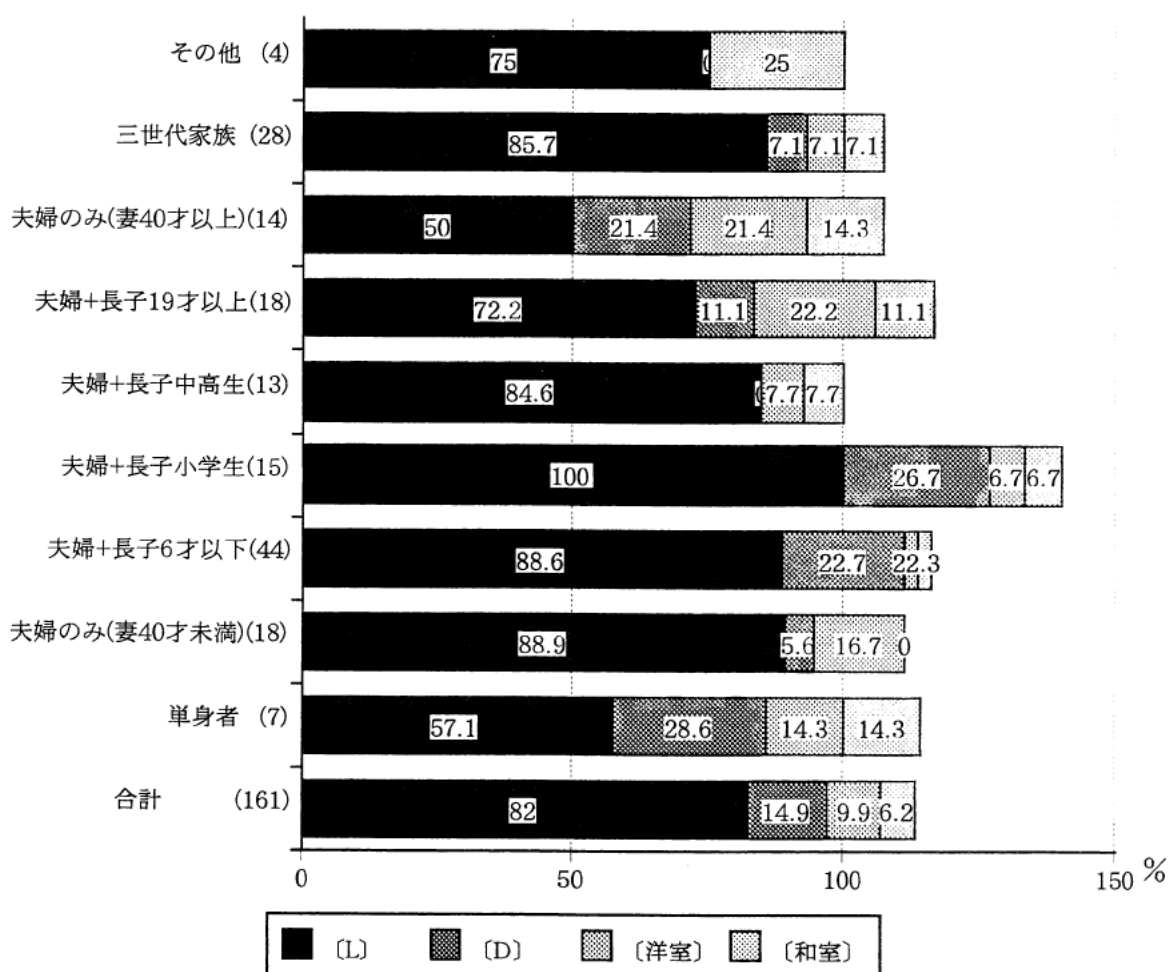


図6-7 家族構成とだんらんの場 『松任』

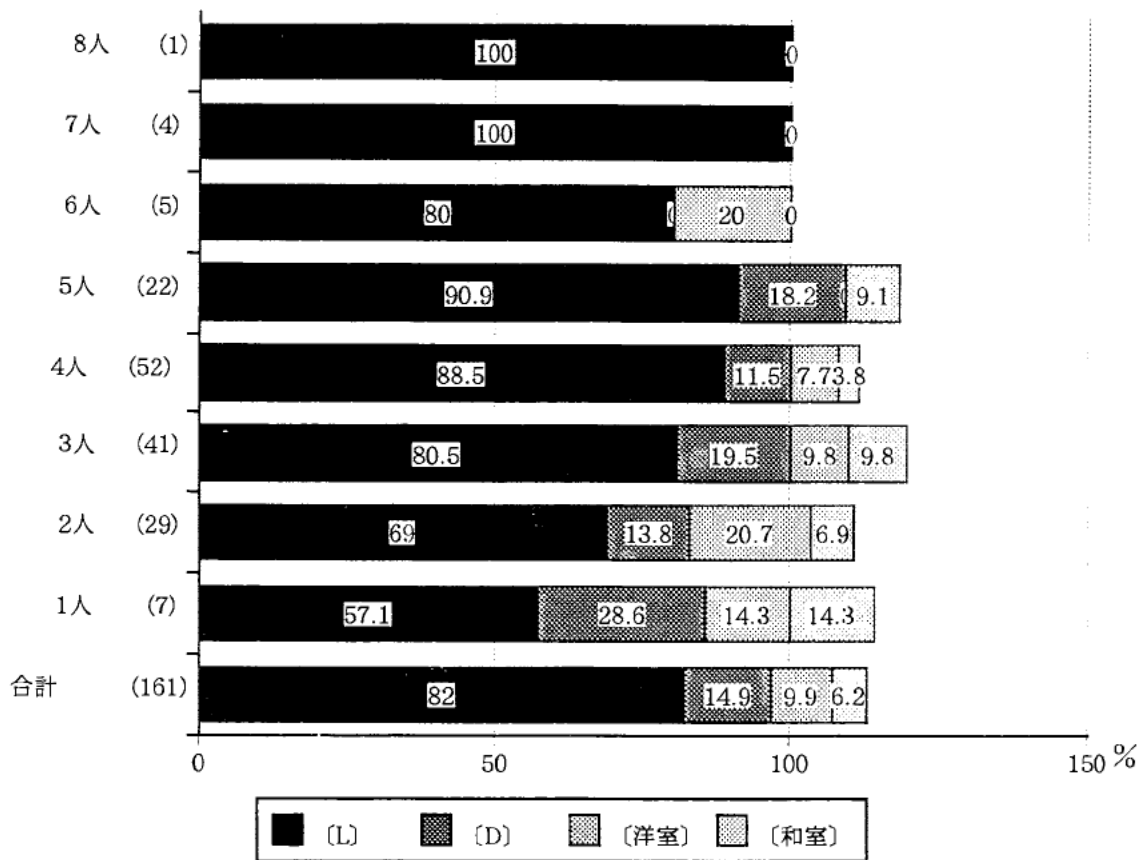


図6-8 家族人数と団らんの場 『松任』

全体的にみると団らんは〔L〕が最も多いが、表6-3に示すように、食事の場との関係を見ると、最も多いのは食事を〔D〕、団らんを〔L〕という一般的な使い方だが、食事を〔L〕でとる世帯の93%は団らんも〔L〕でしている。また、食事を〔洋室〕でとる世帯は、団らんを〔L〕ではなく〔洋室〕でする世帯の方が圧倒的に多く87.5%である。さらに食事を〔和室〕でとる世帯は、団らんを〔和室〕でする世帯が100%となっている。前述の一般的な住み方以外では、食事の場と団らんの場が一致する住み方が多い。逆に言えば、団らんは食事も含めた、あるいは延長線上にあるといえる。

表6-3 団らんの場と食事の場 『松任』

%	団らん [L] (132)	団らん [D] (24)	団らん [洋室] (16)	団らん [和室] (10)
食事 [L] (44)	93.2	27.3	9.1	2.3
食事 [D] (132)	84.5	18.6	6.2	4.7
食事 [洋室] (8)	25.0	0	87.5	0
食事 [和室] (4)	25.0	0	25.0	100

(3) 『羽咋』

『金沢』『松任』と異なり、『羽咋』では団らは〔和室〕で行われることが多い(図6-9)。〔和室〕は全体で82.6%である。残りの世帯は〔L〕が16.3%、〔台所〕が2.2%とごくわずかであった。これは、第1説食事でも述べたように、〔茶の間〕として和室を使用しているためと考えられる。

図6-9に示すように、家族構成別にみると、その他の世帯及び夫婦+長子小学生・中高生世帯でやや〔L〕の使用がみられるが、ほぼどのライフステージでも茶の間が一般的な団らんの場となっているといえよう。

団らんと食事の関係をみると(表6-4)、最も多いのが食事も団らんも〔和室〕である。『金沢』『松任』とも異なる傾向がみられる。少数の例外はあるが、〔L〕で食事をとの裸体以外は、どこで食事をしてても〔和室〕で団らんする場が圧倒的に多いといえよう。

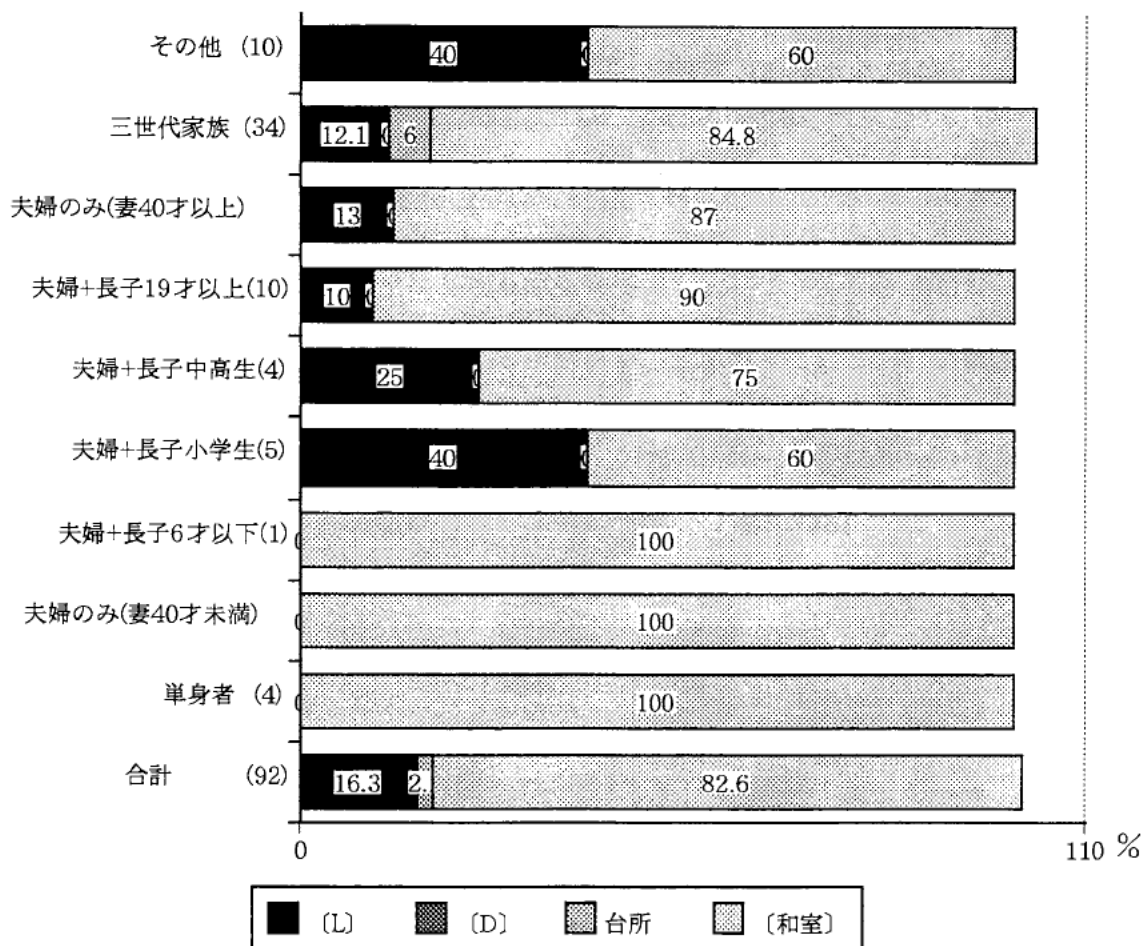


図6-9 家族構成と団らんの場 『羽咋』

表6-4 団らんの場と食事の場 『羽咋』

%		団らん [L] (16)	団らん [D] (0)	団らん 台所(2)	団らん [和室] (81)
食事	[L] (6)	100	0	0	0
食事	[D] (21)	23.8	0	0	76.2
食事	台所(36)	13.9	0	5.6	80.6
食事	[和室] (39)	2.6	0	0	97.4
食事	[洋室] (1)	100	0	0	0

第3節 夫婦の就寝

(1) 『金沢』

世帯主の就寝の場を全体的にみると(図6-10)、「和室1」が47.7%、「和室2」が1.2%、「洋室1」が41.9%、「洋室2」が33.3%となり、「和室」と「洋室」の割合は、48.9%と75.2%であり、「洋室」の方が多く使用されている。

家族構成別にみると(図6-10)、夫婦+長子6才以下の世帯や夫婦+長子小学生世帯では「和室」の割合が低く、夫婦+長子中学生・高校生世帯では高くなる。子供が中学生・高校生の世帯では子供に個室を与えることが非常に多くなり、このために「洋室」を使用するため、「洋室」を夫婦寝室にするという要求があったとしても夫婦寝室にできない状況になるためである。

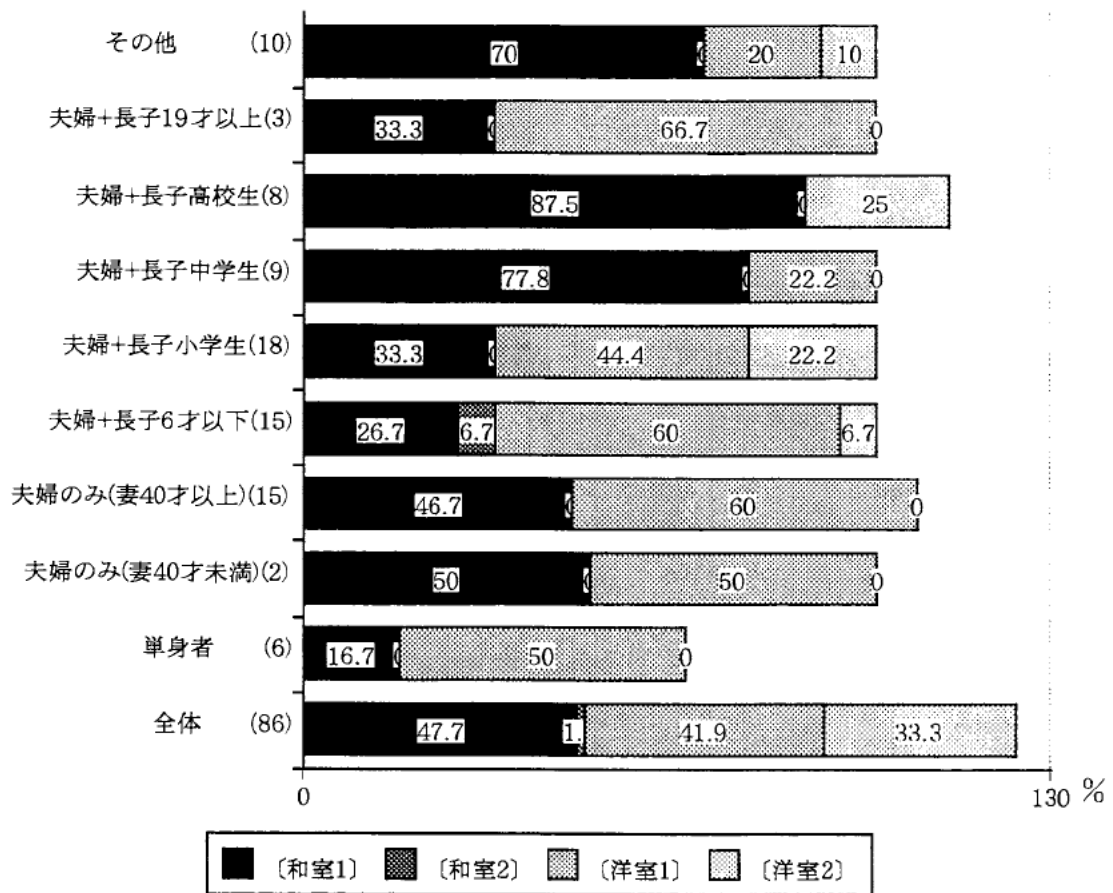


図6-10 家族構成と世帯主の就寝の場 『金沢』

一般に集合住宅では、夫婦寝室より子供寝室が優先してとられるため、接客や家事行為などに兼用されやすい〔和室〕を夫婦寝室にとる傾向がある。筆者が昭和54年から昭和60年にかけて、近畿大都市圏の中・高層分譲集合住宅約1700戸の住まい方調査を行った結果（「集合住宅居住世帯の住要求に関する研究」 山岸雅子 1987年 奈良女子大学学位論文）では、平面によっていくつかの住み方のパターンがあるが、次の結果が一般的に得られた。家族人数の少ない、あるいはライフステージの低い、居室選択に自由度の高い世帯では夫婦の洋室就寝が一定の割合でみられたが、子供の年齢があがるに従い、子供室に居住性の高い居室を与え、夫婦寝室をあんどん部屋にとることや、狭い方の居室にとること、接客や家事などに転用されやすい〔L〕の続き和室にとるなどの傾向がみられた。

これらの結果は前述のように昭和60年までの近畿大都市圏の集合住宅における住み方調査の結果であるが、金沢における集合住宅平面は、近畿大都市圏における昭和40年代、50年代に建設された典型的な平面と同様であり、近畿圏で昭和60年代以降に供給されている新しいタイプの平面は金沢には登場していないことから、前述の近畿圏における調査研究の成果を金沢においても援用できるだろう。

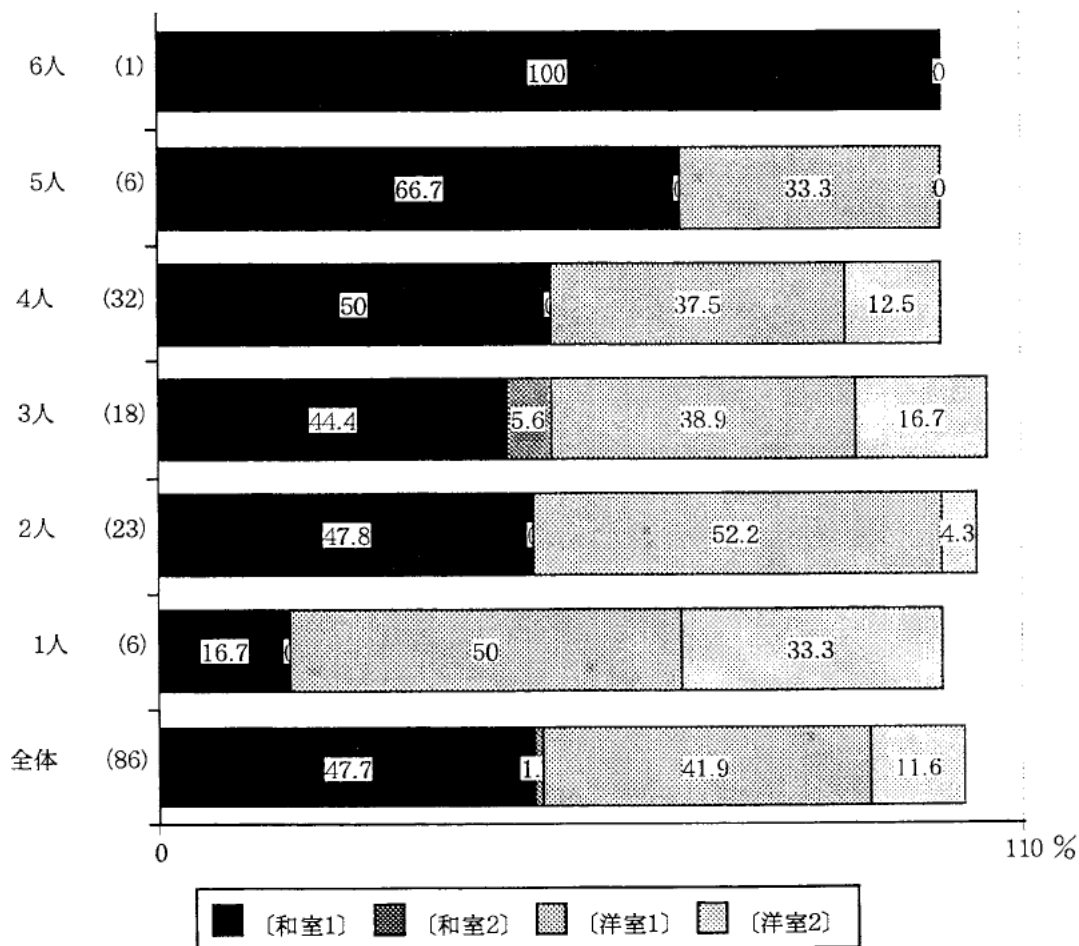


図6-11 家族人数と世帯主の就寝の場 『金沢』

さて、『金沢』における夫婦寝室のとり方を家族人数でみると(図6-11)、〔和室〕就寝は、全体では47.7%であるが、1人では16.7%、2人では47.8%、3人44.4%、4人50.0%、6人100%と、ほぼ、家族人数が増加するに従い〔和室〕就寝が多くなる。上述のように、個室に部屋をとられるため、団らん、家事行為、接客などに転用できる〔和室〕を夫婦寝室にしている。従って、夫婦寝室は個室化しておらず、夫婦寝室の独立性は子供寝室に比べ非常に低いと言えよう。

世帯主の配偶者の寝室については(図6-12)、〔和室1〕が60.3%、〔和室2〕が1.4%、〔洋室1〕が32.9%、〔洋室2〕が6.8%で、〔和室〕と〔洋室〕の割合は、61.7%と39.7%となる。世帯主の寝室と比較すると、〔和室〕の割合がかなり高いといえる。

世帯主と配偶者が同室か否かは、図6-12のとうりである。世帯主が〔和室1〕の場合の91.7%、〔和室2〕の100%、〔洋室1〕の64.5%、〔洋室2〕の28.6%が配偶者と同室に就寝している。つまり、〔和室〕の場合はほとんどが同室であるが、〔洋室〕の場合、特に規模の小さい洋室〔洋室2〕の場合は、配偶者は〔和室〕に就寝することが多い。これは、夫婦別就寝の場合は夫が洋室、妻が和室に就寝することが多いことを示している。

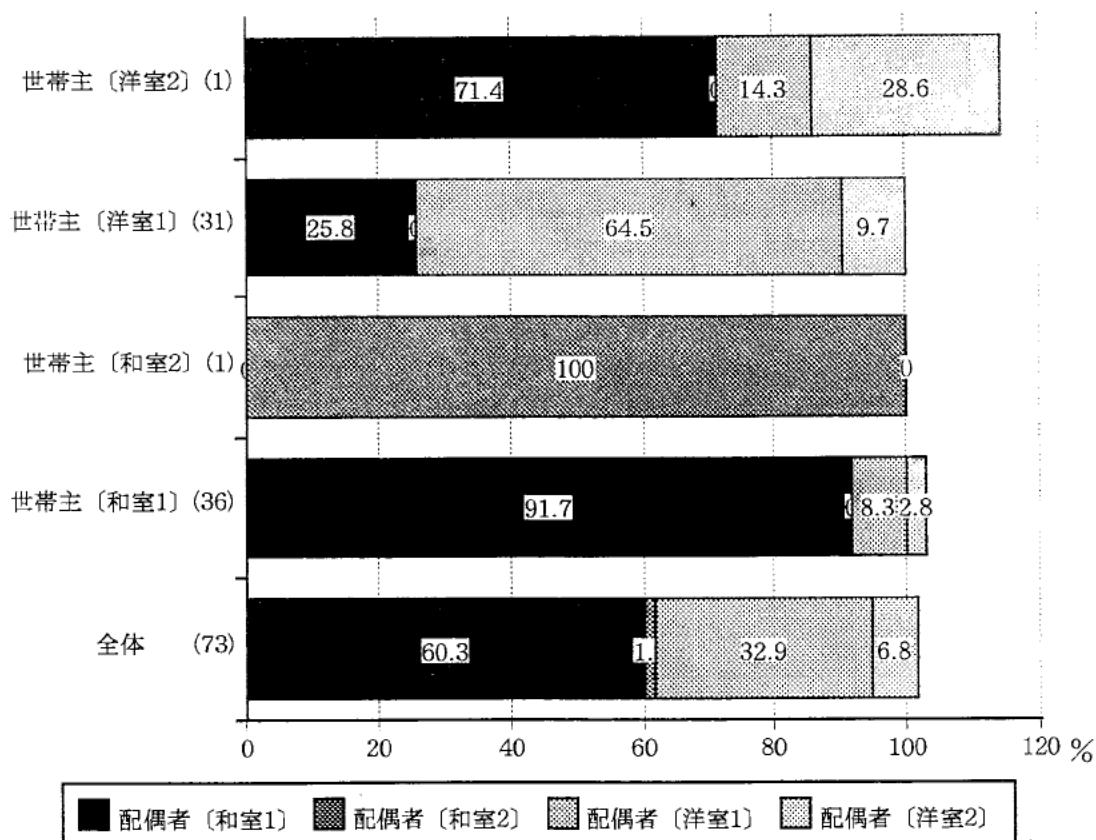


図6-12 世帯主と配偶者の就寝の場 『金沢』

このことは、前述の筆者の近畿大都市圏における中・高層集合住宅における調査研究の結果からもいえる。この調査研究から以下の成果が得られている。夫婦別就寝は平面がどうあれ10～20%の割合で見られるため、ほぼこの割合の世帯で、居住者の潜在的な住要求ととることができる。特に居室数に余裕のある世帯で多くみられ、ライフステージによって異なるいくつかの形態がある。乳幼児のいるライフステージでは授乳のための夫婦別就寝であるため、一時的なもので、子供に個室を与えた後には解消される。しかし、子供が中高生以上の熟年の夫婦にみられる夫婦別就寝要求は、基本的に「夫室」と「妻室」の要求である。これは書斎や趣味室への要求に発展する可能性をもつものである。

(2) 『松任』

世帯主と配偶者の就寝の場所を図6-13に示す。世帯主の就寝の場所は74.7%が〔洋室〕、〔和室〕は25.3%である。配偶者も〔和室〕が74.7%、〔洋室〕が25.3%で割合は同じであるが、若干別就寝がみられる。

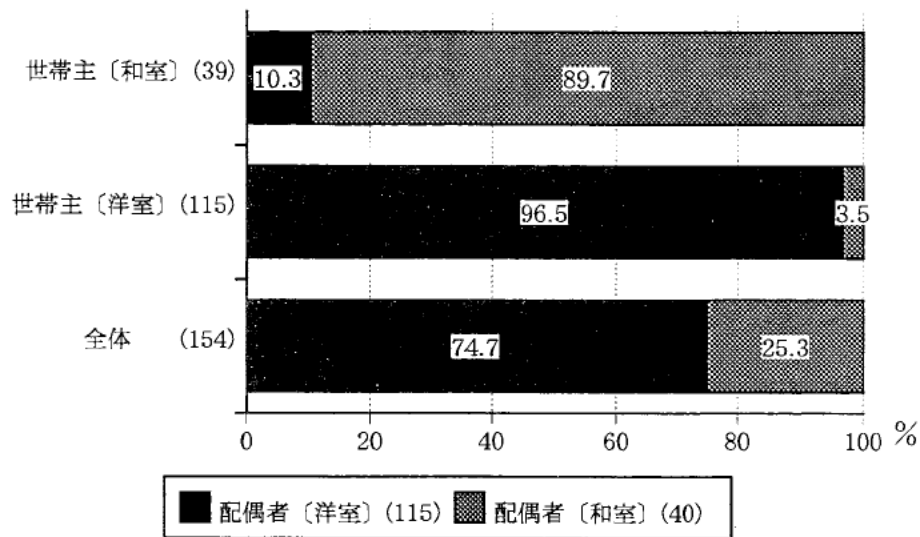


図6-13 世帯主と配偶者の就寝の場 『松任』

集合住宅の『金沢』と異なり、あるいは近畿圏の調査事例と異なり、注文独立住宅の『松任』では、家族の要求にかなり近い平面が実現している。しかも第1章 第3節 調査概要でも述べたように、山島台ニュータウンは平成以降順次建設供給されているため、居住者は入居からあまり年数がたっておらず、家族構成や人数などの変化がまだ少ない時期と考えられる。そのため、夫婦寝室の住要求が実態に反映されていると考えられる。夫婦寝室は『金沢』と比較すると〔洋室〕就寝が非常に多いことがわかる。前述のように集合住宅では〔洋室〕を子供の個室にとるため〔和室〕しか余らず、転用性の高い〔和室〕が夫婦寝室にとる傾向がみられたが、近年の新規供給の独立住宅では寝室を洋室に計画することが多いため、『松任』では〔洋室〕が多くなったのであろう。

(3) 『羽咋』

世帯主の就寝の場は、〔和室〕が多く81.3%、次いで〔洋室〕16.7%、〔L〕が2世帯で2.1%である。〔和室〕の割合が非常に高い。配偶者も同様の割合であるが、図6-14に示すように、世帯主が〔和室〕の場合の3.8%、〔洋室〕の場合の18.8%、〔L〕の50%が別就寝である。

夫婦の寝室が〔和室〕が多いことは、『金沢』や、特に『松任』とは異なる傾向である。これは、夫婦寝室に限らずどの用途の部屋でも〔和室〕の割合が高く、つまり、〔和室〕で構成された間取りのためである。

別就寝については、〔L〕で高いが、これはサンプル数が2のためであるが、〔L〕や〔洋室〕で就寝している夫あるいは妻は、就寝以外の目的に使用しそのまま自分の就寝室にしている、いわゆる〔L〕や〔洋室〕を個室化しているような場合、もしくは、通常〔和室〕就寝であるが、例えば子供の授乳期や夜泣きのために睡眠を邪魔されない(させない)ために、一時的に別室に移動している場合などが考えられる。

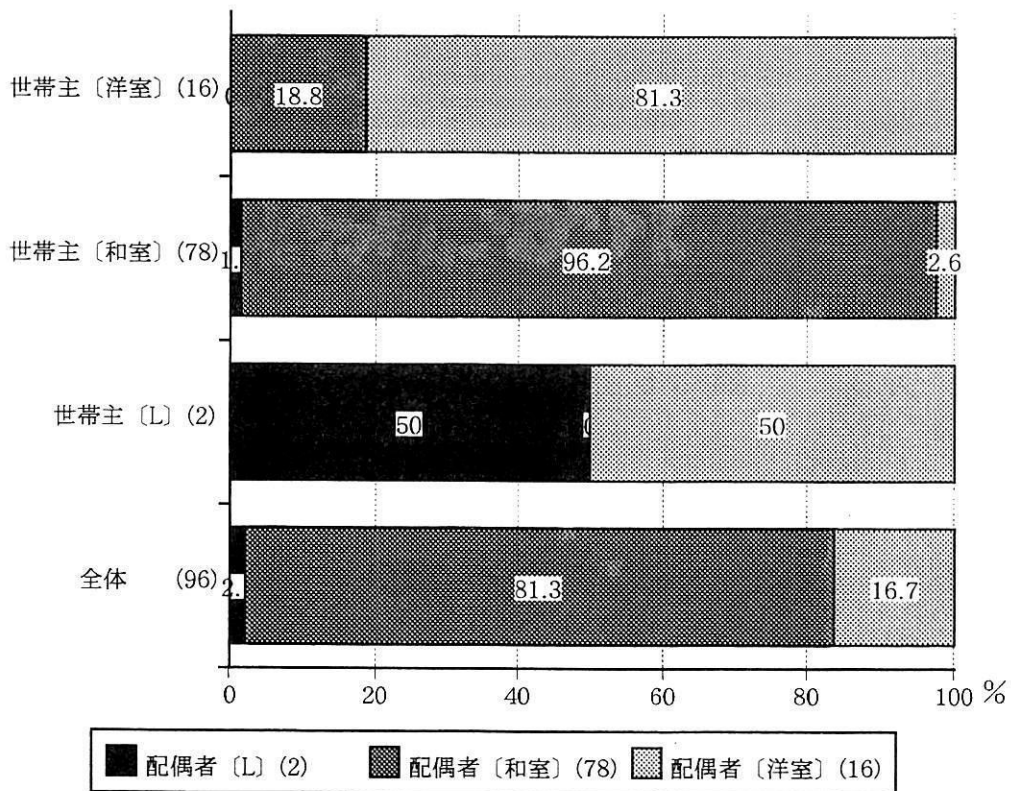


図6-14 世帯主と配偶者の就寝の場 『羽咋』

第4節 子供の就寝

(1) 『金沢』

『金沢』では第1子、第2子、第3子それぞれについて就寝室を調査した。その結果を図6-15に示す。

第1子の就寝室で最も多いのは〔洋室1〕で51.8%、次いで〔和室1〕28.6%、〔洋室2〕21.4%、〔和室2〕1.8%となる。〔洋室〕は併せて73.2%、〔和室〕は30.4%である(複数回答)。第2子の就寝室をみると、最も多いのは〔和室1〕で46.3%、次いで〔洋室1〕と〔洋室2〕が26.8%である。第3子は最も多いのは〔和室1〕で50%、次いで〔洋室1〕が37.5%、〔洋室2〕が12.5%である。

全体をみると、〔和室2〕のある間取りが少ないということはあるものの、〔洋室〕の割合が非常に高いといえる。

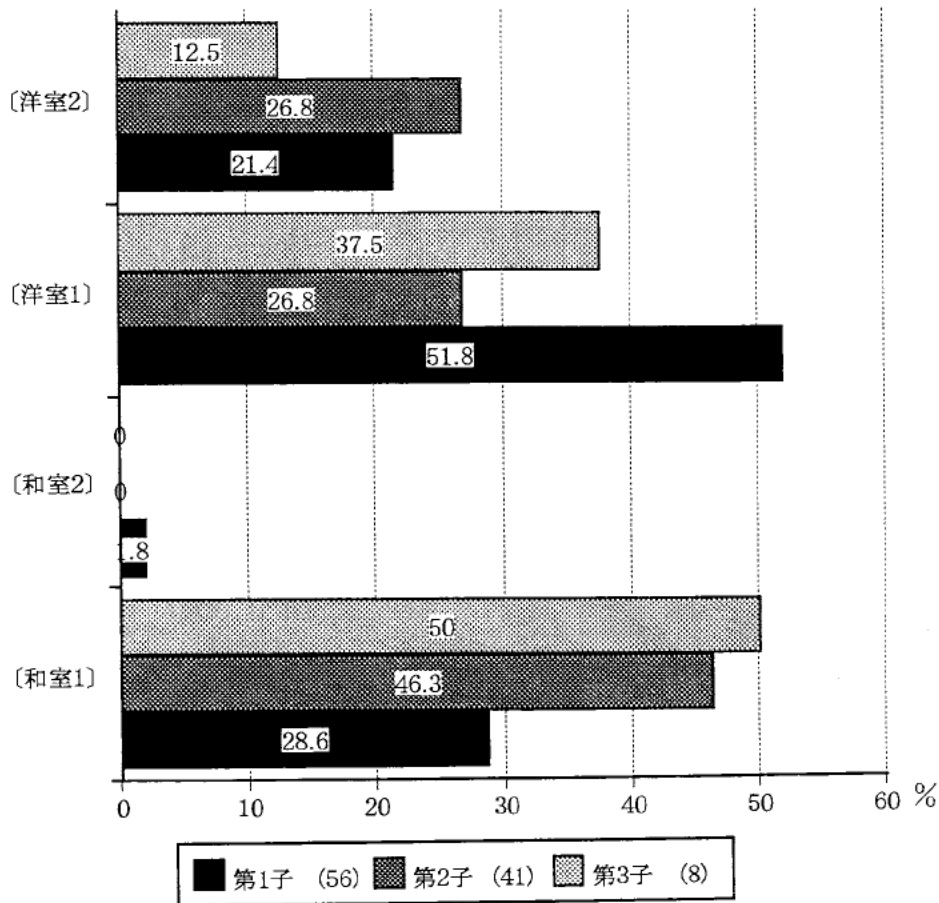


図6-15 子供の就寝場所 『金沢』

きょうだい間の関係をみると、第1子は2室あれば大きい方の洋室である〔洋室1〕に就寝することが多く、第2子、第3子は〔和室〕就寝が多い。これは、ひとつには、第1子が学齢期に達しているため、勉強部屋としての個室を与えられているが、第2子、第3子は年齢が低いため個室を持たず、親と同室就寝しているためである。また、第2子までが学齢期に達している場合は第1子、第2子が〔洋室〕となり、第3子は〔和室〕に就寝することになる。第1子と第2子は、第1子が大きい方の〔洋室1〕に、第2子は残りの洋室である〔洋室2〕に就寝する傾向がある。

第1子の年齢と就寝場所の関係をみたものが図6-16、第2子の同様の図が図6-17である。まず第1子をみると、どの年齢層でも〔洋室1〕の割合が高い。ただ、12才以上14才未満の年齢層では〔和室1〕の割合が最も高く、次いで〔洋室2〕、〔洋室1〕となる。また、10才以上から〔洋室2〕を就寝室にする世帯が現れる。これは、子供年齢が高くなり、下に学齢期の子供の数が増えるなど、ライフステージが高くなると居室の選択に余裕がなくなり、ライフステージの低い世帯では余剰室となっている居室が子供の個室にとられるためである。

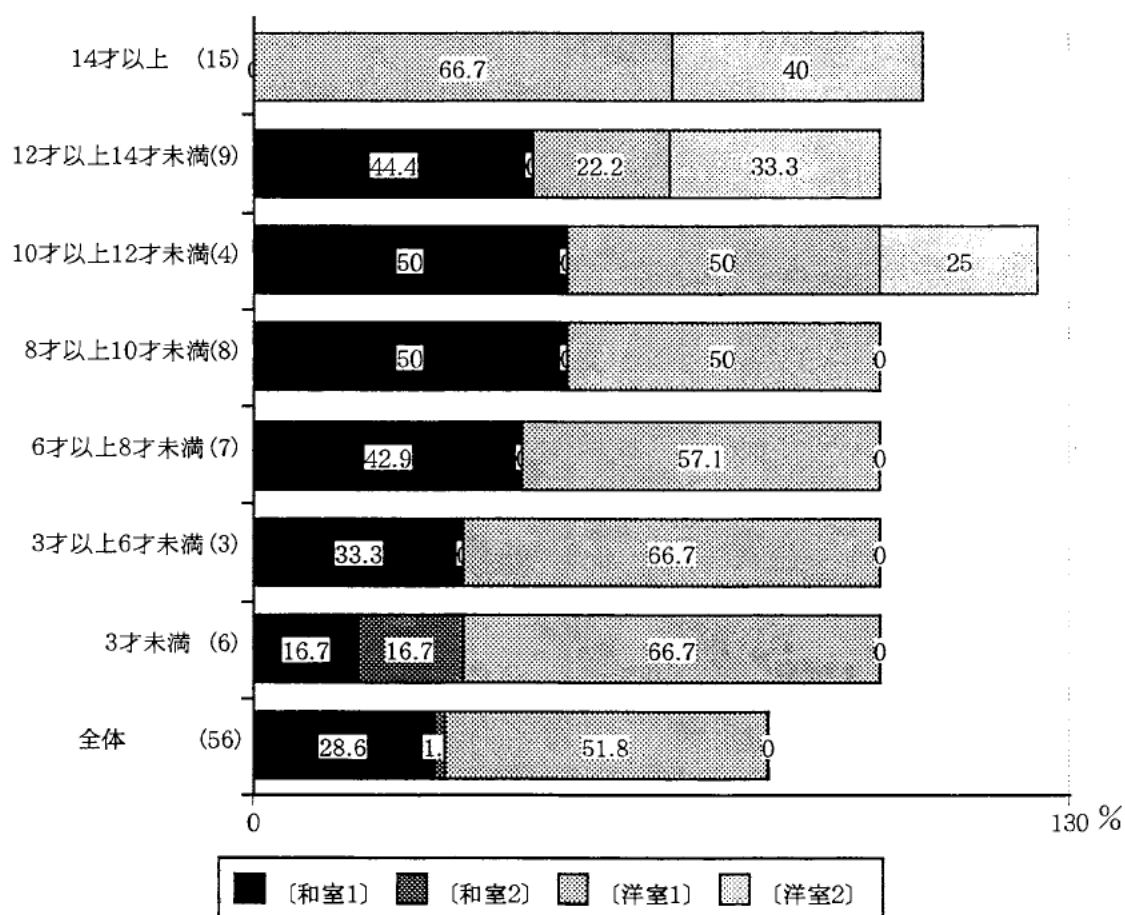


図6-16 第1子の年齢と第1子の就寝 『金沢』

第2子の就寝部屋は、年齢層の関係をみるとサンプル数が少なくなり、明確な傾向を論じるわけにはいかないが、第1子に比べ〔和室1〕の割合が高く、これは特に年齢の低い層に多く、年齢があがるに従いほぼ減少している傾向がみられるといえるだろう。〔洋室2〕を就寝室にしているのは、10才以上の年齢でみられる。第2子が10才以上であるのは、第1子が中学生、高校生の可能性も高く、個室を与えるために居室選択に最も余裕のないライフステージといえるだろう。そのため前述のように〔洋室1〕〔洋室2〕を子供の個室にしているためであろう。

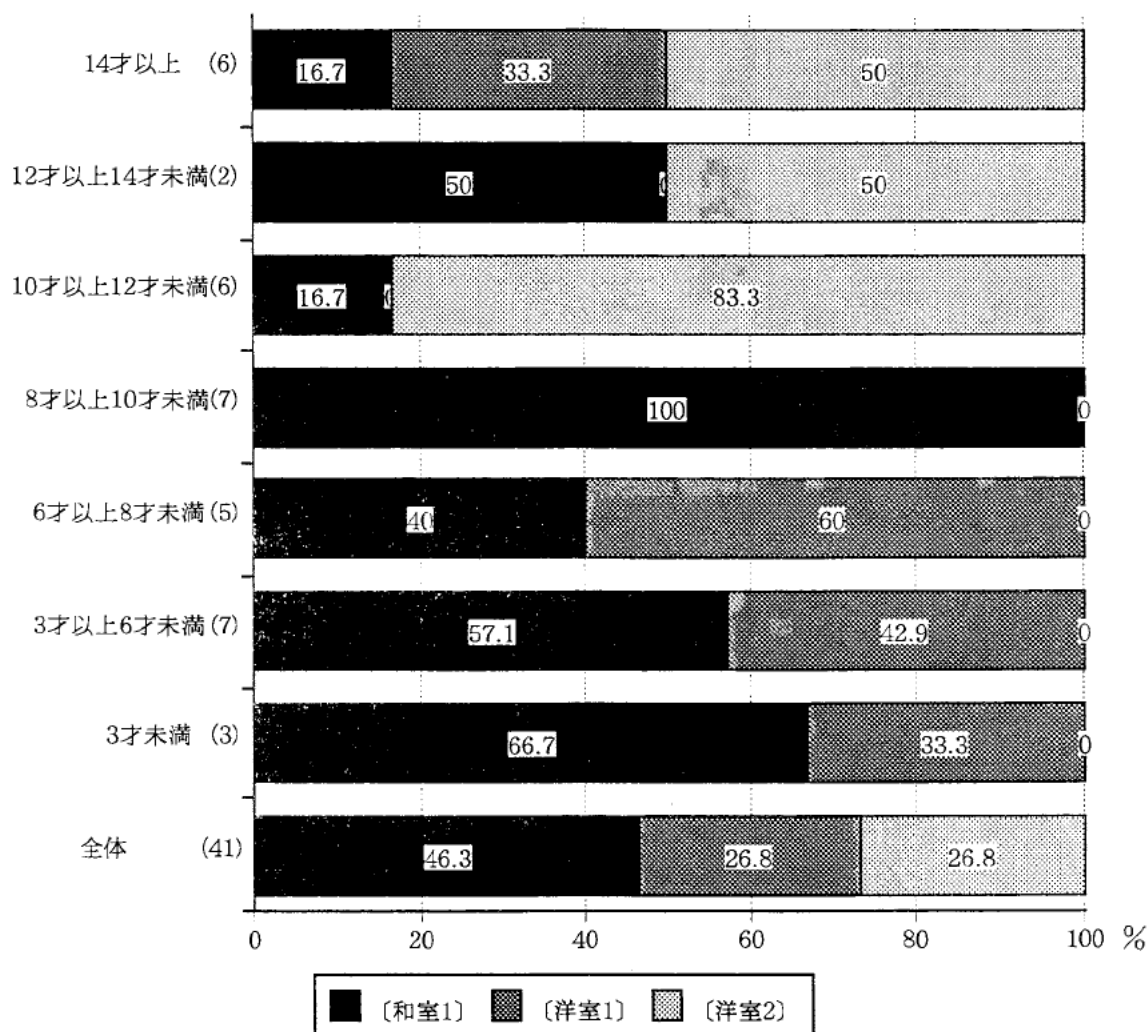


図6-17 第2子の年齢と第2子の就寝の場 『金沢』

(2) 『松任』

『松任』については、子供の就寝場所を複数回答で調査した。その結果を図6-18に示す。予想通り、〔洋室〕就寝が圧倒的に多く、91.4%（〔洋室〕のみ90.6%と〔洋室〕と〔和室〕0.8%の合計）である。〔和室〕就寝は9.4%（〔和室〕のみ8.6%、〔洋室〕と〔和室〕0.8%の合計）である。『松任』は、夫婦寝室も〔洋室〕が多く、就寝室は〔洋室〕中心の間取りとや、住戸規模など、かなり限定した中での選択にならざるを得ない。そのため、夫婦寝室は転用性のある和室に、洋室は子供室にというパターンになる。

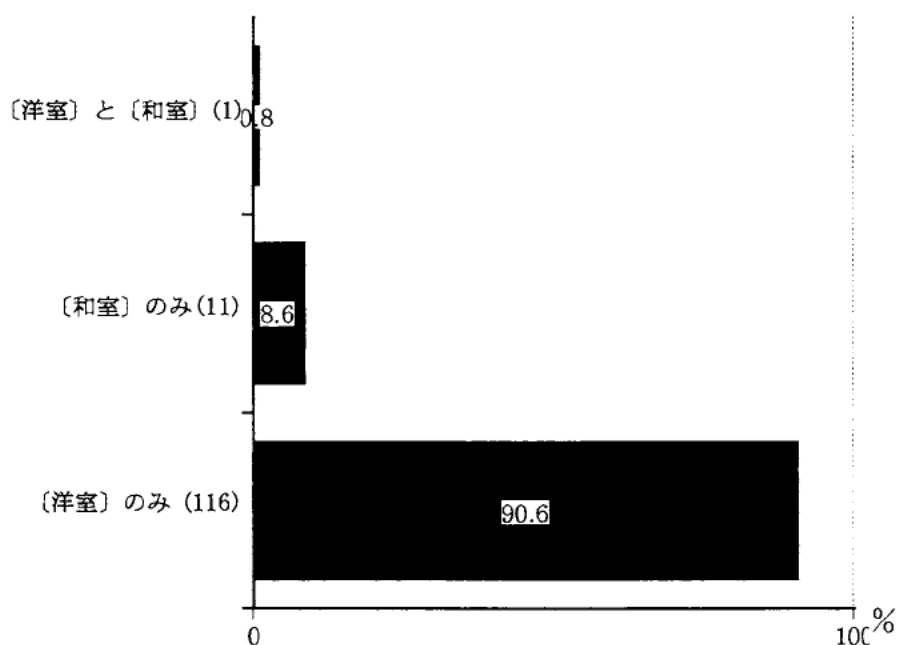


図6-18 子供の就寝の場 『松任』

(3) 『羽咋』

長子の就寝の場を図6-19に、次子の就寝の場を図6-20に示す。長子は〔洋室〕のみが〔和室〕のみよりやや多く46.7%、〔和室〕のみは44.0%である。次子は逆に〔和室〕のみが多く55.8%、〔洋室〕のみは44.2%となった。

これまでも明らかであるように、『羽咋』は和室中心の平面構成である。夫婦寝室や団らん、食事などほとんどの生活行為が和室で行われている。子供の就寝の場も上記のように和室の割合が他の調査地と比較して非常に多いといえる。しかし、『羽咋』の他の行為と比較すると〔洋室〕の割合が高いことに気づく。子供の就寝の場=勉強部屋=洋室の観念が定着しており、和室中心の平面構成の中にも洋室が、子供の勉強部屋として導入されているといえよう。

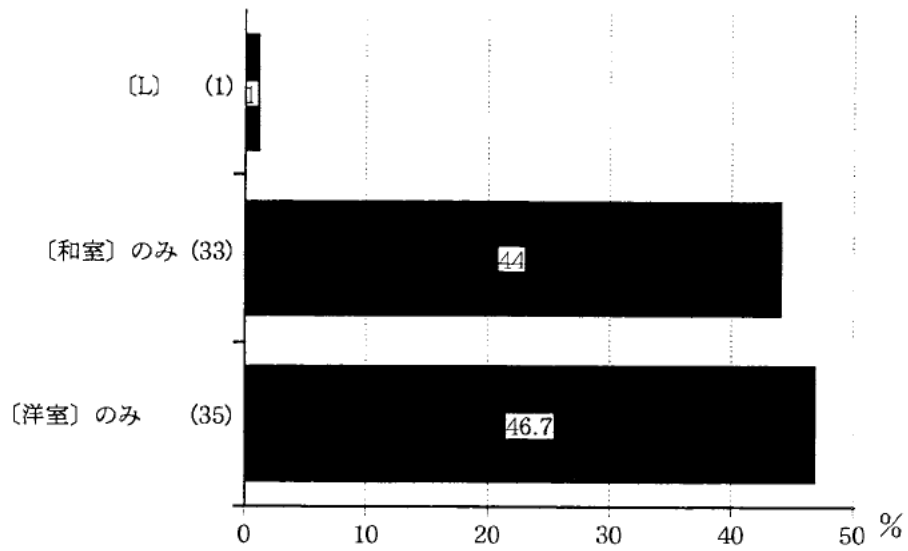


図6-19 長子の就寝の場 『羽咋』

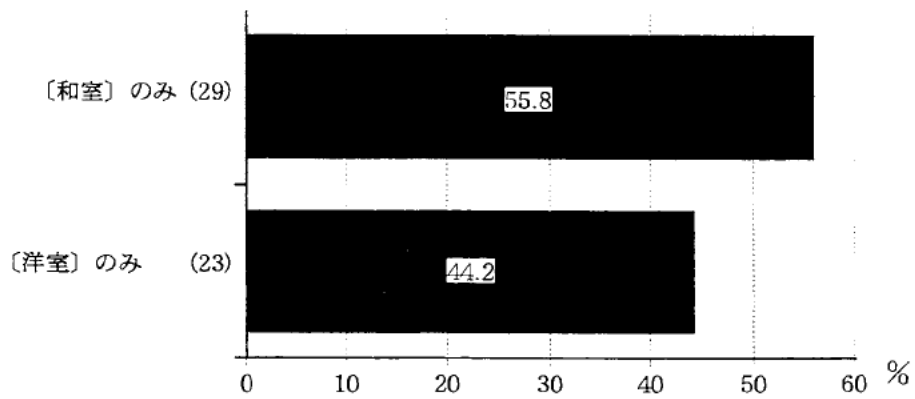


図6-20 次子の就寝の場 『羽咋』

第5節 接客

(1) 『金沢』

接客時にどの部屋を使うかを調査した結果を図6-21に示す。最も多いのが〔L〕で81.3%を占め、圧倒的に多いといえる。ついで〔D〕20.0%、〔和室1〕16.3%である。〔洋室〕はほとんど利用されない。〔L〕はほとんどの世帯で、普段は団らんに使用される部屋である。この部屋を接客に使用するのは、つまり接客の専用室としてではなく、家族の団らんの場を接客時のみ客を通すことで対処しているといえる。〔D〕にも同様のことがいえる。しかし、〔和室1〕が接客の場になっている場合は、専用の接客室の場合と、夫婦寝室が接客に転用されている場合があるだろう。集合住宅では部屋数に余裕がないために、専用接客室をとれないことが多く、他の用途の部屋を転用しがちである。また、専用接客室が必要な客はほとんどこない、あるいはそのような客の接客には外部の場所、例えばホテルやレストランを利用するため、住戸内に接客室は必要ないと考えられている。実際に訪問するのは、普段の家族の団らん室で気軽に接客できる客層であろう。

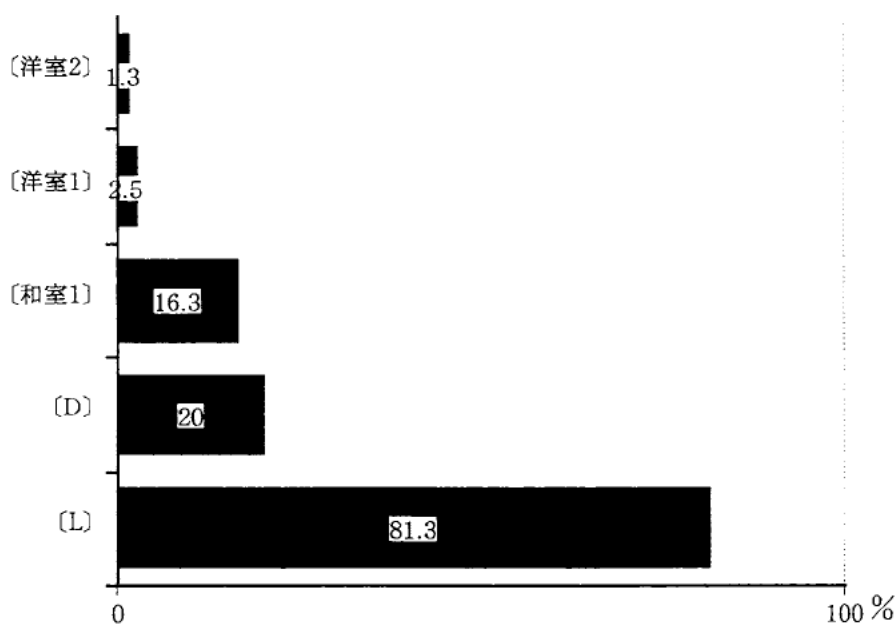


図6-21 接客の場 『金沢』

そこで、LDKのつながり方によって、接客の場が異なるかをみたのが図6-22である。LDKタイプはいずれも〔L〕で接客することが多い。LDK一体型とLD一体型では〔L〕と同じ割合の世帯が〔和室1〕で接客している。しかし、かぎ状連続型では〔和室1〕の割合が非常に少ない。これは、一体型では接客時に〔L〕や〔D〕が見えるため敬遠されがちであること、規模が小さいものが多い事などの理由で、〔和室1〕を接客に使用しする傾向が

あるが、かぎ状連続型では〔L〕と〔D〕が明確にコーナーに分かれており、視線がある程度遮りやすいことや、〔L〕がまとまった空間となり、一体型のように雑然とした雰囲気を出せることができるため、他の部屋にて接客せずに〔L〕ですることが多くなるためである。

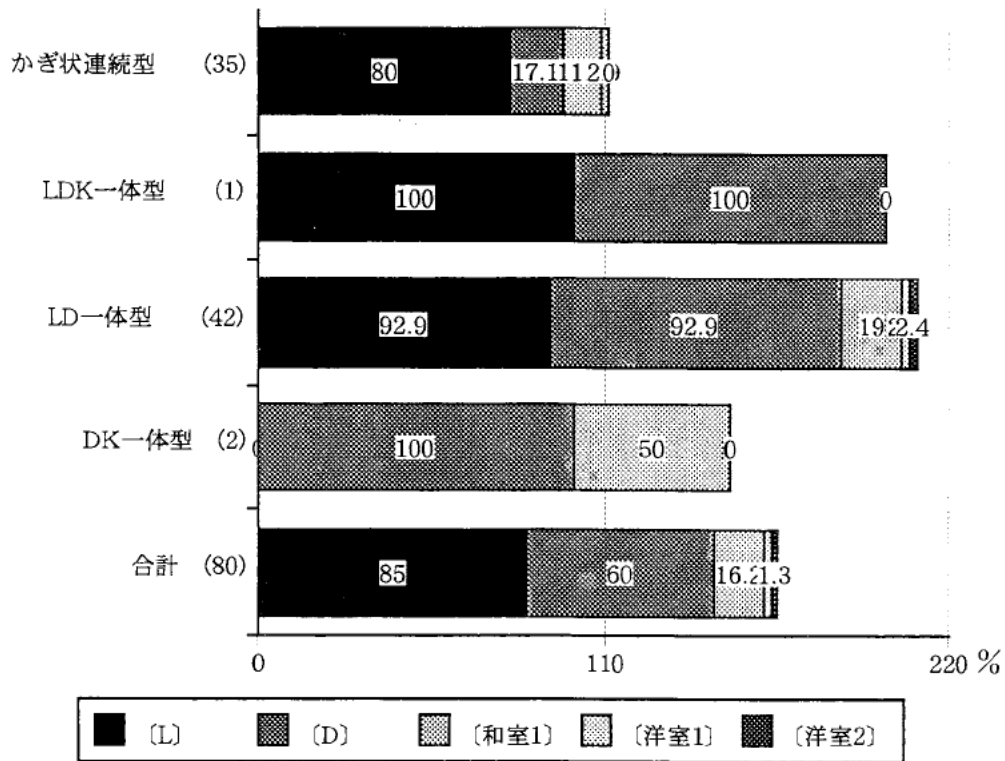


図6-22 〔L〕〔D〕のつながり方と接客の場 『金沢』

また、次に接客の場を家族人数や家族構成との関係を見たのが、図6-23と図6-24である。家族人数が何人であっても〔L〕が接客の場になっている。しかし、〔和室1〕における接客に注目すると、家族人数が1人の場合は40%、2人は50%、3人が64.7%、4人が67.7%と、家族人数が増えるに従い〔和室1〕を接客に使用する世帯の割合が増加している。これは、家族人数が増加するに従って〔L〕における生活行為や生活品が増加するため、〔L〕を接客に使用しにくい状態になり、〔和室〕を使用することになるためであろう。しかし、この〔和室〕は当然のことながら専用接客室ではなく、おそらく夫婦の寝室を転用しているであろう。

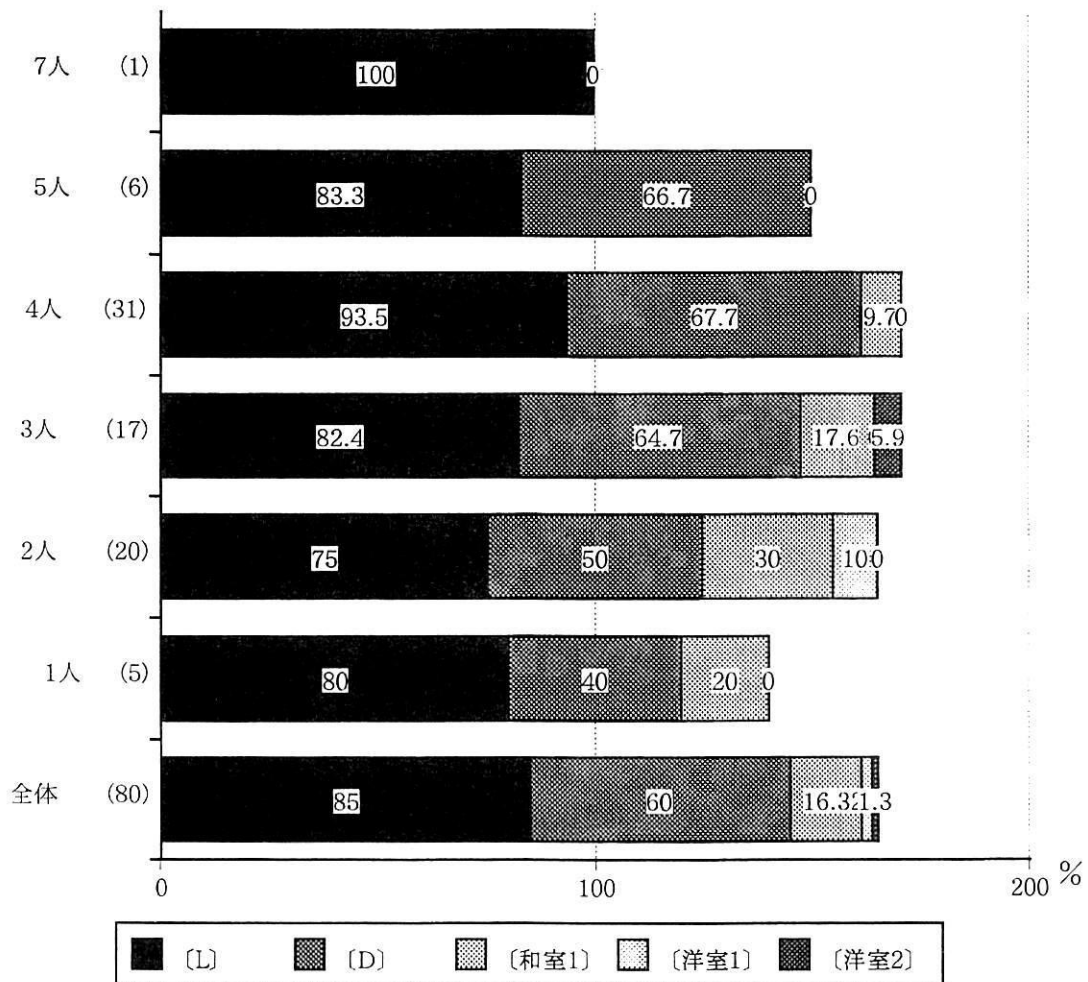


図6-23 家族人数と接客の場 『金沢』

家族構成との関係を見ると、特に顕著な関連性は見出せなかった。単身者や夫婦のみ(妻年齢40才以上)の世帯では〔L〕が最も多いものの、〔和室〕や〔洋室〕も比較的使用されていることがわかる。これは家族人数が少ないため、部屋数に余裕があるため、〔和室〕や〔洋室〕を接客室として専用化していると推測される。家族人数が多くなり、子供の個室として〔洋室〕を使用していることの多い夫婦+長子6才以下、夫婦+長子小学生、夫婦+長子中学生世帯では接客に利用できる〔洋室〕が、現状でないか将来の子供部屋として確保されているため、〔洋室〕を接客に使用しない世帯が非常に多いといえる。

また、図6-25では接客の場とその部屋を接客に利用する理由について、図に示した8つの選択肢から複数回答で選択させた。全体的にみると、最も多いのは「〔K〕との連絡がしやすく便利」で53.7%、「アットホームなもてなしができる」が51.2%で、この2つが主な理由となっている。次いで「もともと洋室の応接間だった」が25.6%となる。これは〔洋

室) を接客にしている世帯にのみ選択できる選択肢であるが、接客室は洋室であるという意識がある者でなければ選択しないため、住意識がわかる選択肢であるといえる。

〔L〕については、主な理由には「〔K〕との連絡がしやすく便利」と「アットホームなもてなしができる」が挙げられる。その他には「もともと洋室の応接間だった」も他と比較すると多い。家族の普段の生活の中に客を招き入れるという意識がある。また、〔K〕との関係も大きな理由となっている。〔D〕については、主として「〔K〕との連絡がしやすく便利」が挙げられ81.3%もの世帯が同意している。接客をする場合、客を部屋に残して食事やお茶の準備をしなければならない場合が多い。〔D〕で接客すればその点便利である。この場合の客層は、気軽な場合に限られるだろう。〔和室1〕については、当然のことながら「和の雰囲気がよく落ち着ける」とする世帯が他と比較し非常に多い。また「〔K〕との連絡がしやすく便利」の同意が少ない。集合住宅の場合〔K〕との関係は、比較的近いと言えるため、回答が皆無ではないものの〔L〕や〔D〕にくらべると少なくなっている。

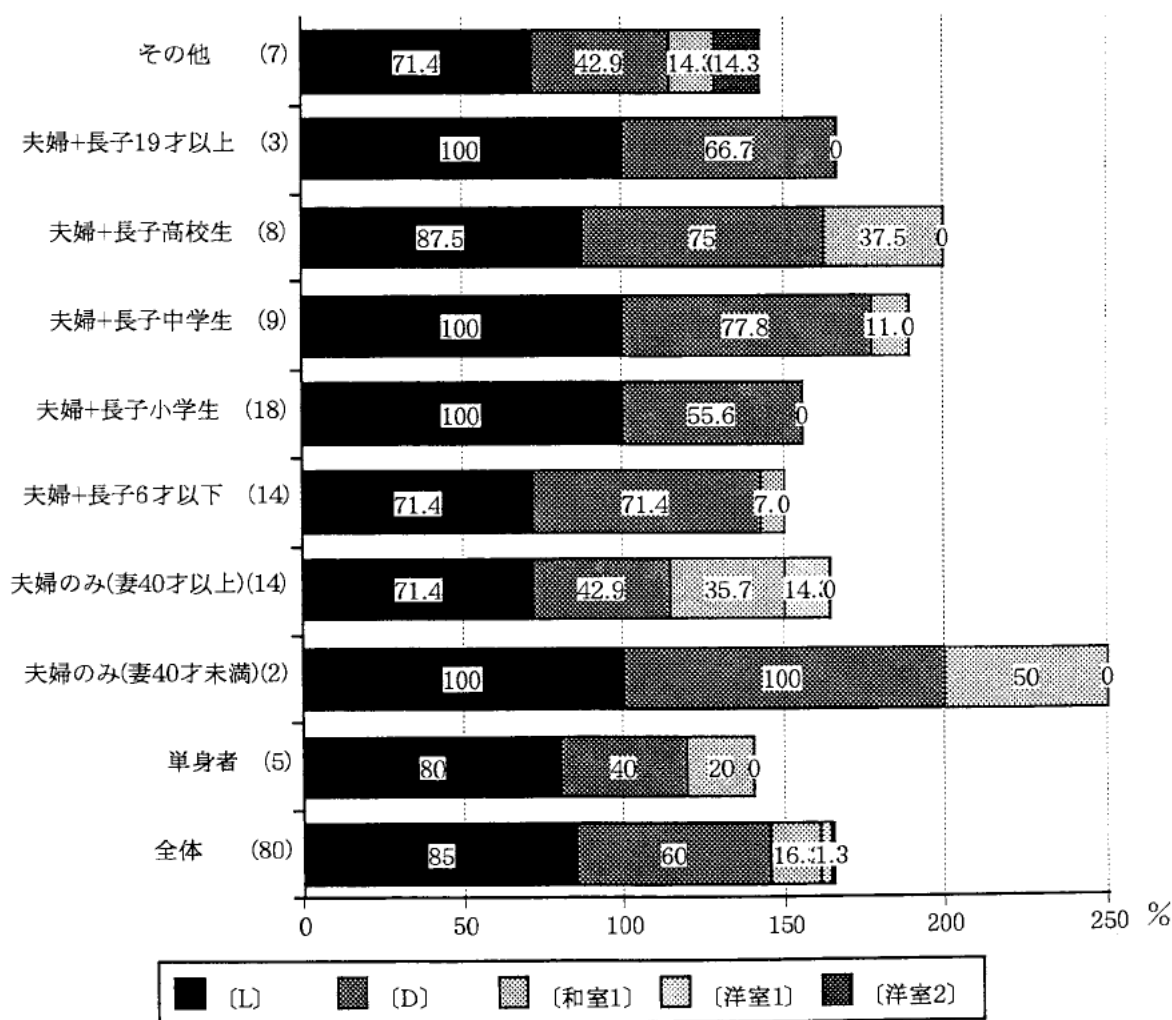


図6-24 家族構成と接客の場 『金沢』

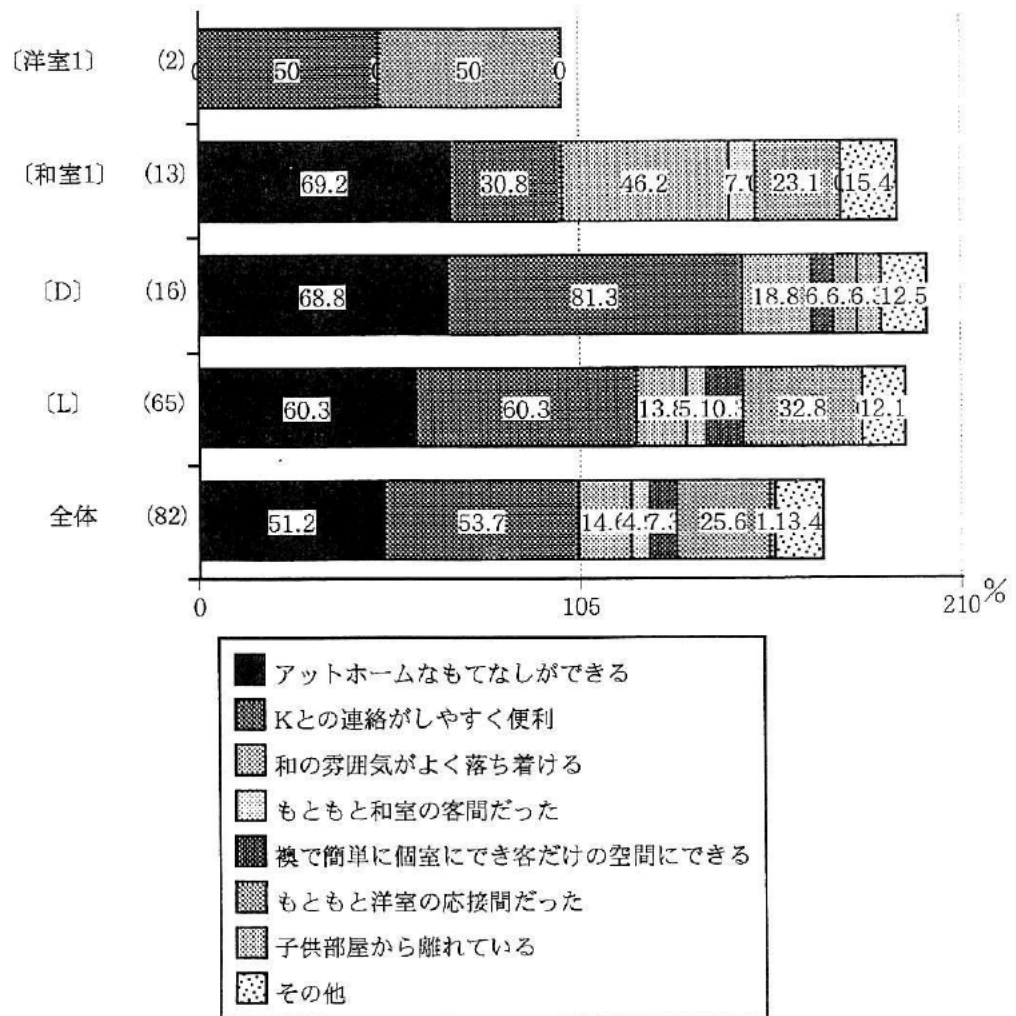


図6-25 接客の場と接客に利用する理由 「金沢」

泊まり客の場と泊まり客に利用する理由について図6-26、及び6-27に示す。泊まり客の場は〔和室1〕が圧倒的に多く68.6%である。接客の場は〔L〕が多いが、泊まる場合は和室が便利に利用されることになる。「和室である」こと、「他の部屋に十分なスペースがない」ことが大きな理由になっている。めったにない泊まり客のために、専用の部屋を用意する世帯はほとんどおらず、泊まり客がある時はなんらかの融通をつけて部屋を転用するのがふつうだろう。その場合ベッドが用意されていないので和室にふとんとなる。「押入に客用の布団が準備してある」という理由などからもわかる。

その他は〔洋室1〕と〔洋室2〕である。これについては、居室に余裕がある世帯でみられるものの思われる。理由としては「個室なのでくつろいでもらえる」「普段使わないベッドがある」などが挙げられ、専用化している場合、あるいは意識していないが余裕があり部屋が余っている場合があるだろう。

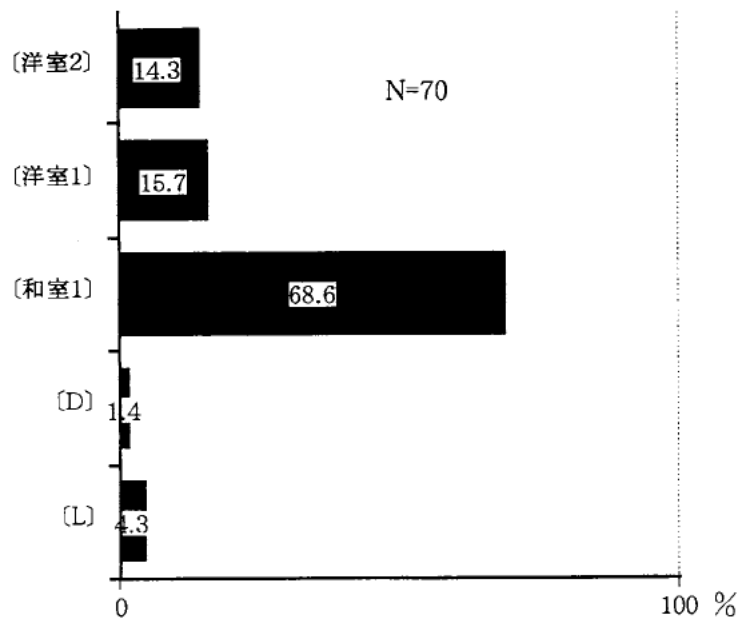


図6-26 泊まり客の場 『金沢』

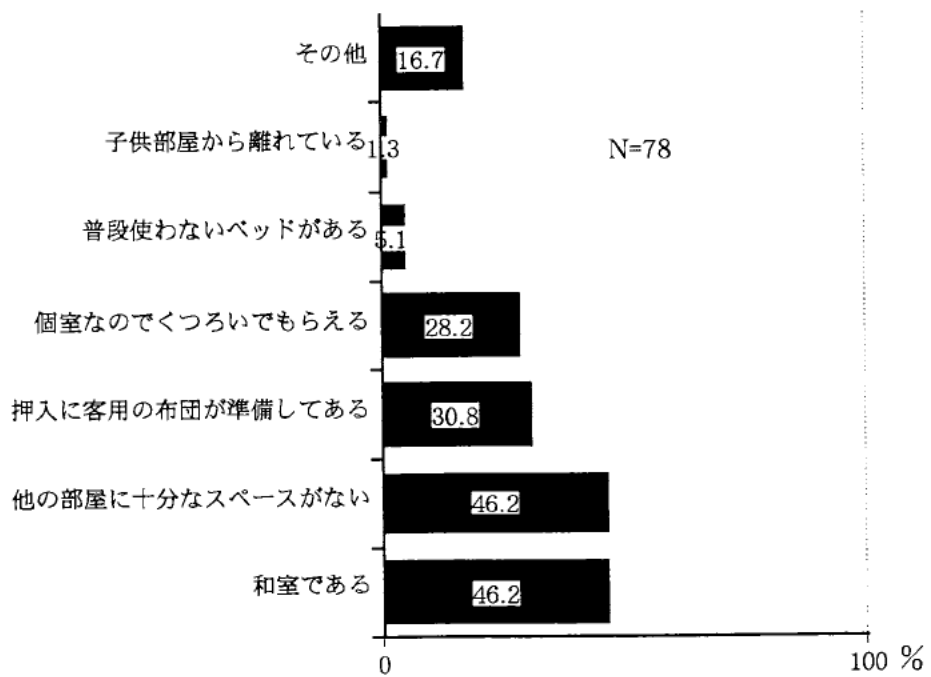


図6-27 泊まり客の場と泊まり客に利用する理由 『金沢』

(2) 『松任』

接客の場を図6-28に示す。最も多いのは〔L〕で55.0%、次いで〔和室〕35.0%、〔D〕や〔洋室〕は10%程度である。『金沢』と比較すると〔L〕の割合が少なく、〔和室〕の割合が高い。これは、『松任』は『金沢』と異なり注文一戸建て住宅が多いため、部屋数に余裕があり、〔和室〕を専用接客室にしているのであろう。そのため、〔L〕は接客に利用せずすむ。しかし、現代の接客事情は『金沢』における設問の回答でもみられたように、集合住宅の『金沢』と注文一戸建て住宅地の『松任』とでは事情が異なる面はあるものの、全般的に気軽な接客が望まれているといえよう。そのため〔L〕で接客することが一般的で、少し気の張る客の場合などに接客室としての〔和室〕を利用することが一般的に接客時の対応であると思われる。

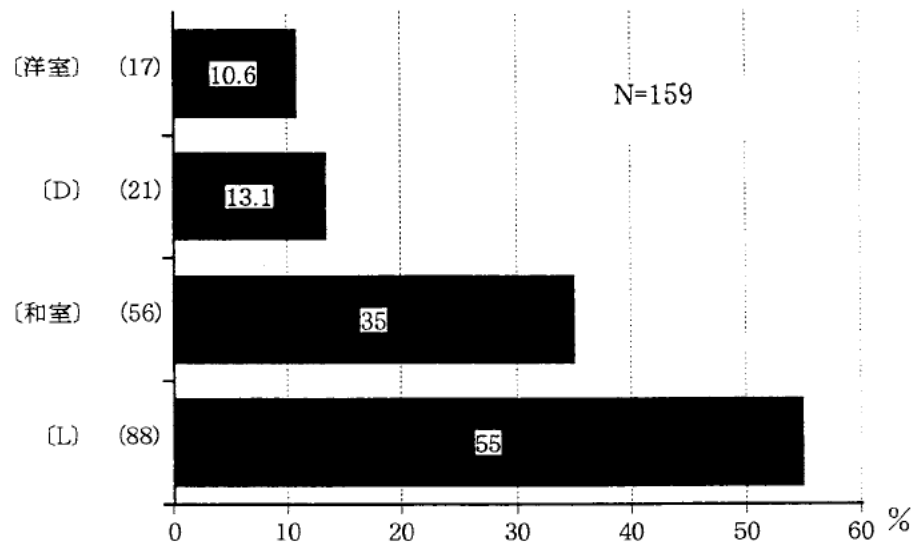


図6-28 接客の場 『松任』

接客の場と団らんの場の関係を示したのが表6-5である。団らんをする〔L〕で接客することが圧倒的に多い。全体の半数以上がこの住まい方である。次いで、団らんは〔D〕で接客は〔L〕、団らんは〔L〕で接客は〔D〕という住まい方である。これは〔L〕と〔D〕で団らんと接客をするが、コーナーを分けているといえる。普段の団らんの場がそのまま接客の場にはしないという意識の現れととれる。〔和室〕で接客する世帯は、団らんは〔L〕が多いものの、他の住まい方に比較し〔和室〕で団らんする世帯の割合が高いことがわかる。これは、現在LDK型の平面が新規供給の中心であるが、和室志向の世帯が注文住宅として建設したのであらうと推察される。

表6-5 接客の場と団らんの場 『松任』

N=159	接客 〔L〕 (88)	接客 〔D〕 (21)	接客 〔洋室〕 (17)	接客 〔和室〕 (56)
団らん 〔L〕 (131)	62.6% (82)	11.5% (15)	6.1% (8)	31.3% (41)
団らん 〔D〕 (24)	62.5% (15)	50.0% (12)	4.2% (1)	25.0% (6)
団らん 〔洋室〕 (16)	18.8% (3)	6.3% (1)	56.3% (9)	31.3% (5)
団らん 〔和室〕 (10)	10.0% (1)	10.0% (1)	10.0% (1)	90.0% (9)

泊まり客の場を図6-29に示す。圧倒的に〔和室〕が多い。〔和室〕に融通性があるためである。つまり、めったにない泊まり客のためにベッドを用意するのは、経済的にも空間的にも無駄であるが、和室であれば普段は広い空間を残しておけるし、泊まり客があれば布団を敷けば用が足りるということである。

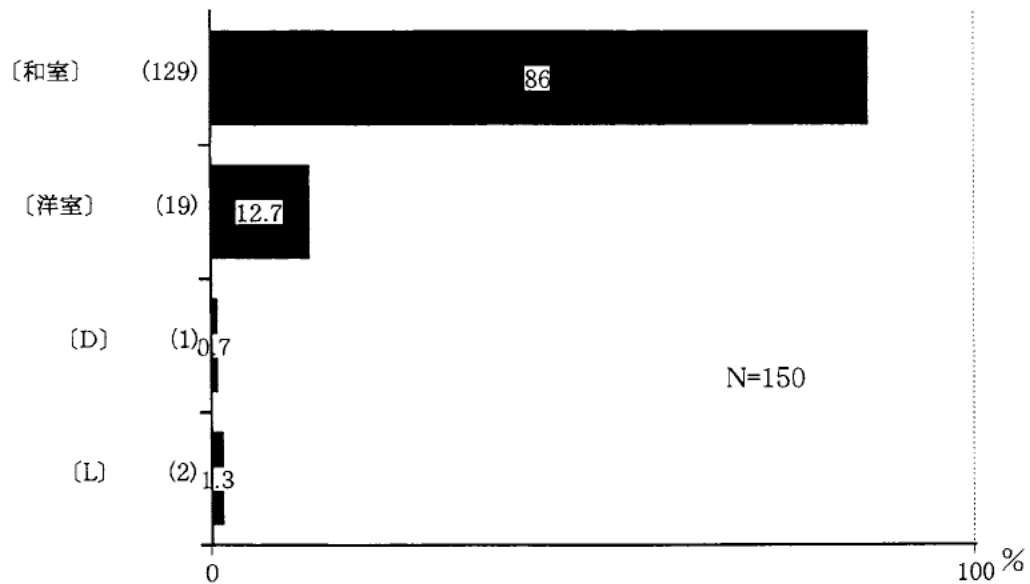


図6-29 泊まり客の場 『松任』

(3) 『羽咋』

接客の場(図6-30)をみると、〔和室〕が圧倒的に多いのは『松任』と同様である。『松任』は〔洋室〕が12%あったが、『羽咋』は〔L〕〔洋室〕が合わせて12%程度である違いはあるものの、接客をするのは〔和室〕が非常に多いことに関しては同じ傾向であるといえる。しかし、接客の場と団らんの場の関係(表6-6)をみると、その様相は全く異なる。『羽咋』は前述のように和室中心の間取りで団らんも〔和室〕が多い。従ってだんらんと接客の関係で最も多いのは団らんも接客も〔和室〕である世帯で、全体の70%を超えている。その他でやや多いといえる住まい方は団らんが〔L〕で接客が〔和室〕という住まい方である。これは、『松任』と同様の部屋の使い方、接客の〔和室〕は専用接客室である場合が多く、気軽な接客と気の張る接客を部屋で分けているとも考えられる。

客を泊める部屋は、〔和室〕が圧倒的に多く、97.8%(90世帯)を占める。その他は〔洋室〕と〔L〕が1世帯ずつである。〔和室〕が多いのは〔L〕や〔洋室〕を持つ間取りの世帯が少ないことと、和室の転用性によるだろう。

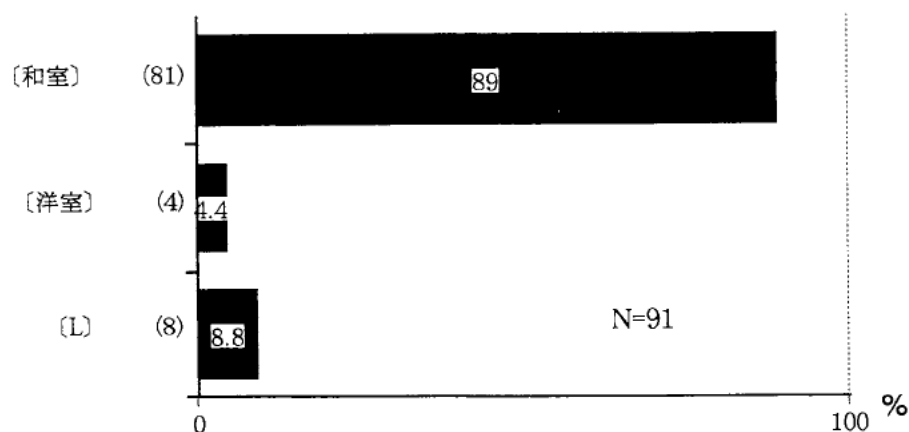


図6-30 接客の場 『羽咋』

表6-6 団らんの場と接客の場 『羽咋』

N=90	接客 〔L〕 (8)	接客 〔和室〕 (79)	接客 〔洋室〕 (4)
団らん 〔L〕 (16)	25.0% (4)	68.6% (11)	12.5% (2)
団らん 台所 (2)	0	100% (2)	0
団らん 〔和室〕 (71)	5.6% (4)	93.0% (66)	1.4% (1)

第6節 冠婚葬祭

従来住宅内で行われてきた冠婚葬祭などの行事は、現在どの程度自宅内で行われているだろうか。あるいは、自宅内では行われなくなったが、自宅外でそれらの行事を行っているのだろうか。もし、住宅内で冠婚葬祭が今後も引き続いて行われるのであれば、住宅内にそれに応じた空間の準備が必要であろうし、もし今後はそれらの行事がほとんど行われないのであれば、それらのための空間の計画は不必要であろう。また、現在それらのために用意されている空間があれば、今後は他の用途に面積が盛れるべきである。

本調査では、住宅内に広さや相応の設備などが必要とされると考えられる冠婚葬祭の行事として、「正月の祝い」「結納」「結婚披露宴」「法事」「葬式」を取り上げ、それぞれについて居住者の意見を聴取した。

選択肢は以下の6項目である。

- (1) 自宅でするのが当然だ。
- (2) 少し難しいが、どうしても自宅でしたい。
- (3) できれば自宅でしたいが、難しいので自宅外でする。
- (4) 自宅ですることは考えず、自宅外でしたい。
- (5) 自分の家庭では、自宅内でも自宅外でもしない。
- (6) その他。

調査時点でまだそのような行事をすることがなかった場合には、今後することになった時にはどうしたいかという仮定で回答させた。

(1) 『松任』

上記の行事を自宅で行うことに関する居住者の意見を図6-31に示す。

まず「正月の祝い」については、圧倒的に「自宅でするのが当然だ」が多く77.4%を占めた。そのほかの選択肢の回答は5%程度以下である。「その他」のみ8.4%ある。「その他」には、「実家」「主人の家」「妻の家」「お互いの両親の家」など若世帯のため正月は夫婦いずれかの実家で祝うというのが合わせて全体の5.2%ある。これを合わせて考えると、自宅や実家外で正月を祝う世帯は20%以下である。その中で自宅でしたいと考えているのは全体の7%程度である。従って、正月の祝いを全くしない世帯も含めて、自宅や実家する希望もない世帯は10%程度ということになる。本調査の項目中で最も少ない。換言すれば、「正月の祝い」は自宅でするのが当然と考えられている行為であり、今後自宅外へ出る可能性の低い行事であるといえる。住宅の平面に影響されるような、親類が大人数集まったり、宿泊したりするようなことは少ないのであろう。

「結納」は「正月の祝い」に次いで「自宅でするのが当然だ」とする回答が多い項目である。53.1%と半数以上が回答している。次いで「少し難しいがどうしても自宅でしたい」が18.1%である。自宅でする世帯は合わせると71.2%を占める。それに対して「自宅ですることは考えず自宅外でする」と回答した世帯も次いで多く15.4%ある。自宅外ですると回答した世帯は合わせて26.8%であるが、そのうち自宅での希望はある世帯は8.7%と比較的多い。結納は近年ホテルなどで行われることがあるが、意識としては家に挨拶に来てほしいし迎えたいとする意識が強いことがわかる。結納は格式を重視する行事であると思われるため、住宅の平面構成や意匠に少なからず影響があると考えられるが、少人数であること、一生に多くて2~3回までであることなど、座敷あるいは応接間があれば対処できると考え

られてるのである。

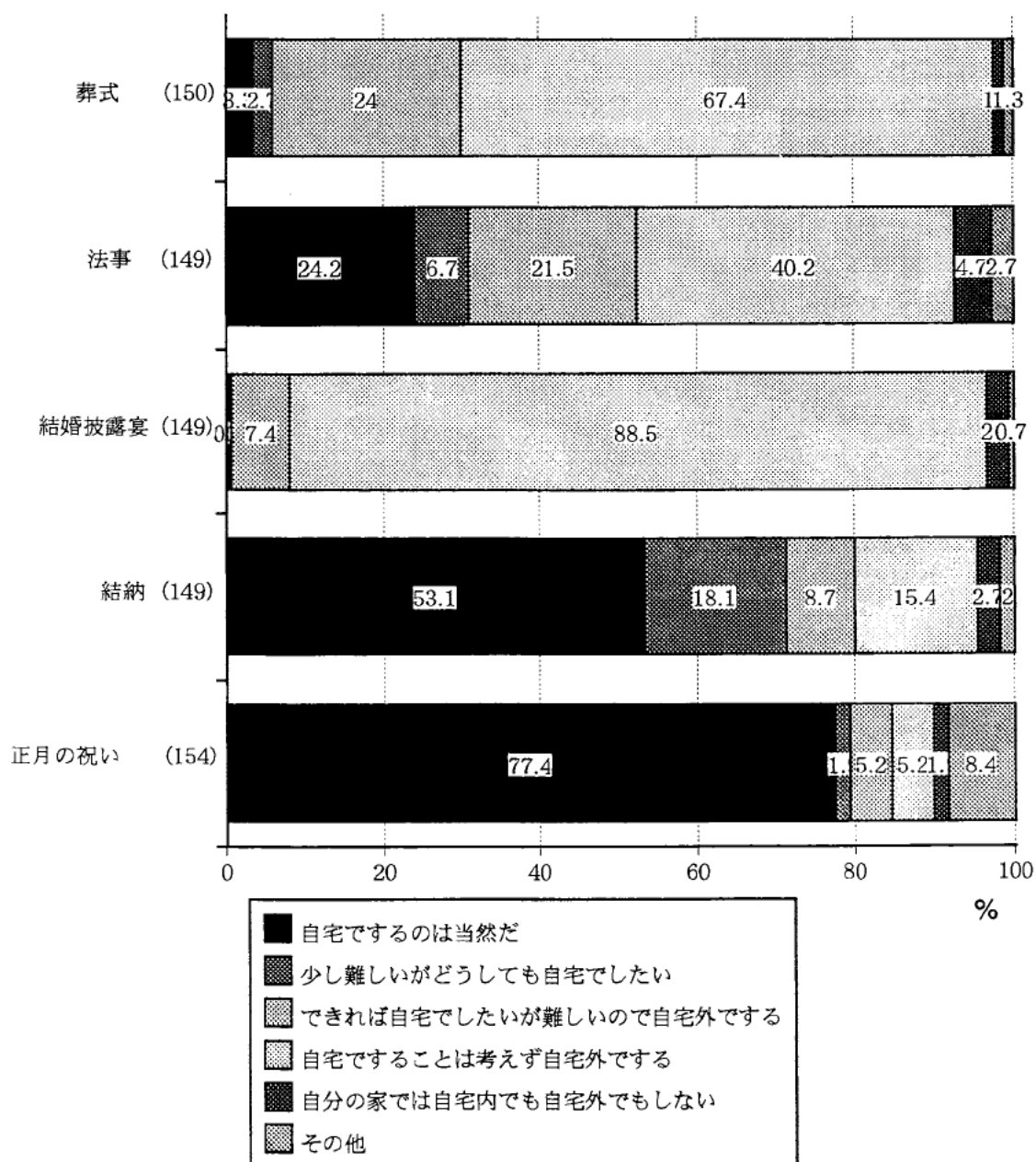


図6-31 冠婚葬祭の場に対する居住者の意見 『松任』

「結婚披露宴」は、最も自宅で行われたいし、希望も少ない行事である。最も多い回答は「自宅することは考えず自宅外です」で88.5%のものぼる。その他の回答には「できれば自宅でしたが難しいので自宅外です」が7.4%でやや多い程度である。「結婚披露宴」を自宅するのは、多人数が集まること、格式も配慮し、多人数の宴席料理の準備、給

仕などのできる台所設備など、住宅平面上困難な問題が多い上に、結婚当事者の家では様々な雑事があり披露宴をする精神的余裕が無いこと、手伝いの人数確保、食器など多くの問題があり、現実的に考えると非常に難しいといえる。現状でも「結婚披露宴」はほとんど自宅で行われていないので、自宅でしなければならないとする意識もほとんどない。今後さらに自宅で行われることが少なくなると考えられるため、住宅平面に反映させなくてもよいだろう。

「法事」に関して最も回答が多いのは「自宅ですることは考えず自宅外でする」で40.2%である。次いで「自宅でするのは当然だ」で24.2%、「できれば自宅でしたいが難しいので自宅外でする」21.5%である。実態として自宅外でする世帯が2倍あり多いが、上記のような自宅でする希望も合わせると自宅と自宅外とはほぼ同じ割合となり、意識の面では二分しているといえる。「法事」は一般的には、多人数の集まれる仏壇がある和室が必要である。その点で自宅でするには住宅平面滋養もその他の面でも困難があるが、「結婚披露宴」に比べ、人数が少ないことが多いこと、晴れやかな格式の重視される行事ではなく、むしろ身内の集まりであることで、「結婚披露宴」より自宅ですることや希望が多くなったのであろう。

「葬式」は「結婚披露宴」に次いで自宅で行われなことが多いい行事である。最も多い回答は、「自宅ですることは考えず自宅外でする」で67.4%である。「できれば自宅でしたいが難しいので自宅外でする」が次いで多く24.0%である。「葬式」は非常に多くの人を訪れることになり、広い部屋、あるいは続き和室が必要になり、近年自宅外ですることが多くなったことが反映されている。今後この傾向は続くと思われる。

(2) 『羽咋』

冠婚葬祭を自宅で行うことに対する居住者の意見を図6-32に示す。

「正月の祝い」は「自宅でするのは当然だ」が圧倒的に多く94.6%を占める。「結納」も「自宅でするのは当然だ」が多く72.4%である。「少し難しいがどうしても自宅でしたい」「できれば自宅でしたいが難しいので自宅外でする」という自宅ですることを希望している意見を合わせればほぼ90%を占める。次いで自宅でするのが多い冠婚葬祭は、「法事」である。「当然」と回答したのは49.5%であるが、上記のように自宅でしたい希望も合わせると70%弱である。「葬式」は最も多い回答は「自宅ですることは考えず自宅外でする」で37.4%、次いで「できれば自宅でしたいが難しいので自宅外でする」が35.2%である。自宅でするという回答は20%に満たず、今後自宅外で行うことが増加するだろう。「結婚披露宴」は最も自宅で行うことが少ない行事である。自宅でするという回答は1.1%しかなく、できればしたいが難しいので自宅外でする」を含んでも20%以下である。大半は自宅外で行うことを最初から考えている。

『松任』と比較すると、全体の傾向は同様であるといえる。従って、石川県においては、一般的な傾向といえるだろう。最も自宅で当然と考えられて行われるのは「正月の祝い」である。次いで「結納」「法事」と続く。いずれの行事もある程度の格式と一般には広い座敷を必要とするが、身内の集まりであり、和室を持つ平面が多い土地柄から、今後も自宅で行われやすい行事であるだろう。自宅で行う希望も比較的少ないのは「葬式」で、さらに少な

いのは「結婚披露宴」である。これは前述のように多数の家族・親族以外の人間が集まることやその他様々な困難を生じるため、自宅で行われなくなってきた行事である。また、「結婚披露宴」は洋式化傾向にあることもあり、今後さらにこの傾向が進むと思われる。

以上から、今後この地域の住宅平面を、冠婚葬祭を自宅で行うか否かという視点でその動向を推察すると、座敷は引き続きつくられると思われるが、続き間をとる、格式のある意匠に留意するなど、大人数を収容し、格式ある行事を行うことを考慮した平面構成は主流になることはないだろう。

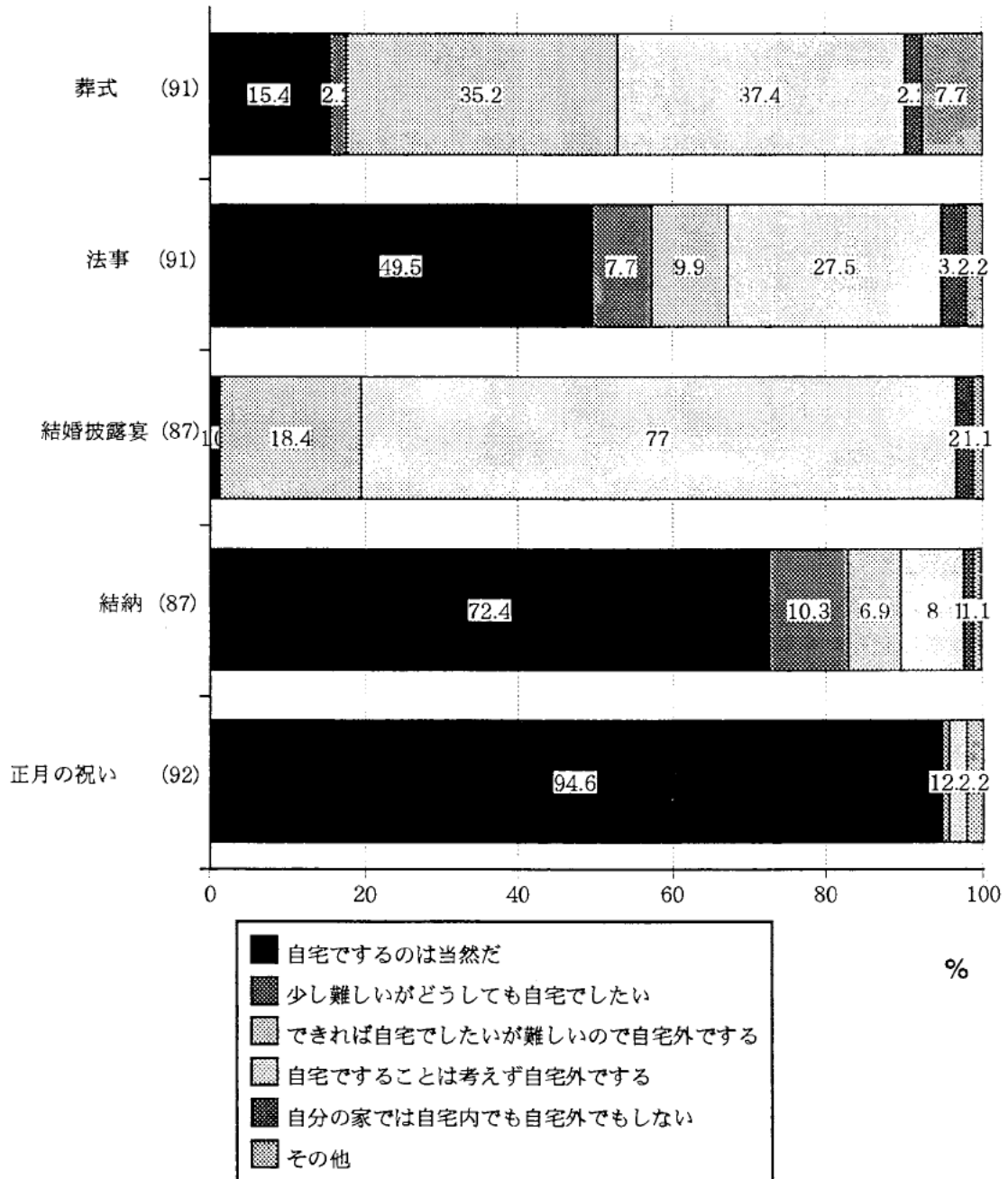


図6-32 冠婚葬祭の場に対する居住者の意見 『羽咋』

第7章 居住性評価

第1節 『金沢』における居住性評価

(1) [L] [D] [LD] に対する不満点

まず、[L] の不満点について述べる。[L] に該当するのは、[L] と [D] のつながり方がかぎ状連続型でnLDK型の38世帯である(調査対象総数88世帯の43.2%に当たる)。

「狭い」「玄関から見えやすい」「壁が少ない」「窓が少ない」「その他」の選択肢から1つを選択させた(図7-1)。最も多いのは「狭い」で53.8%が回答している。狭さが最大の問題であって、「玄関から見えやすい」「壁が少ない」「窓が少ない」などは狭さを解消した後の問題と受け止められているのであろう。

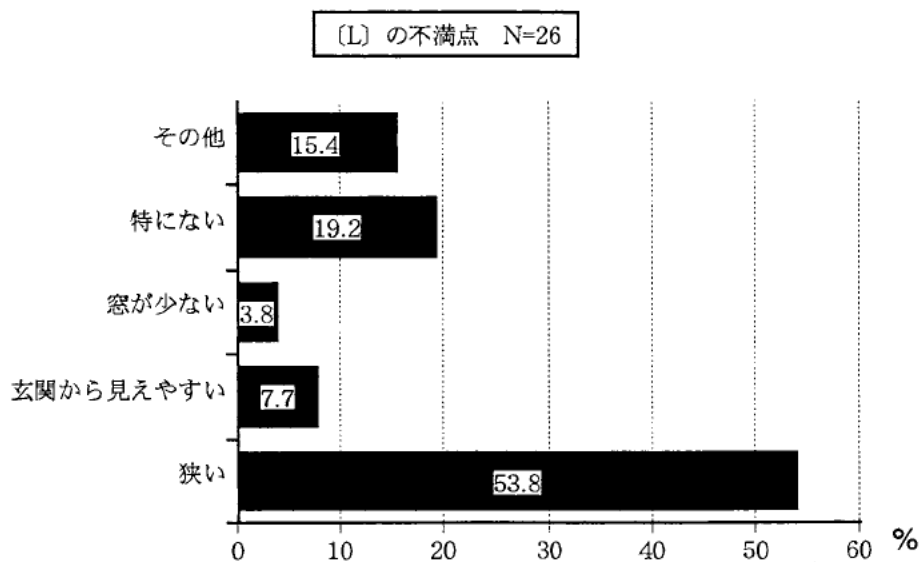


図7-1 [L] の不満点 『金沢』

実際の [L] の面積は、6~7畳が16.5%、7~8畳が48.2%、8~9畳が31.8%、9~10畳が3.5%という分布である。[L] のみの面積とはいえ、大型の家具が置かれやすい場所としては全体的に狭いといえるだろう。[L] の面積と [L] の不満点の関係をみると、「狭い」と回答したものの割合は、7~8畳では23.1%、8から9畳は50.1%、9~10畳は0%(n=1)となり、[L] の面積が直接的に回答に反映したわけではない。家族構成による違いを図7-2でみようとしたが、サンプル数が少なく明確なことはいえない。しかし、ライフステージが高いほうが、狭いと回答する傾向がみられ、子供の年齢が低い(就学前児、あるいは小学生)世帯では、狭い以外のいくつかの不満点が挙げられていることからわかる。

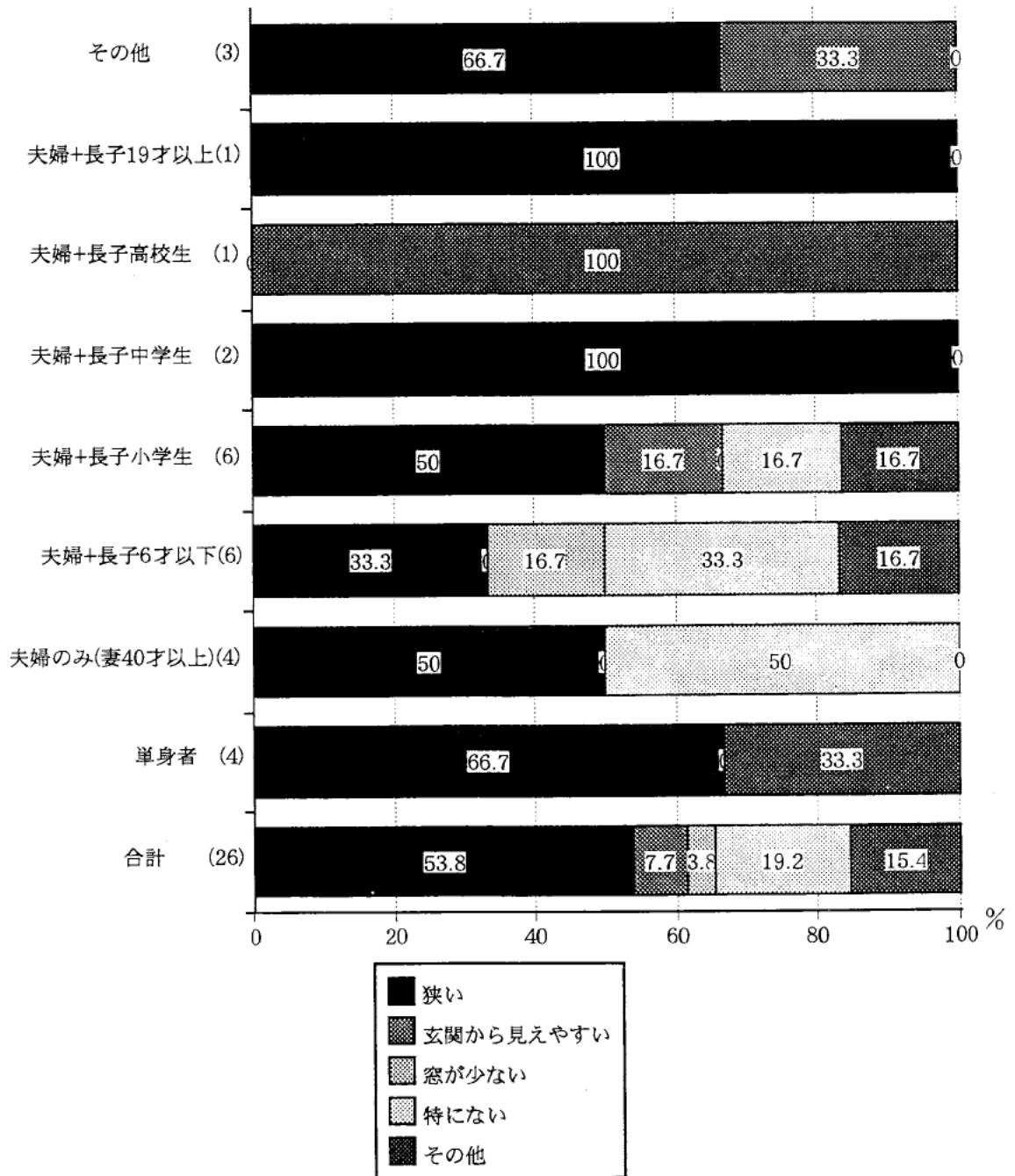


図7-2 家族構成と〔L〕の不満点 『金沢』

次に〔D〕の不満点である。〔D〕に該当する世帯は「かぎ状連続型」の38世帯と、nDKタイプの合計41世帯(調査対象総数88世帯の46.6%に当たる)である。

〔D〕の不満点については図7-3に示す。〔D〕が該当する世帯はかぎ状連続型の38世帯と、nDKタイプの3世帯、合計41世帯(回答総数88世帯の46.6%)である。

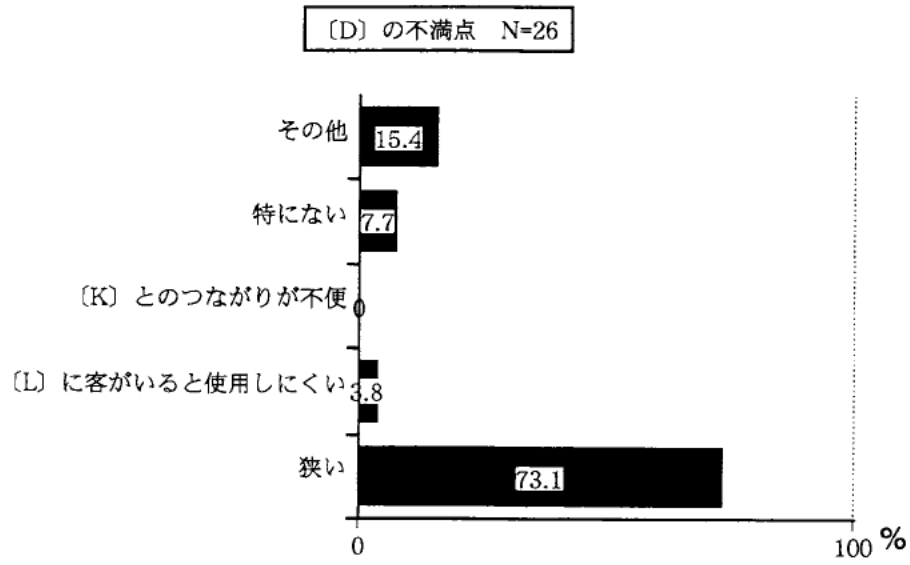


図7-3 〔D〕の不満点 『金沢』

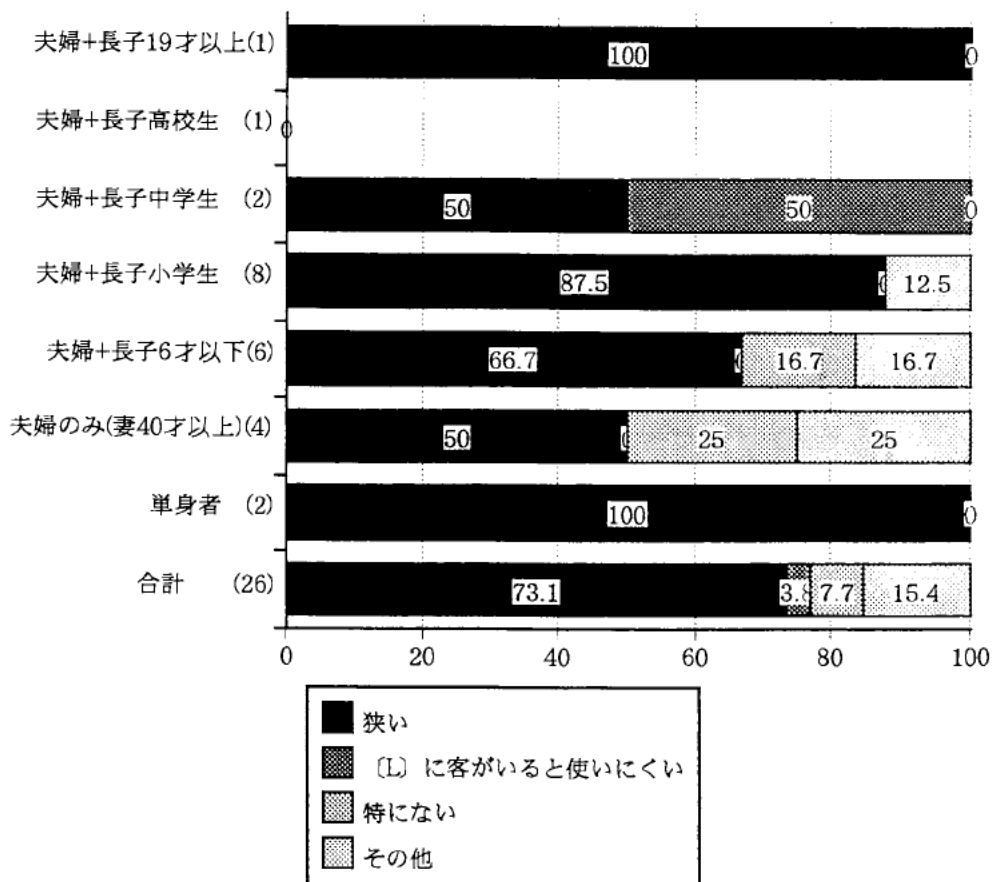


図7-4 家族構成と〔D〕の不満点 『金沢』

最も多いのは「狭い」で73.1%で、〔L〕と同様である。その他の選択肢にはほとんど回答がない。集合住宅の〔D〕は実質的には、4人用のダイニングテーブルを置くとその他の家具なども置く場所がない広さである場合が多い。また、集合住宅では特に〔L〕や〔D〕に行為が集中しがちになる。一般的には個室が5～6畳程度以下のため、住戸の中で最も広い〔L〕や〔D〕が多目的に使用される。さらに、サイドボード、ソファセット、ピアノなど大型の家具も置かれる場である。そのため狭さの不満が高いのであろう。

〔D〕の不満点を家族構成別にみたものが図7-4である。サンプル数が少ないので明確なことは言えないが、夫婦のみや子供が小さい世帯では、狭いとの不満は比較的少ない傾向がみられる。

次に〔LD〕の不満点について述べる。〔LD〕タイプは49世帯(調査対象総数88世帯の55.7%に当たる)である。

「狭い」が圧倒的で、75.0%ある。その他の選択肢にはほとんど回答がなく、例えば〔LD〕であるために接客時に家族の生活が丸見えになって困るなどの意見は少数である。しかし、この問題が全く感じていないというわけではなく、狭さが最大の不満点であり、このことが解消すれば、多くの問題が解決されると感じているためであろう。

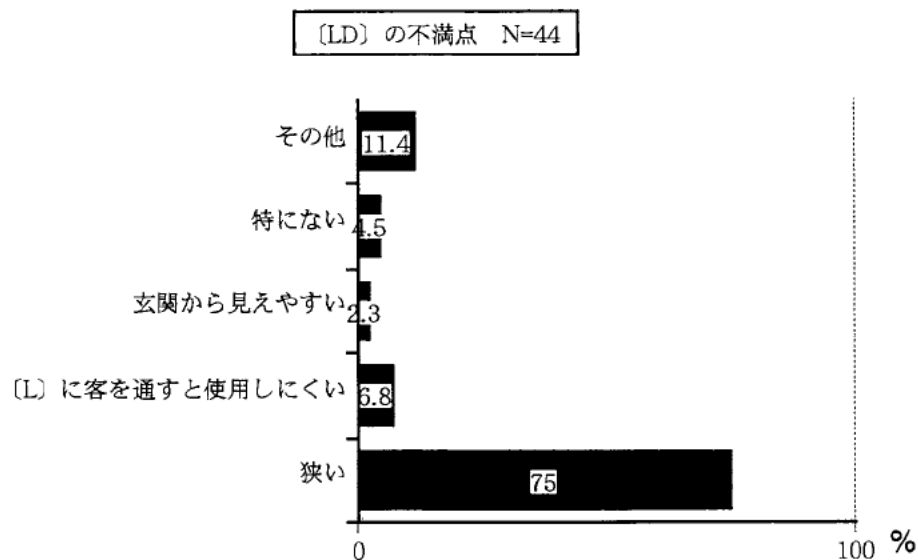


図7-5 〔LD〕の不満点 『金沢』

(2) 〔和室〕〔洋室〕に対する不満点

〔和室1〕は調査対象世帯すべてが該当する。従って該当世帯は88世帯である。

〔和室1〕の不満点は図7-6に挙げたように、いくつかの問題が指摘された。多くの回答が得られたのは「押入が狭い」と「採光が不十分」で、ともに33.8%である。「特に畳の空間はいらぬ」とする世帯は少数で4.4%であった。近年、個室空間などの洋室化がすす

んでおり、『松任』における就寝室の記述においても明白なように、子供室だけでなく夫婦寝室も洋室志向が強い。しかし、集合住宅である『金沢』において和室空間を特に必要とされるのは、空間が限られているため、前述のように〔L〕や〔LD〕、〔D〕などの広い居室に行為が集中する。しかし、それらの空間は「狭い」という不満にみられるように十分な広さがないのが現状である。また洗濯物を畳むなど、畳の空間を必要とする行為には対応できない。さらに泊まり客等の対応などもある。この和室は就寝室の節でも述べたように夫婦寝室になりやすいが、夫婦寝室と日中の様々な行為とを両方行うためには、転用性のある和室が便利であるということなのであろう。

また、集合住宅では一般に収納スペースが非常に少ない。〔洋室〕には全くないこともあるため、〔和室〕の押入が唯一まとまった収納スペースである場合が多い。さらに、夫婦寝室となるため夫婦の寝具、泊まり客のための寝具、客用の座布団などかさばるものの収納が必要である。そのため、押入に対する要求が顕在化したのであろう。

採光に対する不満も多くきかれた。これは、〔L〕の続き和室として住宅のコア部分にある場合特に不満が高いものと思われる。〔和室1〕の最大の不満点について図7-7に示す。コア部分(中間型)では、最大の不満点は採光が不十分なことであり、54.8%も回答している。南面しているタイプではこの不満は少なく17.1%となり、多いのは「押入が狭い」ことで、54.3%となる。中間型は押入の不満がないわけではないが、最大の不満は採光だということであろう。従って、和室に求められる要件の優先順位は、まず十分な採光、次に押入の充実である。

その他の意見の内容は、「狭い」4世帯、「間取り(部屋の位置)が悪い」2世帯、「収納がない」1世帯である。調査対象となる〔和室1〕は全て6畳である。「狭い」という選択肢を設けなかったが、行為が多様化し、転用を強いられる現状から考えれば、選択肢を設けていれば、さらに回答者が増加したであろう。

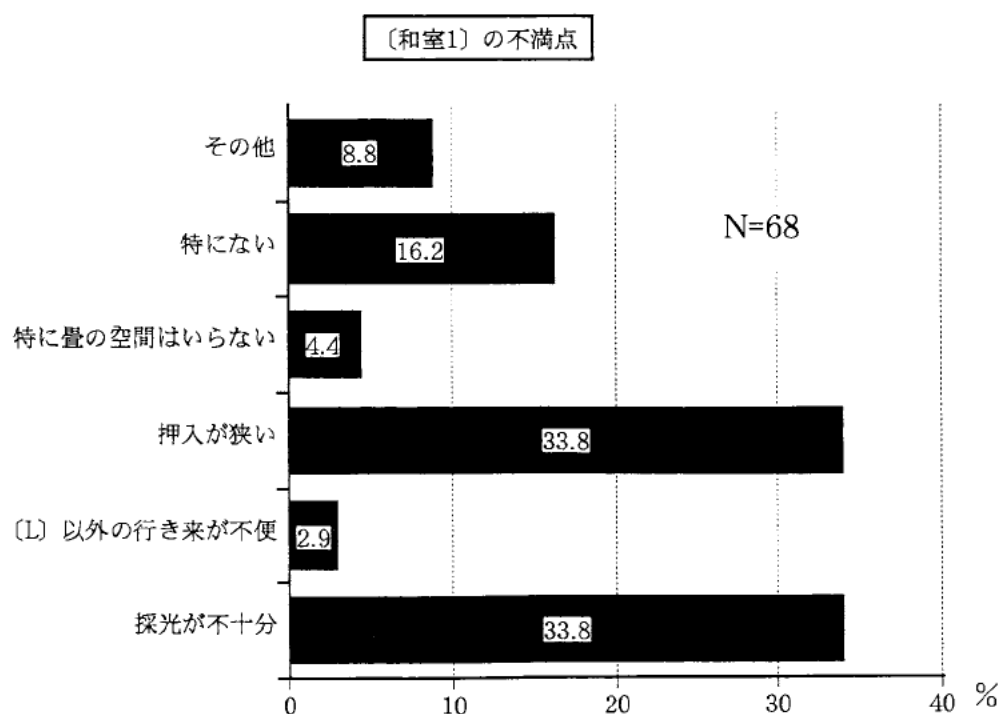


図7-6 〔和室1〕の不満点

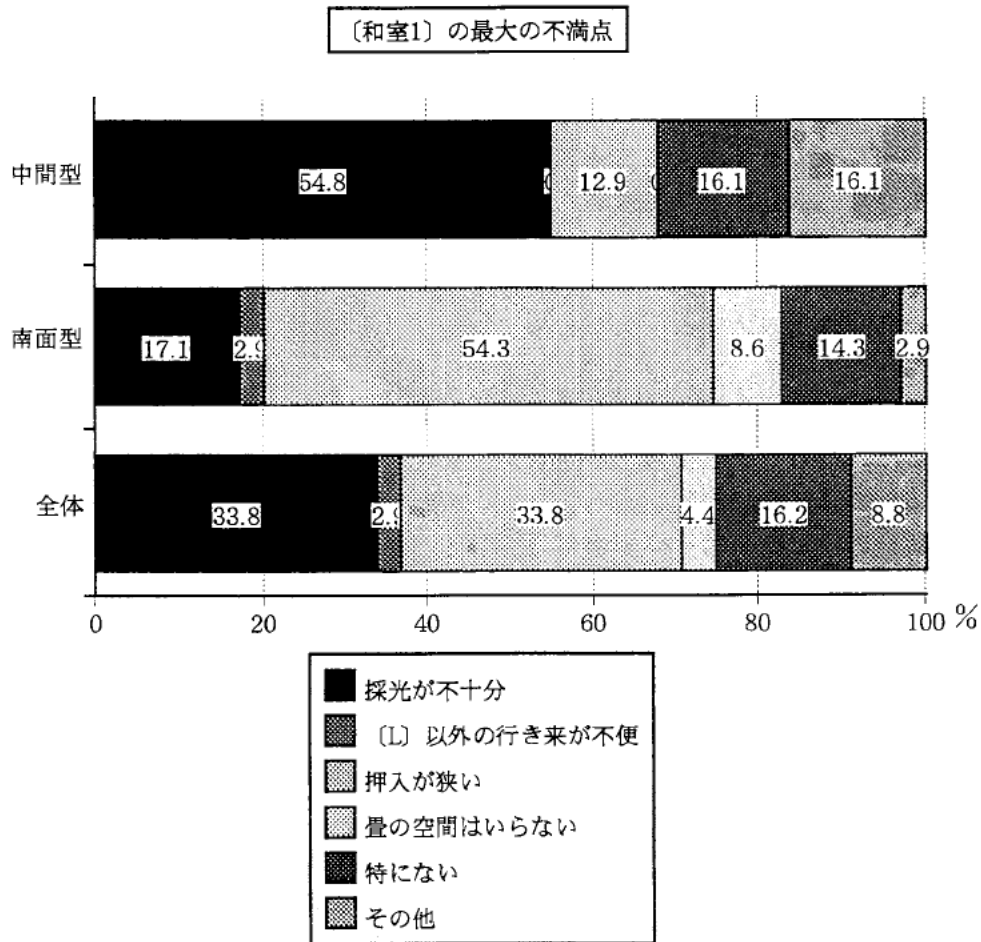


図7-7 〔和室1〕の最大の不満点

〔洋室1〕の不満点を図7-8に示す。〔洋室1〕が該当するのは87世帯(調査対象総数の98.9%の当たる)である。該当しない1世帯は〔和室〕が2室の2LDKである。

「狭い」が最も多い不満である。35.1%を占めている。次いで「壁の引っ張りが邪魔」が24.7%、「収納部分が狭い」が22.1%で、この3項目が主な不満点である。

「狭い」については『金沢』のどの部屋についても回答が集中した項目である。〔洋室1〕の規模別に〔洋室1〕の不満点をみたところ(図7-9)、4畳～6畳の規模の〔洋室〕の1世帯については「狭い」に回答している。また、6畳～8畳のタイプの世帯では37.1%が回答しており、8畳以上のタイプでは「狭い」に回答せず、「特になし」の回答が多くなる。従って、サンプル数が少数であるので明確なことはいえないが、規模が大きくなるに従い「狭い」という不満が少なくなる。

〔洋室1〕の収納スペースは、押入より奥行き狭いクローゼットである場合が大半である。例えば1間の間口があっても総収納量には相当な違いが生じるだろう。しかし、〔洋室〕にタンス類の収納家具を置くと、ベッドや学習机が置かれていることを考えると、活動ス

ペースがほとんどなくなる。そのため、クローゼットは洋服の収納などに便利であると考えられる。従って、〔洋室〕のクローゼット以外に収納スペースを増加する事が可能でない場合などは、住戸全体の収納量を増加する事などで対処すべきであろう。

「壁の引っ張りが邪魔」は、これがなければ収納スペースが増加するのにとおぼせるものである。壁の引っ張りとは鉄骨の柱や梁である。SRC造の場合やむを得ないと思われるが、部屋の中に柱や梁が引っ張らないような平面計画上の処理をするとよいだろう。

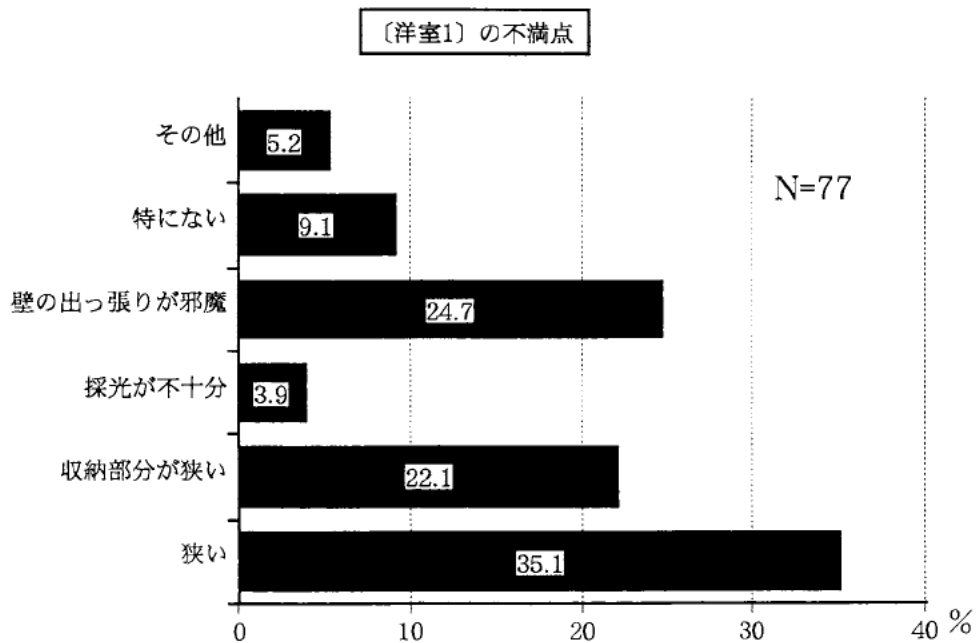


図7-8 〔洋室1〕の不満点 『金沢』

その他の意見は「結露や湿気が気になる」3世帯、「畳の方がよい」1世帯である。結露・湿気を問題とした2世帯はいずれも南面しない間取りである。〔洋室〕はほとんどの住戸タイプで南面しておらず、選択肢を設ければ、さらに多くの回答が得られたと思われる。北陸の湿度の高い風土上、結露・湿気対策は必至であるだろう。しかし、具体的な対策を講じていないのが現状である。

また、〔洋室1〕は家族の寝室、物置に使用している世帯から、「床はカーペット敷きでなくフローリングが良い」という意見がある。この意見が出されたのはパークサイト玉川である。パークサイト玉川は、〔洋室〕だけでなく、〔L〕〔D〕廊下がすべてカーペット敷きである。カーペット敷きは汚れやダニ、摩耗などの問題があるだろう。しかし、騒音を軽減する利点もある。できれば、分譲時に床材を選択できる方式が望ましい。

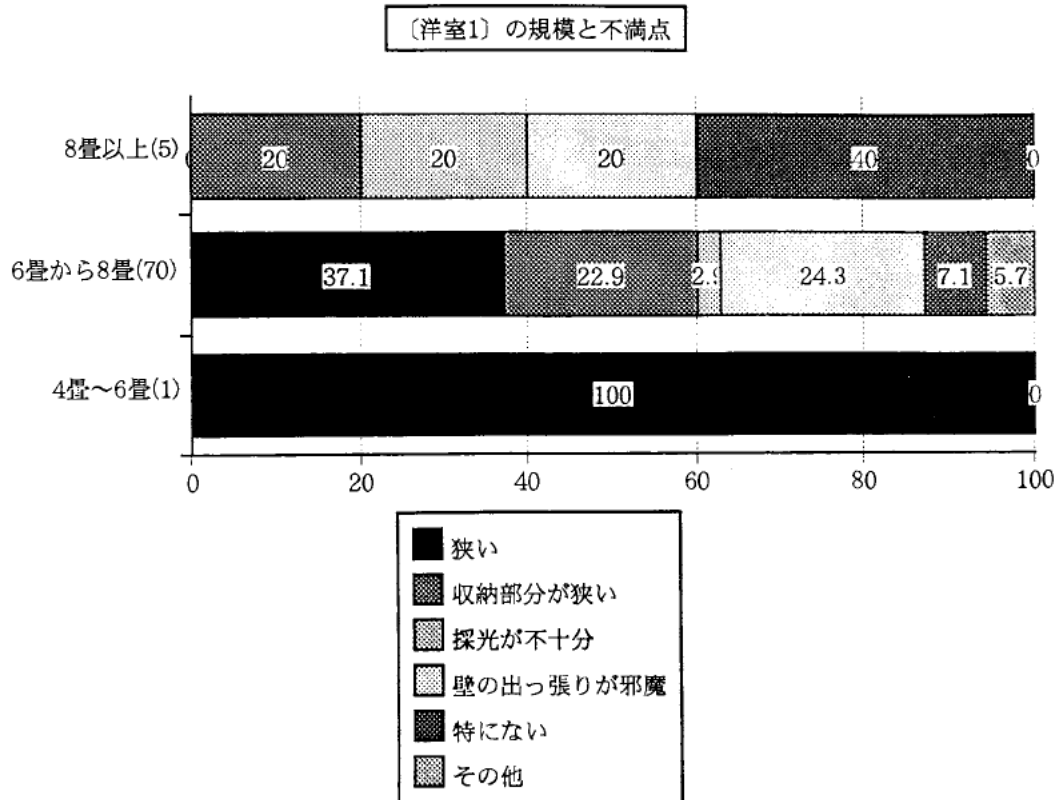


図7-9 〔洋室1〕の規模と不満点 『金沢』

(3) スペース要求

「現在の住宅にあと12畳分自由に増やせるとしたらどのようにしたいですか。次の選択肢から自由に選んで○をつけ、12畳を配分してください。」という設問を行ったところ、図7-10に示すような結果が得られた。これを、家族人数別にみたものが図7-11、家族構成別にみたものが図7-12である。

選択肢は図7-10に示す18である。どの選択肢を選択したかをみると、最も多いのが「リビングを広くする」で50.6%(複数回答 以下同様)である。〔L〕〔LD〕の不満点で狭さを多くの世帯が指摘したが、スペース要求でも多くの世帯で挙げられており、問題は深刻であるといえよう。〔L〕への広さ配分は多い世帯で12畳全部、少ない世帯で2畳である。平均すると約5畳となった。現在の〔L〕の規模は8畳前後であるため、要求される〔L〕の広さは13畳程度であるといえるだろう。

次いで「収納スペースを広くする」で49.4%である。広さ配分は最も広くて10畳、少なくても0.5畳である。平均すると約3畳である。10畳など広く配分している世帯は、各居室における収納スペースへの増加要求というよりも、納戸など収納のための部屋要求ではないかと思われる。

上記のように、〔L〕と収納スペースの広さ要求は全体の半数にのぼる。〔L〕に行為が集中し多様化していることや、住宅内に生活用品が溢れていることなどは、日常的に問題となっており、解決したいと望んでいることなのであろう。そのため〔L〕と収納スペースの

広さ要求につながっている。この2つに回答が集中しているのは、この問題が解決しなければ他の問題まで意識がいかないという面があるためであろう。

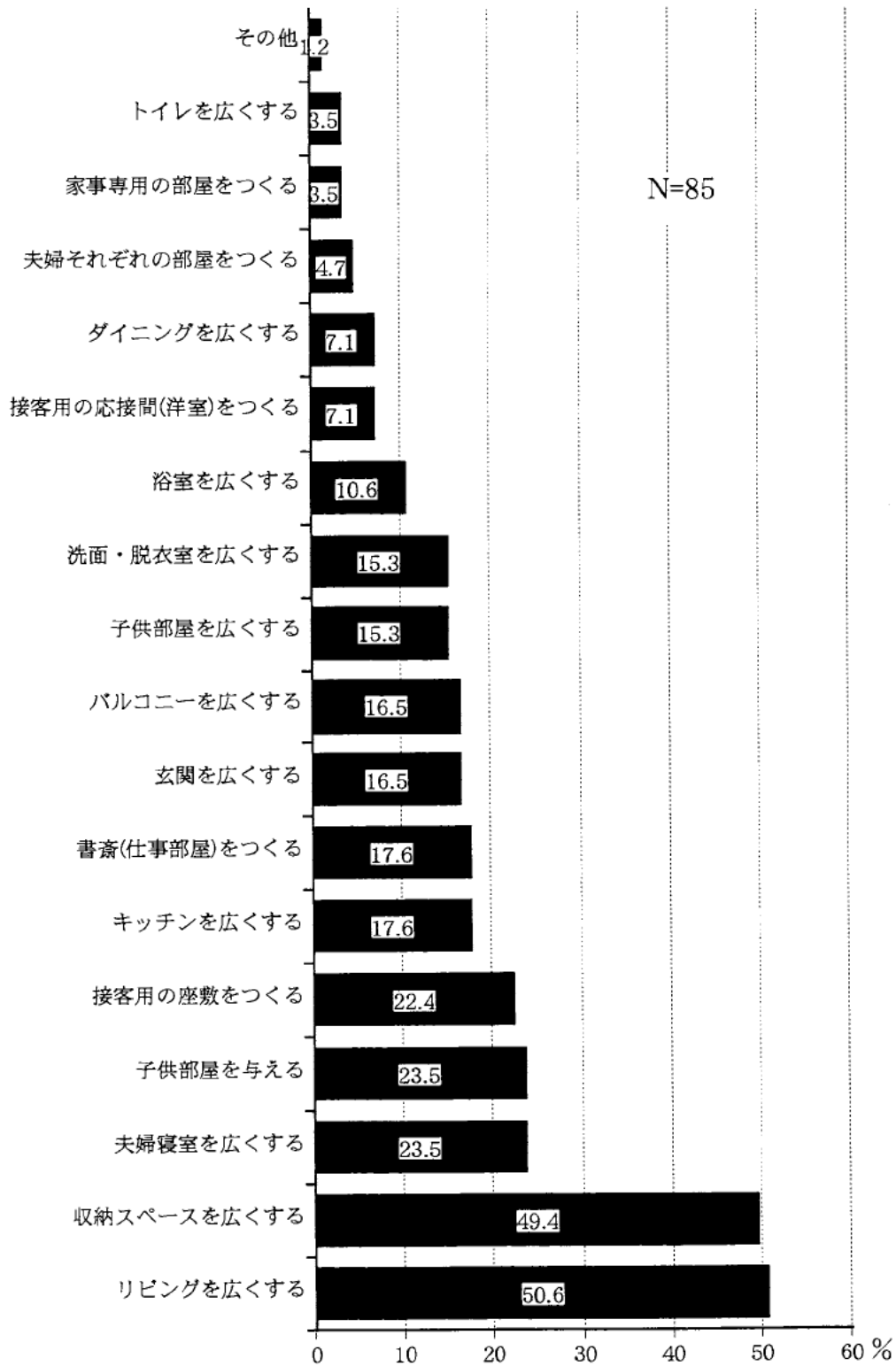


図7-10 スペース要求 『金沢』

約20%強の世帯は「夫婦寝室を広くする」「子供部屋を与える」「接客用の座敷をつくる」を回答している。夫婦寝室が接客に転用されがちであること、部屋数が絶対的に不足していることなどの改善策としての要求であるといえよう。

「夫婦寝室を広くする」「書斎(仕事部屋)を作る」「夫婦それぞれの部屋を作る」「家事専用の部屋を作る」など夫や妻の専用空間についてみると、最も多いのが「夫婦寝室を広くする」で、23.5%である。次いで「書斎(仕事部屋)を作る」で17.6%である。夫婦寝室になる居室は〔和室〕で6畳、〔洋室〕で大きくても7畳前後である。〔和室〕は日中他の用途に転用されがちであること、〔洋室〕はベッドなど家具を置くとほとんど空間が余らないことなどから、広さ要求につながったものと思われる。また、「書斎」については、現状で書斎をもっている世帯は全体の25%ある。さらに17%が要求しているため、書斎要求は全体の3分の1以上あるといえるだろう。前述のように〔L〕も寝室にも広さに余裕がないため、仕事などはダイニングテーブルやリビングの机でする世帯が多いものと推察される。しかし、近年パソコンなどで仕事をする者も増加している現状から、書斎という決まった空間の要求につながったものと思われる。「夫婦それぞれの部屋」や「家事専用室」要求はわずかである。

子供部屋への要求をみると、「広くする」要求より「与える」要求のほうが多い。家族人数でみると、「広くする」「与える」ともに4人、5人世帯、つまり子供が2人から3人いる世帯に多くみられる。家族構成でみると、単身者も含めた家族人数の少ない世帯では「広くする」が非常に多く、夫婦+長子6才以下の世帯や、夫婦+長子小学生世帯では特に「与える」要求が強くなる。広さ配分は、「広げたい」大きさは最も多くて6畳、小さくて1畳で、平均すると3.2畳である。「与える」要求では、最も多くて10畳、小さくて4.5畳で、平均すると6.5畳となる。

接客用のスペース要求について、「接客用の応接間(洋室)をつくる」と「接客用の座敷をつくる」の2つの選択肢を用意した。接客用の部屋をつくることを希望した世帯は和室、洋室合わせて29.5%と、比較的多くの世帯が要求している。座敷と応接間とでは、座敷が22.4%、応接間が7.1%で、座敷派が応接間派の3倍ある。和室の格を利点と考えていると思われるが、応接間であれば、ソファやサイドボードなどの家具を必要とするため、座敷の方が経済的でもあることから、座敷が選択されたのであろう。また、泊まり客の対応などにも便利であるためだろう。家族構成別にみると、「座敷」要求は、子供のいる世帯で必ずみられることから、融通性への期待が感じられる。広さ配分は、応接間、座敷に関係なく約6畳である。

「キッチンを広くする」要求も17.6%と比較的多い。回答者が主婦であることもあろうが、単身者世帯でも回答が多いことから、集合住宅の台所は狭いと感じられているといえる。

また、「玄関を広くする」にも16.5%が回答している。観察調査で、玄関に自転車や大型の観葉植物をおいている世帯が多くみられ、玄関は者に溢れているという印象である。また、玄関だけで接客ということがありうるが、その場合問題を感じるのであろう。また、家族構成別にみると、子供が小さい世帯で要求が多くなっている。これは、三輪車やおもちゃの車、ベビーカー、外遊びの道具(例えば砂遊びのシャベルやバケツ)などを置いておくことが非常に多いためであろうと思われる。また、収納スペースに収納しきれないスポーツ用品(例えばスキーなど)が置かれやすい。広さ配分は最も多いので3畳、少なくとも0.5畳、

平均すると1.4畳程度である。

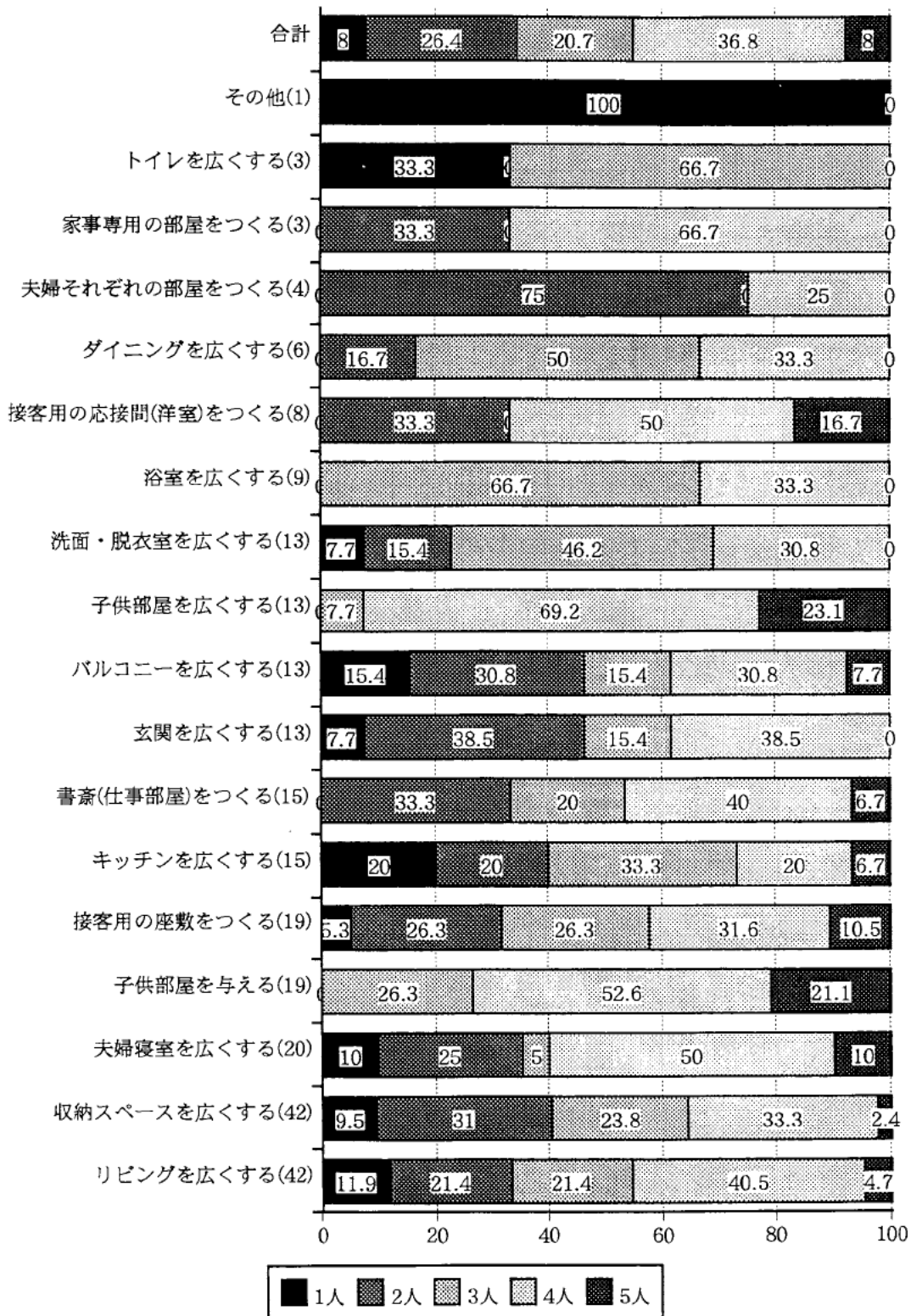


図7-11 家族人数別スペース要求 『金沢』

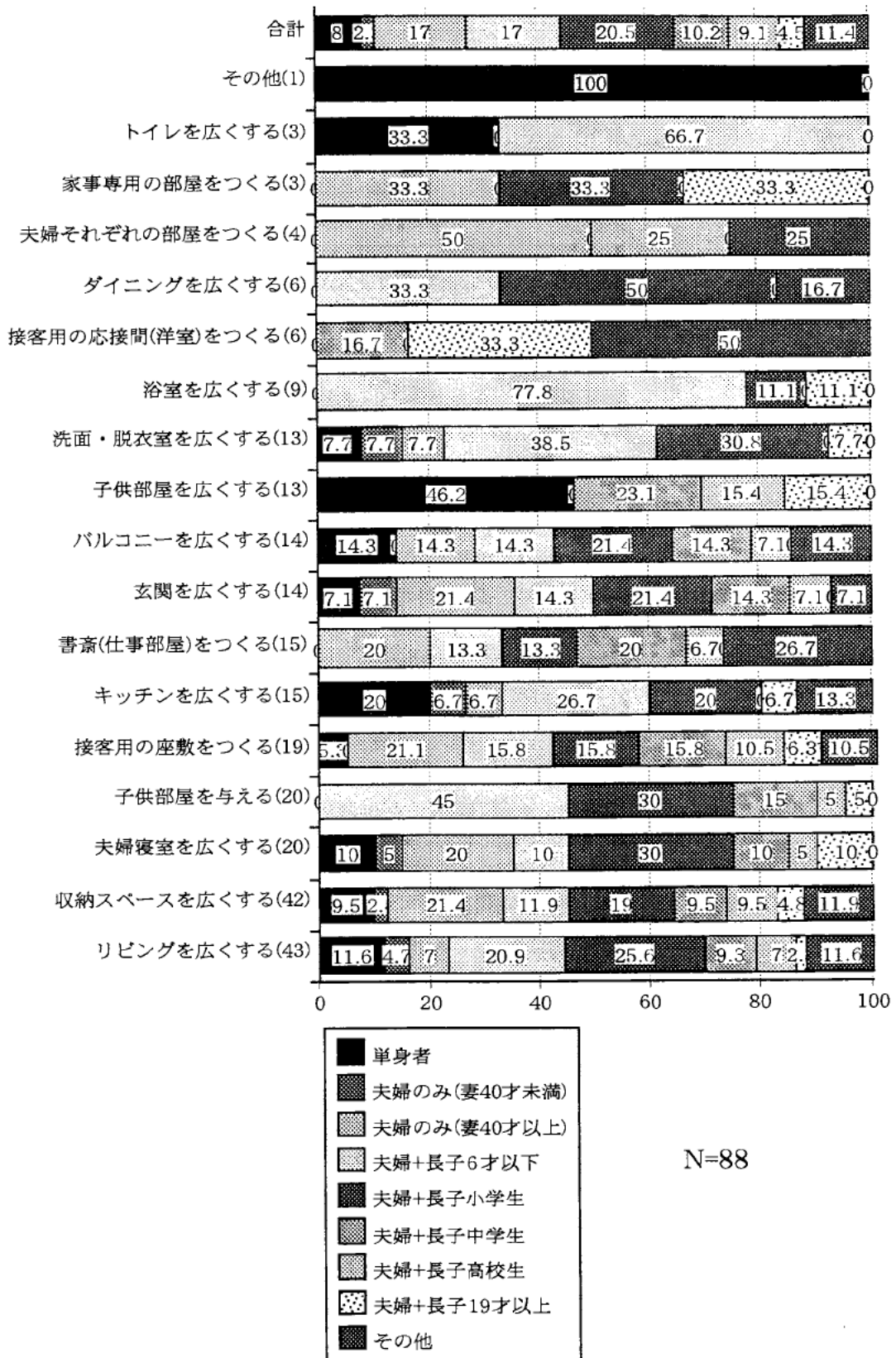


図7-12 家族構成別スペース要求 『金沢』

(4) 家族の住宅評価

現在の住居に対する家族の満足度はどの程度であるかを、世帯主、子供たち、総合評価で回答させた。世帯主と子供は回答者がそれぞれがどう感じているかを推測で回答させた。まず、世帯主の推測満足度について、図7-13に示す。

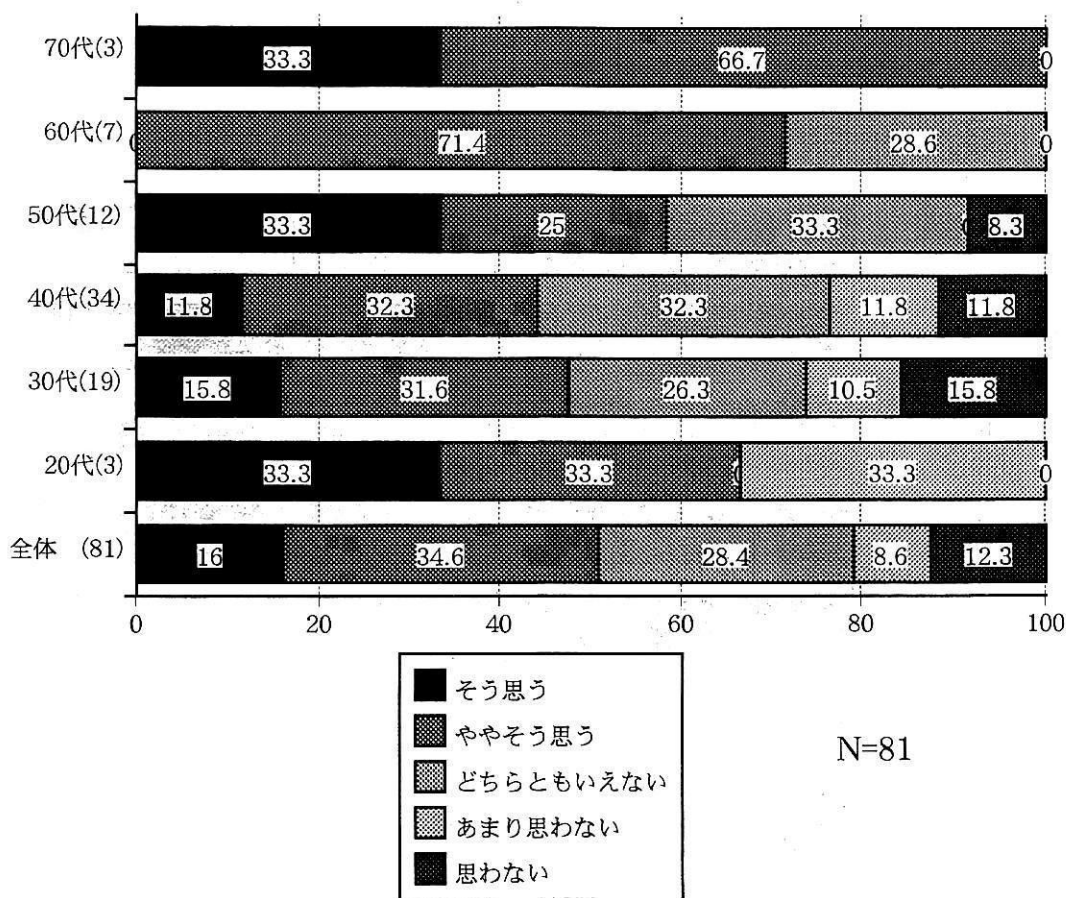


図7-13 世帯主年齢と世帯主の住宅に対する満足度 『金沢』

全体をみると、「満足していると思う」と回答した世帯が、「ややそう思う」を含めて50.6%、「満足していると思わない」と回答した世帯は「あまり思わない」を含めて20.9%である。圧倒的に世帯主は「満足している」と回答している世帯が多い。家族構成別にみると、世帯主が30代、40代の世帯で満足度が低く、その後年齢が上がるに従い満足度も上がっている。30代、40代は、子供が小学生、中学生の年齢層である。子供に個室を与えることや、家族としての生活用品が増加する時期でもある。現状の住宅に対する不満も前述のように多くみられた年齢層である。また、今後一戸建て住宅への転居も考えている

世代であると思われる。そのため、現住宅が満足度の低いものであることは否めないだろう。

次に、子供の推測満足度についてみると(図7-14)、全体をみると、「満足していると思う」と回答した世帯が、「ややそう思う」を含めて38.3%、「満足していると思わない」と回答した世帯は「あまり思わない」を含めて31.7%である。世帯主と比較し、子供の満足度は低いと考えられている。第1子の年齢別にみると、14才以上16才未満や、10才以上12才未満、12才以上14才未満の子供が第1子である世帯では、子供の住宅に対する満足度が非常に低いと感じていることがわかる。中学生、高校生世代である。この世代の子供をもつ世帯の最大の問題は個室数の確保であろう。また、この時期の子供は思春期を迎え、家族で過ごすより、一人や友人と過ごすことを好む発達段階である。当然個室で過ごす時間が増えるため、個室自体に対する要求もでてくるのであろう。例えば、広さ、収納スペースに始まり、床仕上げ、壁処理、色彩などである。

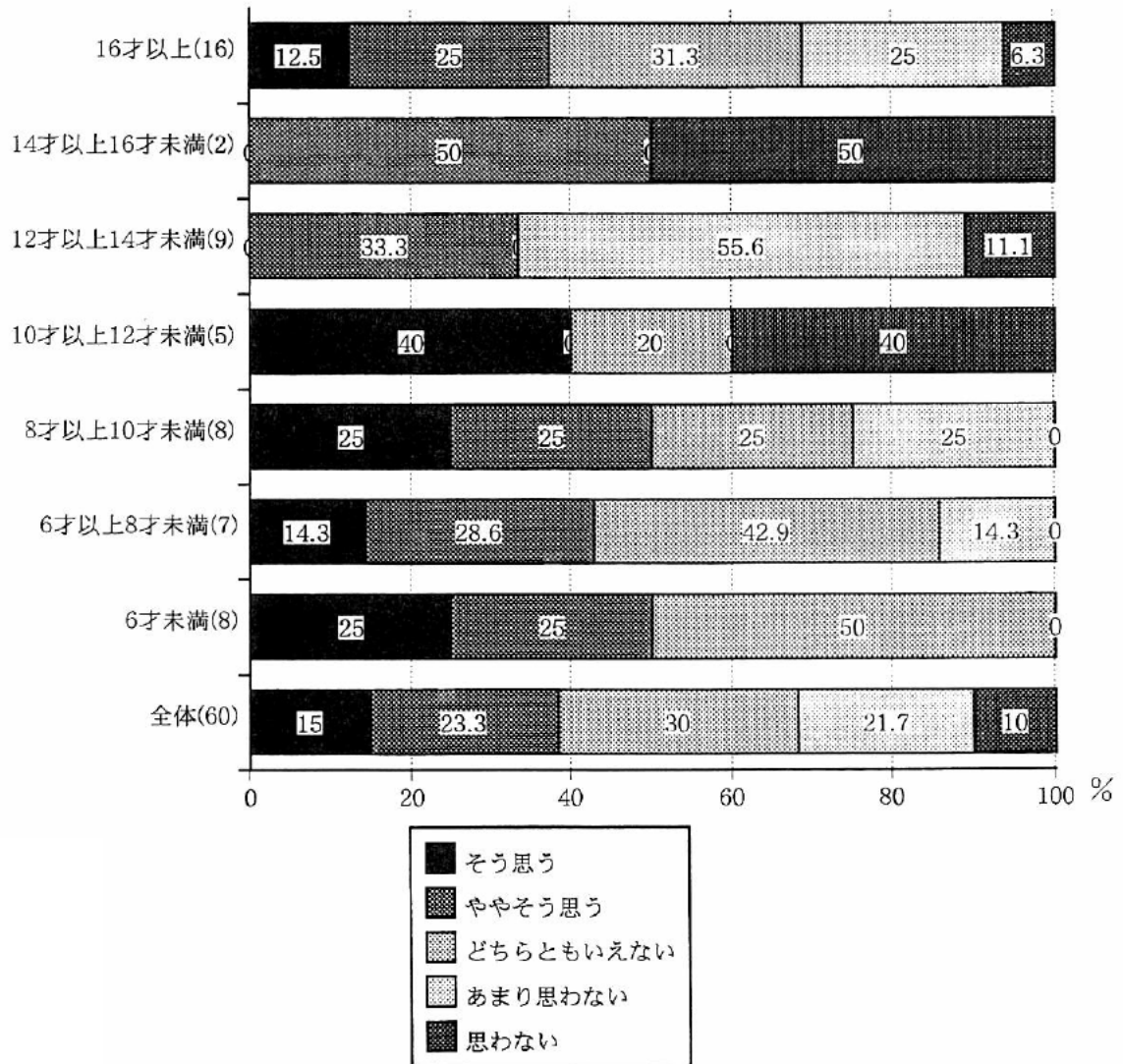


図7-14 第一子年齢と子供の住宅の推測満足度 『金沢』

また、子供数との関係を図7-14に示す。子供数が1人の世帯の子供の推測満足度は55.6%が満足と回答し、子供が2人世帯では37.5%、子供3人世帯は14.3%、子供4人世帯は0%となる。このように、子供数が少ないほど子供の住宅に対する満足度が高いと判断されている。これは、子供数が多い世帯では子供一人一人に個室を与えることができない、あるいは居住性の良い居室を与えられない、あるいは子供に選択させられないという事態が生じるためであろう。

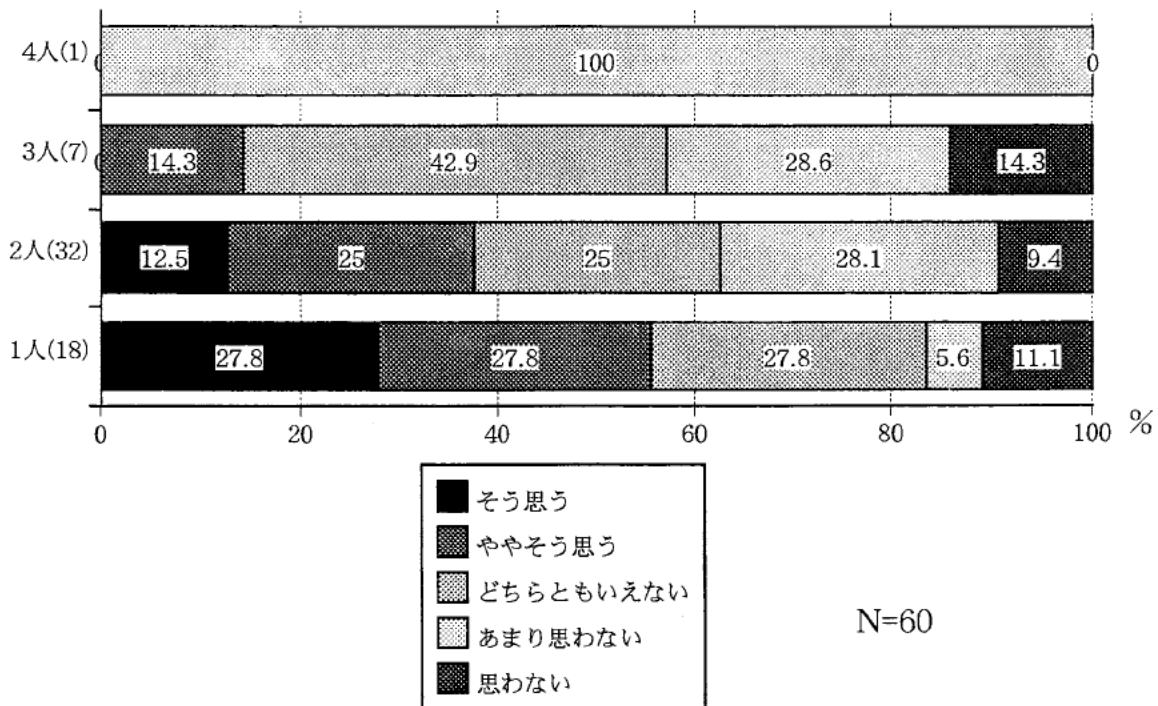


図7-15 子供数と子供の住宅の推測満足度 『金沢』

次に、総合的な満足度を回答させた。選択肢は「総合的に今の住宅の間取りに満足しているか」という設問に対して、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「思わない」の5段階である。その結果を図7-16に示す。

「そう思う」都会等したのは18.3%、「ややそう思う」が28.0%、「どちらともいえない」が14.6%、「あまりそう思わない」が20.7%、「思わない」が18.3%である。従って、総合的に「満足」と回答したのが46.3%、「不満足」といえるのが39.0%となり、やや満足と感じている世帯が多いという結果となった。

世帯主の推測満足度との関係をみると、「満足していると思うか」の設問で「思う」と

回答した世帯の92.3%が総合的に満足と回答している(総合的に満足かの設問に対して満足と回答した69.2%+ややそう思うと回答した23.1% 以下同様)。世帯主が「ややそう思う」とした世帯の70.4%(14.8%+55.6%)、「どちらともいえない」といた世帯の17.3%(4.3%+13.0%)と、世帯主の推測満足度と、配偶者が感じている満足度はほぼ一致しているといえる。

また、定住志向との関係を見ると、「ずっと住み続けたい」と回答した世帯の66.6%(33.3% +33.3%)、「これから10年以上は住み続けたい」と回答した世帯の66.6%(44.4%+22.2%)、「あと5年くらいは住みたい」と回答した世帯の42.8%(21.4%+21.4%)が、総合的に現住宅に満足していると回答している。逆に定住志向の弱い層である「良いマンションがあればすぐにでも移りたい」「良い一戸建て住宅があればすぐにでも移りたい」と回答した世帯では、住宅の満足度は低く、前者で0%、後方で14.3%しかない。

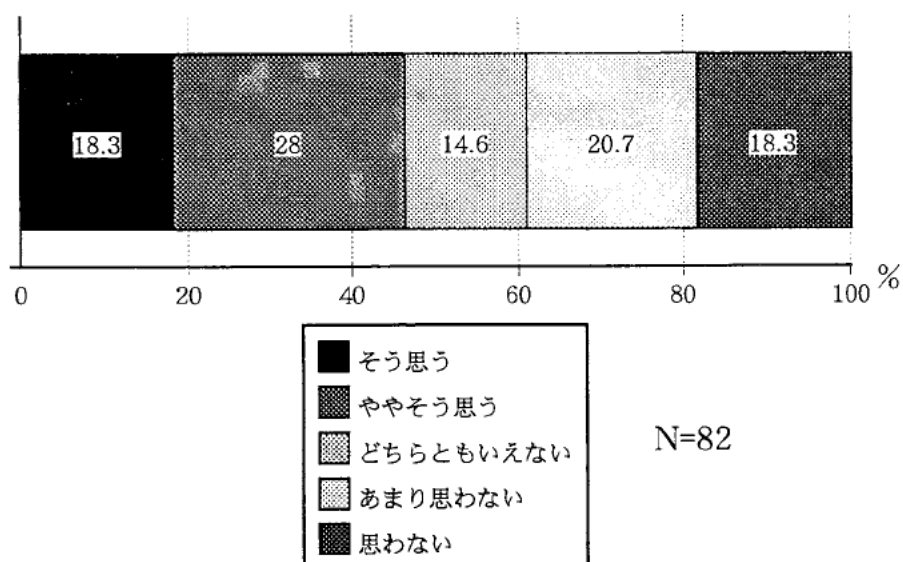


図7-16 総合的な住宅の満足度 『金沢』

第2節 『松任』における居住性評価

(1) 住宅内部評価

住宅内部の各室の広さや間取りなどに関する満足度を探るために、12項目挙げ、「満足している」「まあ満足している」「多少不満がある」「非常に不満がある」の4段階で回答させた。その結果を図7-17に示す。

全体的にみて、満足度が高いといえる。総合的にみた満足度は80.9%を占め、「非常に不満」と回答したのは4.0%、「多少不満」と回答したのが15.0%であるので不満率は19.0%であり、満足度が非常に高いといえる。『松任』の多くの住宅は注文一戸建て住宅であること、入居してあまり年数がたっていないこと、前住宅は持ち家の一戸建て住宅が

多いものの民間賃貸集合住宅の割合も高く、概して規模が大きくなったと考えられるためである。

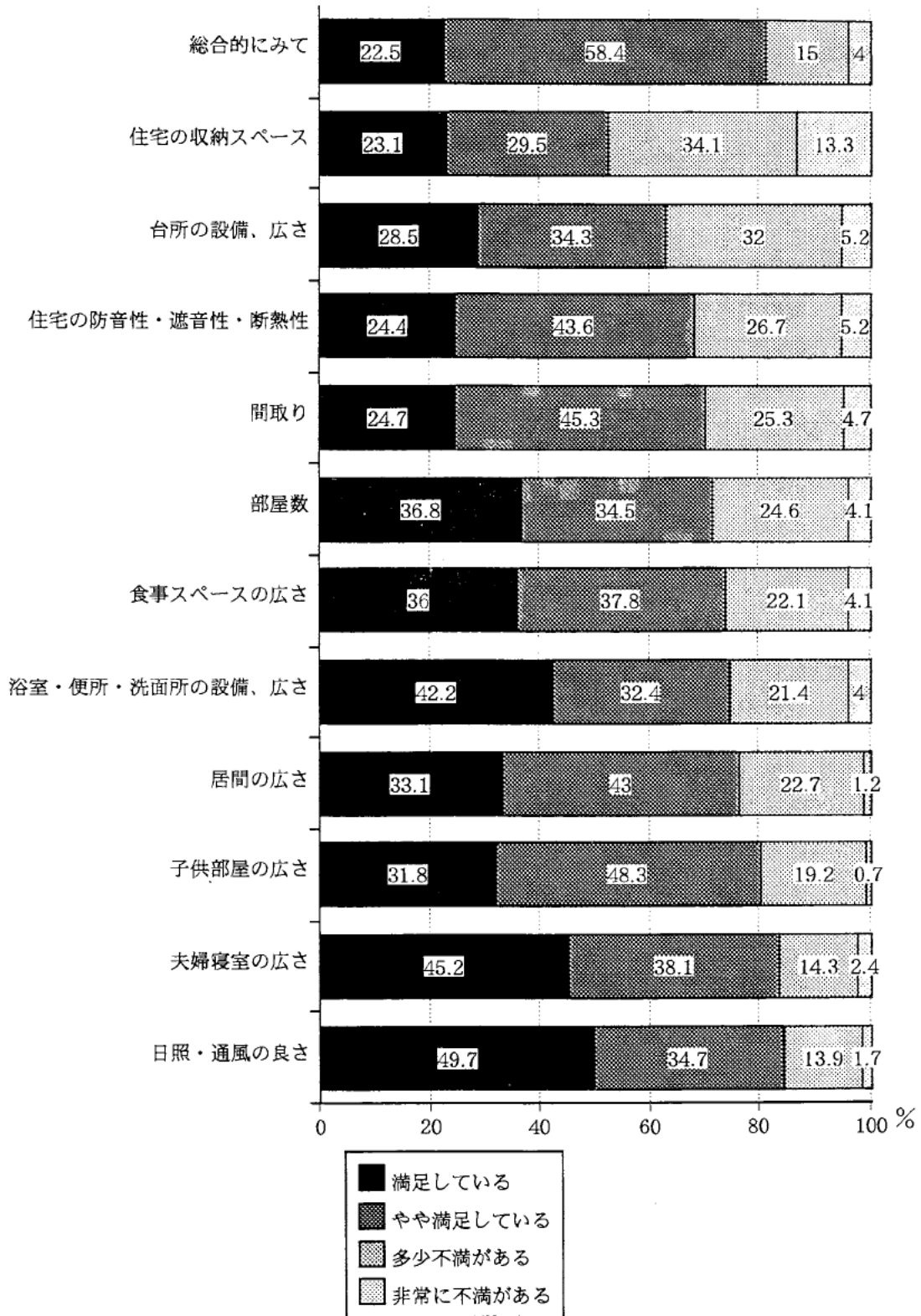


図7-17 住宅内部の評価 『松任』

満足度が最も高い項目は「日照・通風の良さ」で84.4%（「満足している」と回答した49.7%+「やや満足していると回答した34.7% 以下同様）である。次いで多いのが「夫婦寝室の広さ」83.3%（45.2%+38.1%）、「子供部屋の広さ」80.1%（31.8%+48.3%）である。この3項目は80%以上の満足度である。以下「居間の広さ」「浴室・便所・洗面所の設備、広さ」「食事スペースの広さ」など、各居室やスペースの広さや設備に対する満足度が高いといえる。その中では「台所の設備、広さ」が比較的満足度が低いと言えるだろう。前述のように注文住宅が多いため、自分の家族の要求に最も応えた間取りや広さ配分をしているため、上記のように広さの評価が良いのであろう。しかし、台所が比較的高くないのは、台所の広さよりも設備にあると思われる。台所設備は充実させるのに上限はなく、非常に高価である。住宅設備の中で最も費用がかかる空間である。ある程度満足の得られる設備を選択したとはいえ、主婦としてはもう少し充実させたい、デザインを懲りたいなどの希望があるのであろう。また、使用するまでは満足していても、入居して毎日使用すると、設備や配置で思いもなかった不都合が生じてきたということがあるかもしれない。

各居室の満足度が高いが、最も満足度が高いのは「日照・通風の良さ」である。住宅の居住性能の基本的な要件である。「満足している」と回答したのが49.7%と半数が非常に満足している。入居理由で「日当たり・風通しが良い」ことを入居の理由に挙げた世帯が92.4%もあり、このことが最大の入居理由になっていることから、『松任』への転居が日照や通風、さらには2番目に入居理由に挙げられている「周りの自然環境の良さ」を期待していることだとわかる。居住性評価として、「日照・通風の良さ」が最も満足度が高いが、期待通りであったことを示しているのだろう。

また、最も満足度が低いのは「住宅の収納スペース」である。不満感を感じている世帯が半数もいる。収納スペースはいくらあっても足りないと感じるものである。住宅の計画段階では比較的多めにとったつもりでも、入居して数年たつと生活用品が増加してくるため、収納スペースが不足しがちになるためである。これまで筆者が行ったどの調査においても、収納スペースについては不満感が高い。『松任』は満足度が非常に高いといえる。収納スペース不足は無尽蔵にスペースを割くわけにもいかないの、モノを増やさない生活のしかたをするなど、生活全体を見直すことが必要であろう。

(2) スペース要求

『金沢』と同様に「現在の住宅にあと12畳自由にふやせるとしたら」という条件で、図7-18に示す22の選択肢から自由に12畳を配分させた。

その他を除くと最も多くの世帯が選択した項目は「リビングを広くする」で26.1%である。次いで「洗面・脱衣室を広くする」で21.8%、「書斎を作る」20.0%である。

「リビングを広くする」を選択した世帯の広さ配分で、最も多くて12畳（43世帯中2世帯）、最も少なくても1畳（3世帯）、平均で約4畳である。「洗面・脱衣室を広くする」を選択したのは36世帯で、最も多くの広さを配分したのは4畳（3世帯）、少なくても0.5畳（2世帯）で、平均して1.8畳程度である。「書斎を作る」には33世帯が選択し、最も多い広さ配分は12畳（2世帯）、少ないのは3畳（2世帯）、平均して約5.8畳である。

以上も含めて、12畳全てを配分した世帯のある項目は、「子供部屋を与える」「夫婦それぞれの部屋を作る」「その他の人の部屋をつくる」「書斎をつくる」「接客用の応接間を作る」「接客用の座敷を作る」「リビングを広くする」「食事室を広くする」「台所を

「広くする」である。主に新たな増室希望で、その他はLDK部分のスペース要求である。

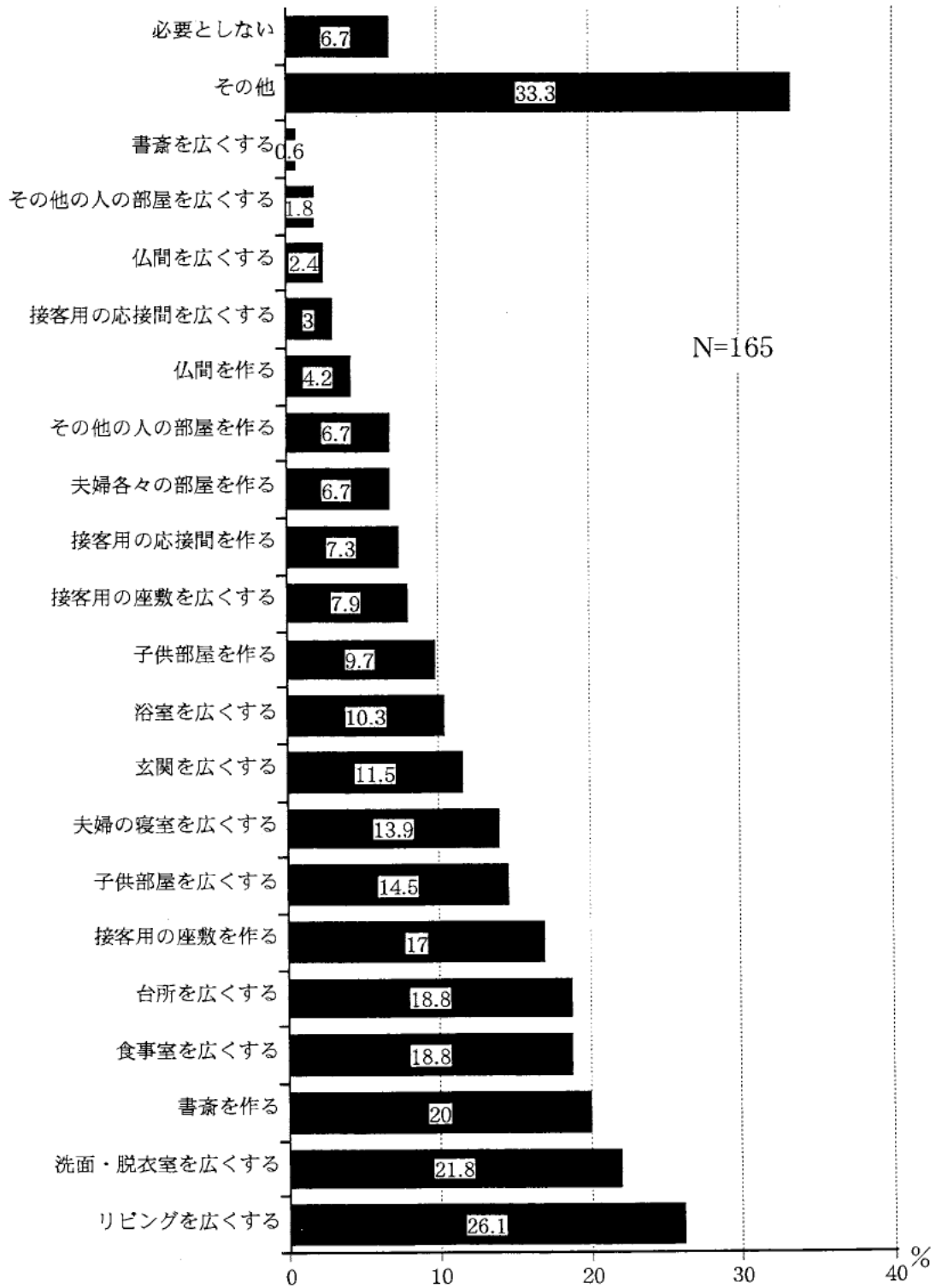


図7-18 スペース要求 『松任』

平均広さ配分で最も多いのは「子供部屋を作る」で約7.8畳、次いで「夫婦それぞれの部屋を作る」7.7畳である。「子供室を作る」は子供数が増加したことや、子供室に予定していた居室を他の用途、例えば納戸などに使用してしまったなどの理由で子供一人一人に個室を与えられなくなったのであろう。「夫婦それぞれの部屋を作る」は夫婦寝室以外に夫、妻の個室要求である。このように、家族員各員に個室が望まれているといえる。接客空間では、『金沢』と同様洋室の応接間より和室の座敷が好まれている。「接客用の座敷を作る」が17.0%、「広くする」が7.9%であるのに対し、「応接間を作る」が7.3%、「広くする」が3.0%と、2倍以上の世帯が座敷の増スペースを要求している。

「書斎を作る」を選択した世帯と世帯主の職業の関係をみると、「書斎をつくる」と回答した33世帯は、世帯主が専門・技術職の割合が高く32.7%で、事務職と技能・労務職の割合が低く5.9%である。教師や技術者など、家庭でも仕事をする人が多いと考えられる職業である。近年ではパソコンなどを設置して使用するための部屋の要望がでてきたのではないかと思われる。

「その他」の内訳は、最も多いのが「収納スペースを広くする」で55世帯中12世帯もある。また、「納戸をつくる、広くする」が8世帯、「物置」5世帯、「クローゼット」3世帯、「押入」2世帯、「書庫」1世帯あることから、収納スペースとしての増スペース要求をしている世帯は31世帯で、その他の回答の56.4%を占める。調査対象者全体の18.8%もあり、選択肢を設けていればさらに回答者は増加したかもしれない。その他には、「サンルーム」8世帯、「車庫を広くする」5世帯、「洗濯物干し場を広くする」4世帯などである。

(3) 外部環境評価

外部環境を評価させるため、図7-19に示す9の項目を挙げ、それぞれについて「満足している」「まあ満足している」「多少不満がある」「非常に不満がある」の4段階で回答させた。

その結果、「満足している」と「まあ満足している」を合わせた、満足している世帯が最も多い項目は、「自然の環境」である。「満足している」と回答したモノが最も多く63.4%、「まあ満足している」と回答した世帯が33.7%で、合計すると97.1%も占める。ほぼ全員が満足しているといえる。非常に不満と回答した世帯は1世帯のみである。

その他満足度(「満足している」+「まあ満足している」)が高いのは、「近所づきあい」「子供の遊び場・公園・緑地など」「周りからの騒音」「火災・地震・水害などに対する安全性」などが挙げられる。「満足している」と回答した世帯が最も多いのは前述のように「自然の環境」であるが、次いで多いのは「周りからの騒音」で52.9%ある。次いで「子供の遊び場・公園・緑地など」で40.0%である。これらを見ると、周辺の自然環境、静かさ、土地のなど建物が建て詰まっていない郊外の環境を非常に評価しているとわかる。

しかし反面、最も評価の低いのが「交通の便」で不満を感じている世帯が94.1%もある。また、文化施設や日常生活施設などの周辺の施設があまり整っていないことに対する不満も高い。自然環境や宅地環境に恵まれた住宅地で、住宅自体の評価も前述のように非常に

高いと言えるが、交通の便や生活・文化施設など、生活する上での地域としての居住性は低いと言わざるを得ない。郊外にニュータウンを計画し大量に住宅供給しているが、公共交通や周辺生活施設を整備することが大前提であろう。

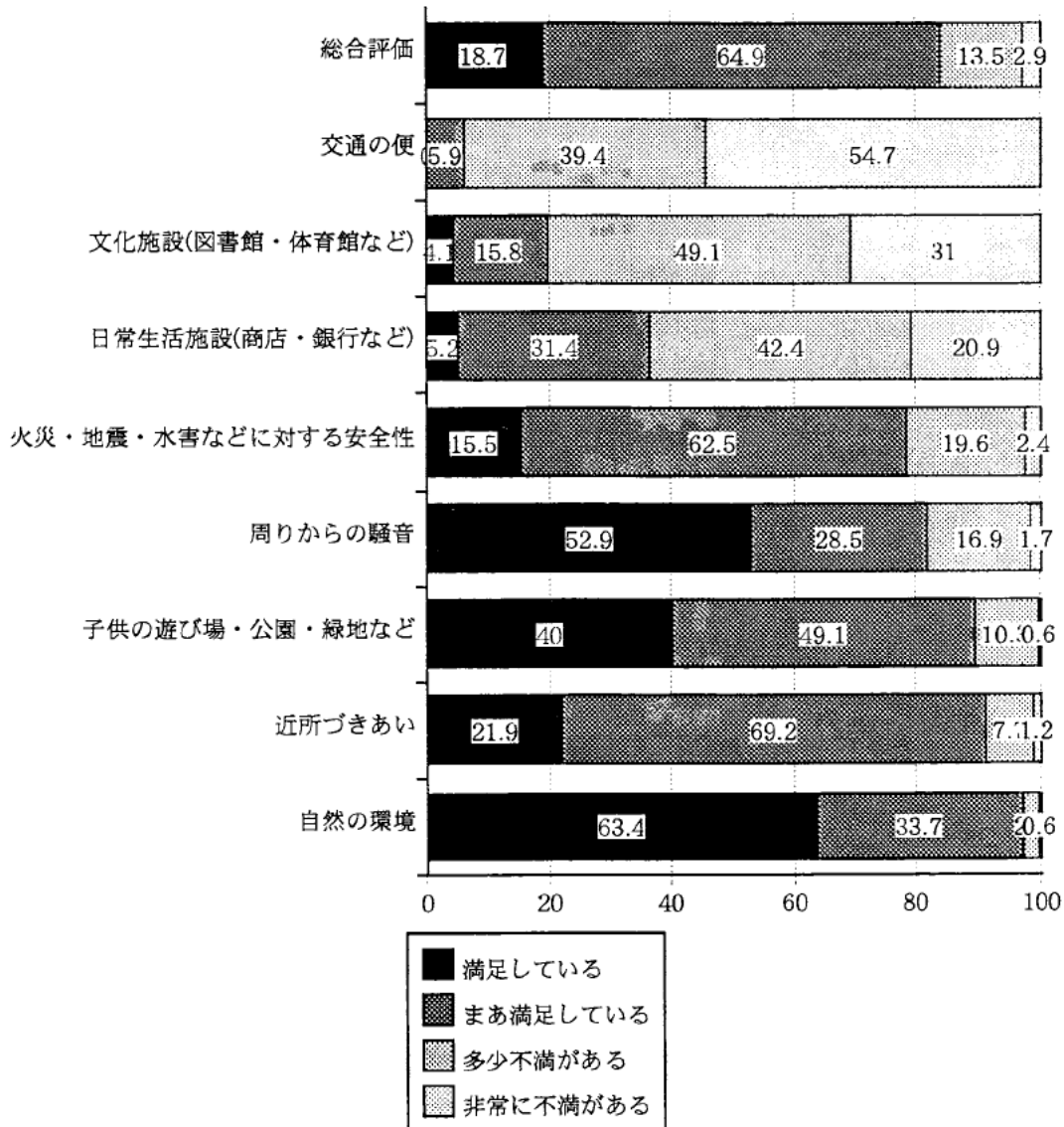


図7-19 外部環境評価 『松任』

総合評価としては、「満足している」が18.7%、「まあ満足している」が64.9%で、93.6%が満足している。前述のように公共交通や生活施設の未整備の現状には不満は高いが、入居の主な理由が自然環境や周辺環境であるので、総合評価が高くなったのであろう。家族構成によって評価が異なるかをみたが、全体的に評価が高く、違いを見いだせなかった。

第3節 『羽咋』における居住性評価

(1) 住宅内部評価

住宅内部の各室の広さや間取りなどに関する満足度を探るために、12項目挙げ、「満足している」「まあ満足している」「多少不満がある」「非常に不満がある」の4段階で回答させた。その結果を図7-20に示す。

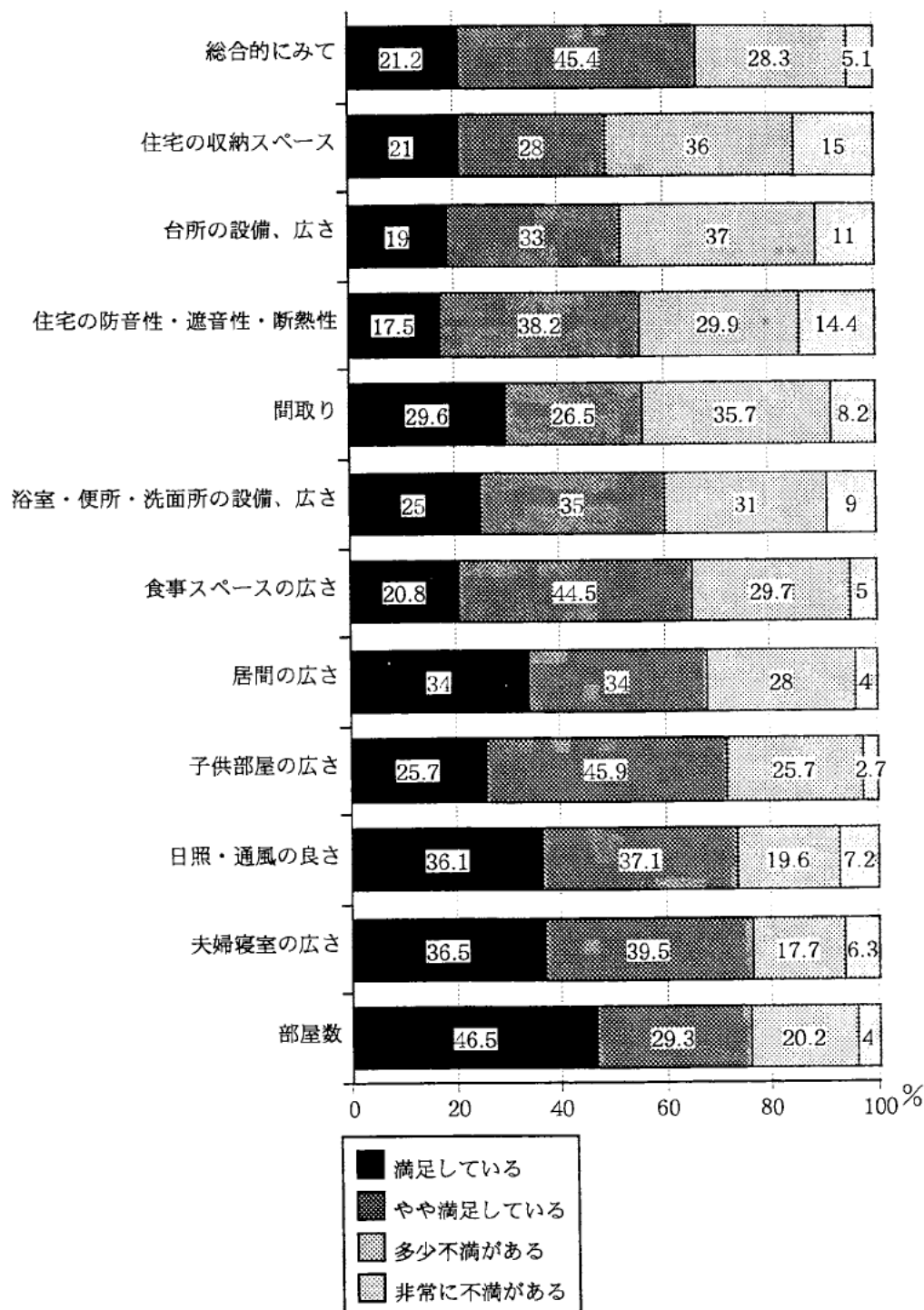


図7-20 住宅内部評価 『羽咋』

「満足している」と「まあ満足している」を合わせた満足度が最も高い項目は、「部屋数」で75.8%(46.5%+29.3%)である。次いで「夫婦寝室の広さ」で76.0%(36.5%+39.5%)である。その他「日照・通風の良さ」「子供部屋の広さ」「居間の広さ」「食事スペースの広さ」など、評価の差異は僅かである。

満足度が低い項目は、「収納スペース」49.0%(21.0%+28.0%)である。『金沢』『松任』と同様、最も評価が悪いのが収納スペースである。不満に感じている世帯が半数を超えている。同様の質問形式の『松任』と比較すると、満足度の低い項目の順が同じで、「収納スペース」「台所の設備・広さ」「住宅の防音性・遮音性・断熱性」「間取り」の順である。全体的に『松任』の方が評価がよいものの、地域や住宅の形態、居住者層が異なっても、住宅に対する不満点は同様であるのは興味深い。

収納スペースは前述のように、十分取られていても不満が出る箇所である。住宅内の整理がつかないのは収納スペースがないからとの判断になりやすいためである。たとえ収納スペースを倍増しても、数年たてば、同様の不満が出ることは容易に想像がつくだろう。台所の設備や広さについても、前述のとうりである。設備はどんどん新しく便利で美しい商品が開発されてくる。しかし、台所設備は非常に高価であり、台所の改造を余儀なくされるため、簡単には設備の更新ができないのが現状である。主婦が毎日使う場だけに、常に不満が現れる箇所なのだろう。

(2) スペース要求

『金沢』『松任』と同様に「現在の住宅にあと12畳自由にふやせるとしたら」という条件で、図7-21に示す23の選択肢から自由に12畳を配分させた。『松任』より選択肢が1津多いのは、『松任』の調査結果において、「その他」の回答で「収納スペース」が多かったことを受け、『羽咋』では「収納スペースを広くする」という選択肢を新たに設けたためである。

最も回答が多かったのは、「収納スペースを広くする」であった。43.2%もの世帯で回答が得られた。次いで「台所を広くする」29.5%、「洗面・脱衣室を広くする」17.9%となり、収納スペースに対する要求が圧倒的に多いといえる。『松任』で最も多かった「リビングを広くする」には15.8%と比較的多いとはいえ、5番目の回答率である。これは、『松任』ではリビングはほとんど全世帯にあったが、『羽咋』は和室中心の間取りでリビングをもつ世帯は少数であるためである。その割には回答が多いといえよう。

『松任』では書斎や座敷の新設を望む世帯も多くみられたが、『羽咋』では多くが現在ある用途のスペースを広くすることを望んでいる。それは、現住宅規模が『松任』より小さいため、新たな用途を専用化するための居室要求より、基本的に生活スペースの増加を望んでいるといえるだろう。その中で、応接間の新設要求が16.8%の世帯から出されている。『金沢』『松任』では座敷要求が強く、応接間要求はごく僅かであった。しかし、『羽咋』では「座敷の新設」が8.4%、「広くする」が1.1%であるのに対し、「応接間の新設」が16.8%、「広くする」が2.1%で、『金沢』『松任』と全く逆の現象である。これは、『金沢』『松任』は間取りの構成が洋室中心であるため、融通性や格式、家具購入などの経済性から和室を接客室とすることを希望しているのに対し、『羽咋』は和室中心の間取りであるため、すでに座敷があるか、改まった接客には洋室のほうが非日常的でよいと感じているためであろう。

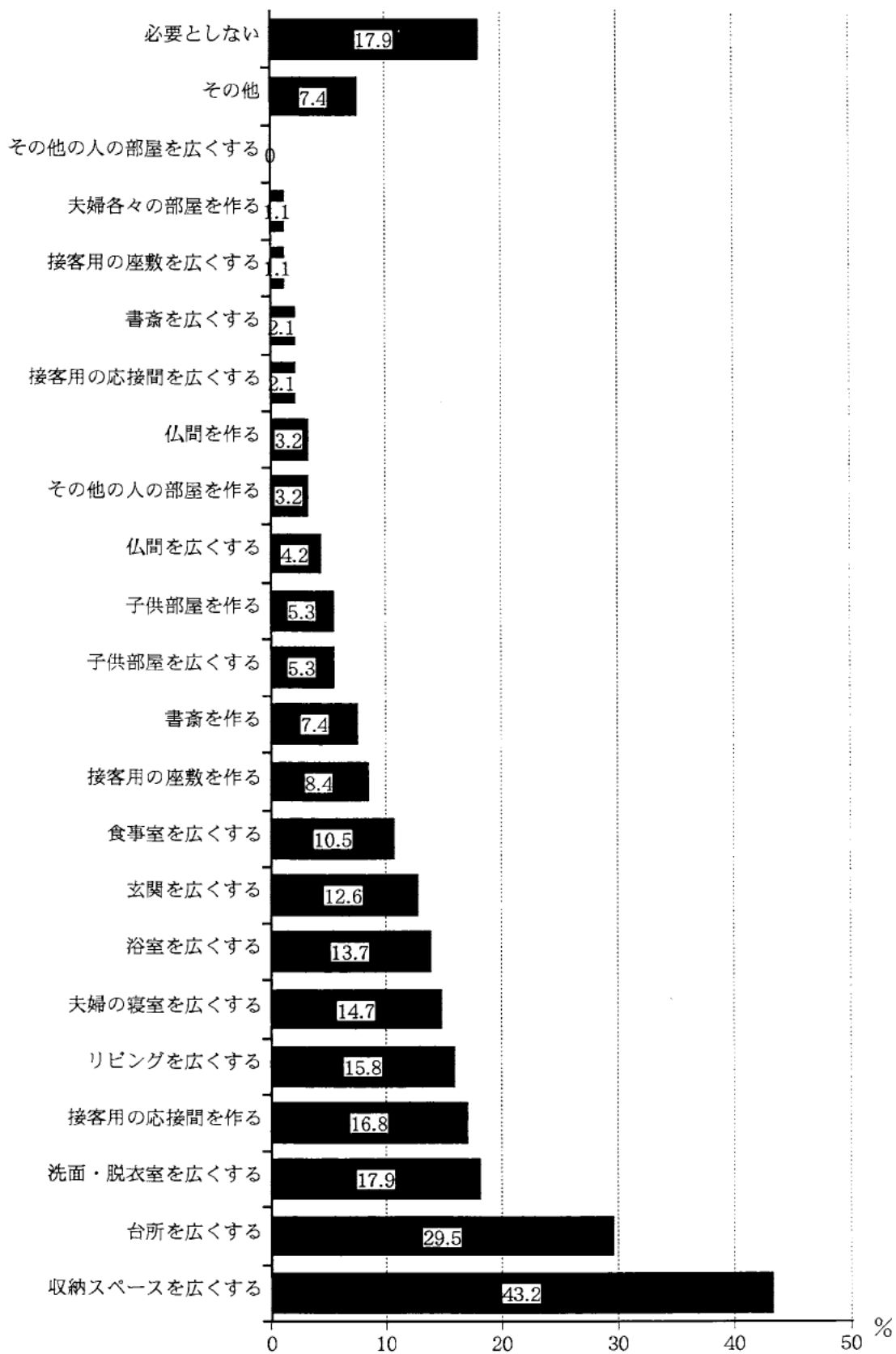


図7-21 スペース要求 『羽咋』

広さ配分の平均値で最も多いのは、「接客用の応接間を作る」で6.9畳程度である。次いで「座敷ほ作る、または広くする」で約6.4畳である。項目としては現在ある用途のスペースを要求しているが、面積は接客用の空間に多くを要求している。それは、現在多くのスペースで少しずつ狭いと感じているためで、住宅全体に関わって問題を感じているのであろう。

スペース要求の「収納スペースを広くする」と住宅の収納スペースの満足度との関係を見ると、満足度が低い世帯ほど、収納スペースの増加を要求しており、「満足している」と回答した世帯の88.9%は、収納スペースの増加要求はない。また、「台所を広くする」と「台所の設備・広さ」の満足度との関係、「洗面・脱衣室を広くする」と「浴室・便所・洗面所の設備・広さ」の満足度との関係においても、収納スペースとほぼ同様の傾向がみられた。

(3) 外部環境

外部環境に関して、図7-22に示す8の項目に対し、「満足している」「まあ満足している」「多少不満がある」「非常に不満がある」の4段階で評価を求めた。

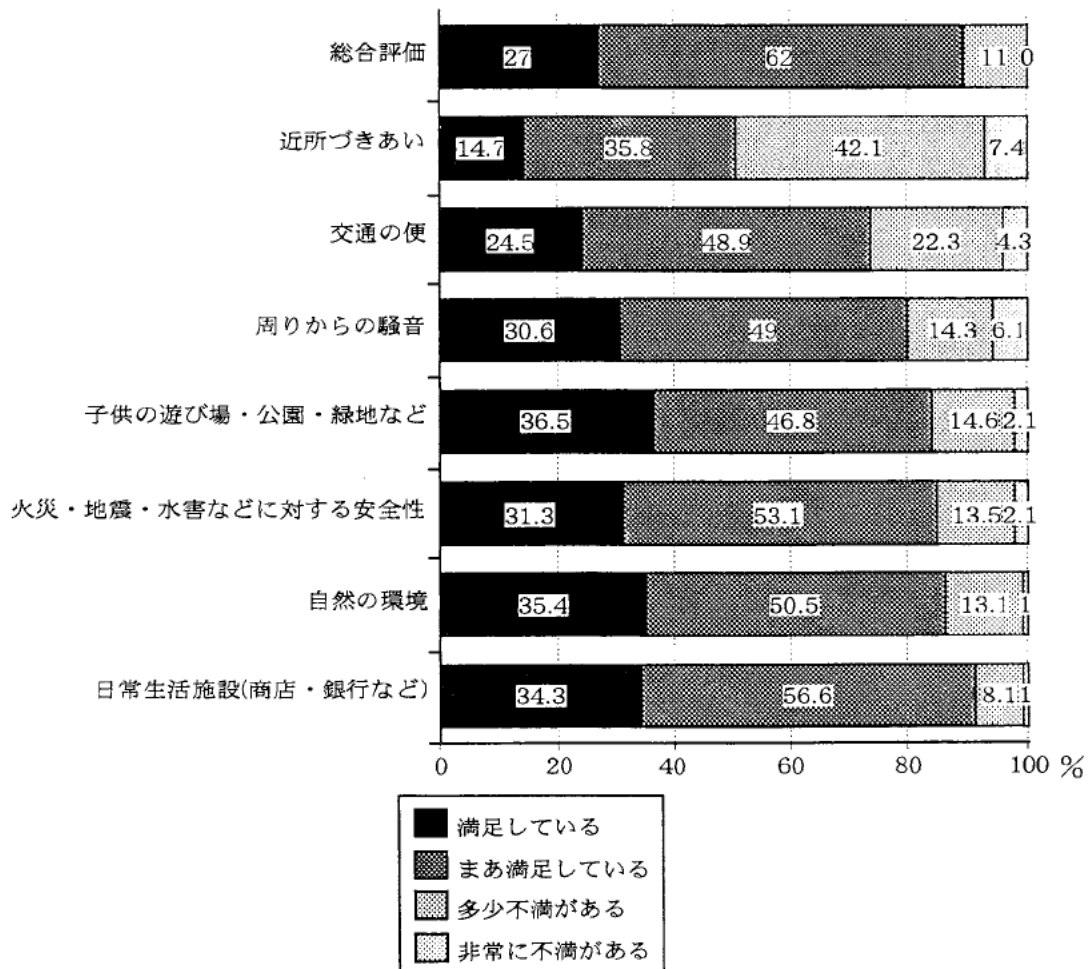


図7-22 外部環境評価 『羽咋』

最も満足度が高いのは、「日常生活施設(商店・銀行など)」で、90.9%(「満足している」34.3%+「まあ満足している」56.6% 以下同様)である。次いで「自然の環境」が85.9%(35.4%+50.5%)、「火災・地震・水害などに対する安全性」84.4%(31.3%+53.1%)、「子供の遊び場・公園・緑地など」83.3%(36.5%+46.8%)となる。

『羽咋』はJR北陸本線羽咋駅前が調査地である。徒歩圏内に、銀行、スーパーマーケット、商店街、市役所、病院、保健所、警察署、消防署、郵便局等の生活施設の他、文化会館、体育館、テニスコート、運動公園、歴史民俗資料館などの文化施設もある。決して大規模のものではないが、必要な施設などが近くにあることは、生活上大変便利であることは間違いない。

また、「自然の環境」も大変評価されている。上記のように羽咋駅前の施設が集中している地区ではあるが、千里浜海岸も近くにあり、まわりは田畑の広がる地域である。地方の小都市らしく、自然と生活施設が同居していることが、いずれも評価されているといえる。

不満が高いのは「近所づきあい」で、満足度は50.5%(14.7%+35.8%)で、半数は不満を訴えている。『松任』では近所づきあいの満足度は高い。『松任』はニュータウンの分譲地であるため、居住者の社会経済階層が似通っている。しかし、既成市街地である『羽咋』は、古くから居住している者、最近住み始めた者など、『松任』などの新しい町とは異なる居住の形態がある。調査対象者を独立住宅居住者としたのでこの回答は独立住宅に限られ、階層としてもある程度限定されているが、地域には民間賃貸アパートなどが数多くみられ、多様な階層が混在しているといえる。その中で調査対象者には「近所づきあい」がしにくいと感じているのであろう。または近所づきあいがしやすいと感じる人とそうでない人とは分かれるのではないかと思われる。

「総合評価」は、満足度が89.0%(27.0%+62.0%)で、全体としては高いが、「まあ満足している」が多い。しかし、「非常に不満がある」と回答した世帯はなく、概して満足しており、特に不満を感じないという世帯が大半である。

第8章 高齢者と住まい

配偶者の親が高齢期になった場合、どうするのか。あるいは自分の親は老後どうするのか。また、自分の高齢期をどう過ごすか。誰とどのような住宅で暮らすか。これらは、高齢社会に突入した我が国では、避けて通れない難題である。特に『羽咋』は、第2章 第2節(P4 表2-2)で述べているように、幼少年人口、生産人口が現象し、恒例者人口が急増し、高齢化が深刻な地域である。

この章では、高齢者との同居に対する意識、高齢者対応の住宅設備設置の現状について述べる。

第1節 高齢期の住まい方に対する意識

(1) 『金沢』

『金沢』は親と同居している三世帯家族の割合は、第3章、第4節(P10 表3-4)に示したように、全体の2.3%、2世帯しかない。非常に少ないといえる。世帯主の年齢をみると(第3章 第1節 P7 表3-1)、30代~40代の世帯が63.6%を占めている。今後、親との住まい方を考えていかねばならない世代であるだろう。しかし、現在の住宅は集合住宅であるために、高齢者との同居がどう影響すると居住者が考えているのかを調査した。

そこで、「高齢者との同居するには不向きだ」について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の5段階で回答させた。その結果を図8-1に示す。

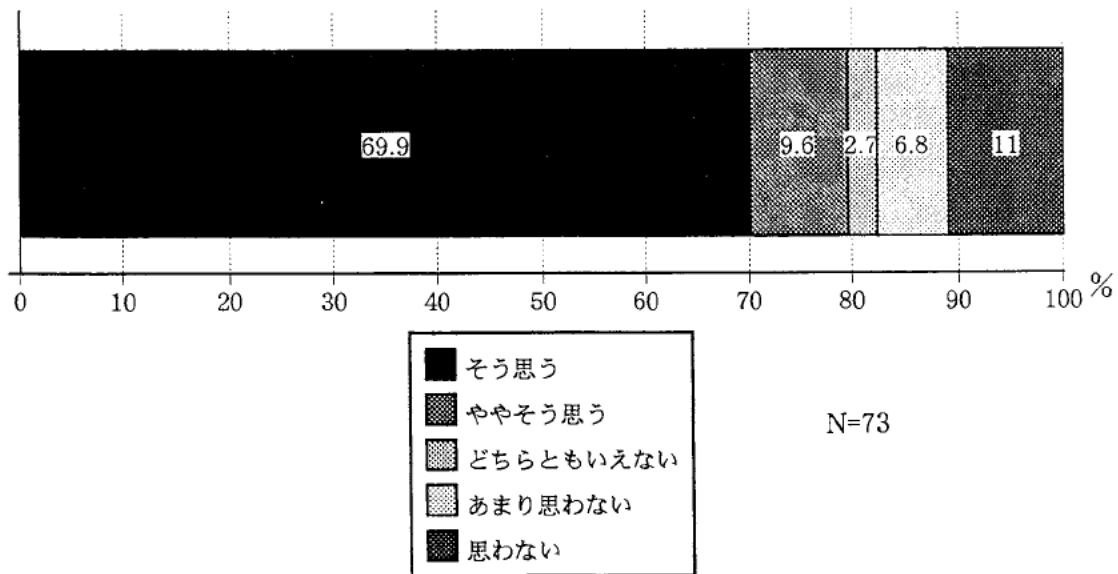


図8-1 現住宅についての高齢者との同居適応性 『金沢』

最も多いのが、「そう思う」が69.9%あり、次いで「思わない」が11.0%である。「どちらともいえない」とする曖昧な回答は2.7%と非常に少数である。「ややそう思う」を含めた、集合住宅が高齢者と同居するのに適応しないと考える世帯は79.5%にのぼり、そう思わないとする意見は17.8%である。圧倒的に、居住者は、集合住宅では高齢者との同居は困難であると判断している。

また、これを世帯主年齢別にみたものが図8-2である。その結果、最も同居に向かないと感じている年代は50代で、次いで60代、40代となる。20代～40代は「そう思わない」と言う回答も目立っている。これは、50代、60代は老親とどう住まうかが現実問題であるため、真剣に考えた結果であろう。20代～30代はまだ親の年齢も高くなく、先の事として受け止められていると思われる。

実際に高齢者と現在の集合住宅で同居する場合、最も困難な要件は住宅の広さや部屋数にあるのではないかと考え住戸タイプ別にみたが、調査対象者が居住する住戸タイプは3LDKに集中するため、有意な結果が得られなかった。そこで、家族人数との関係を見たところ、図8-3に示すように、5人、6人の家族人数の多い世帯では、現住宅は同居に不適とする意見ばかりであった。第7章 第1節の居住性評価でみたように、どの用途の部屋も狭いとの不満が高い。それらのことが関係しているのであろう。

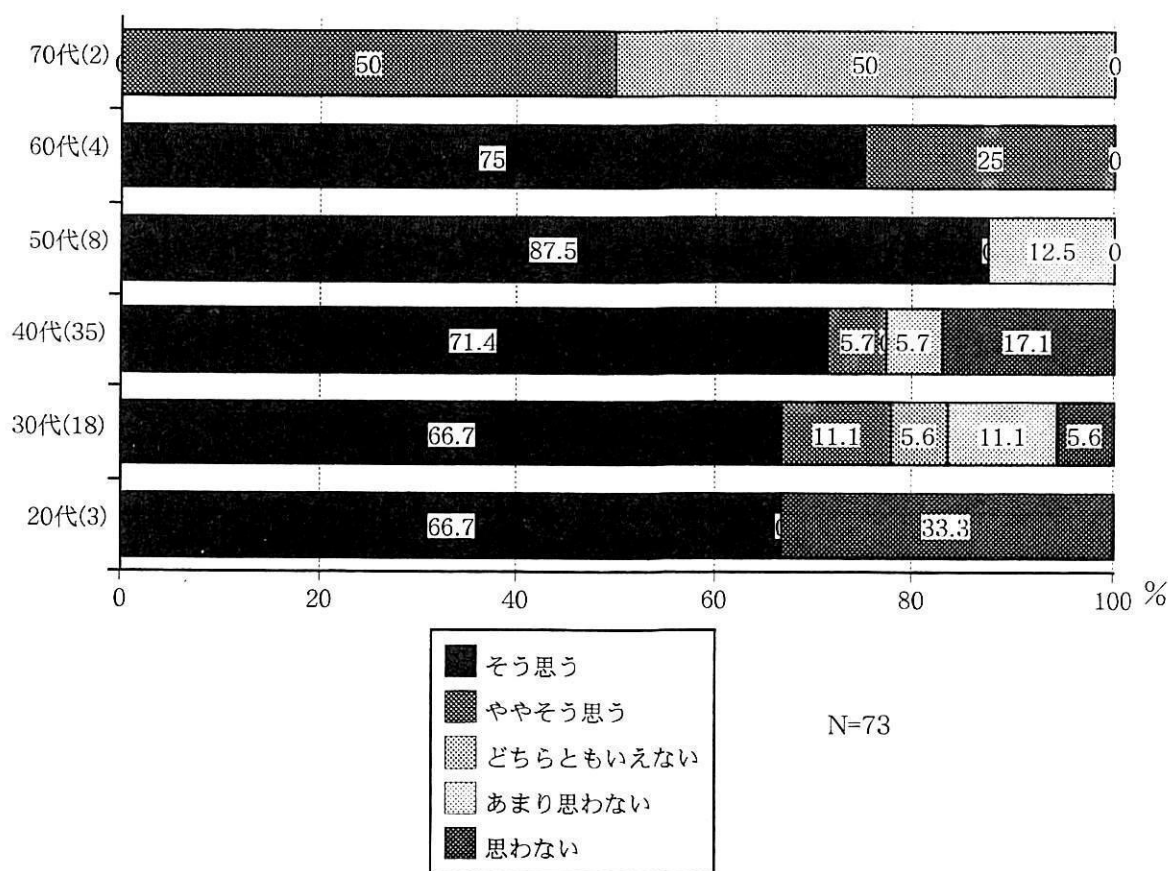


図8-2 世帯主年齢と高齢者同居に対する住宅適応性に関する意見 『金沢』

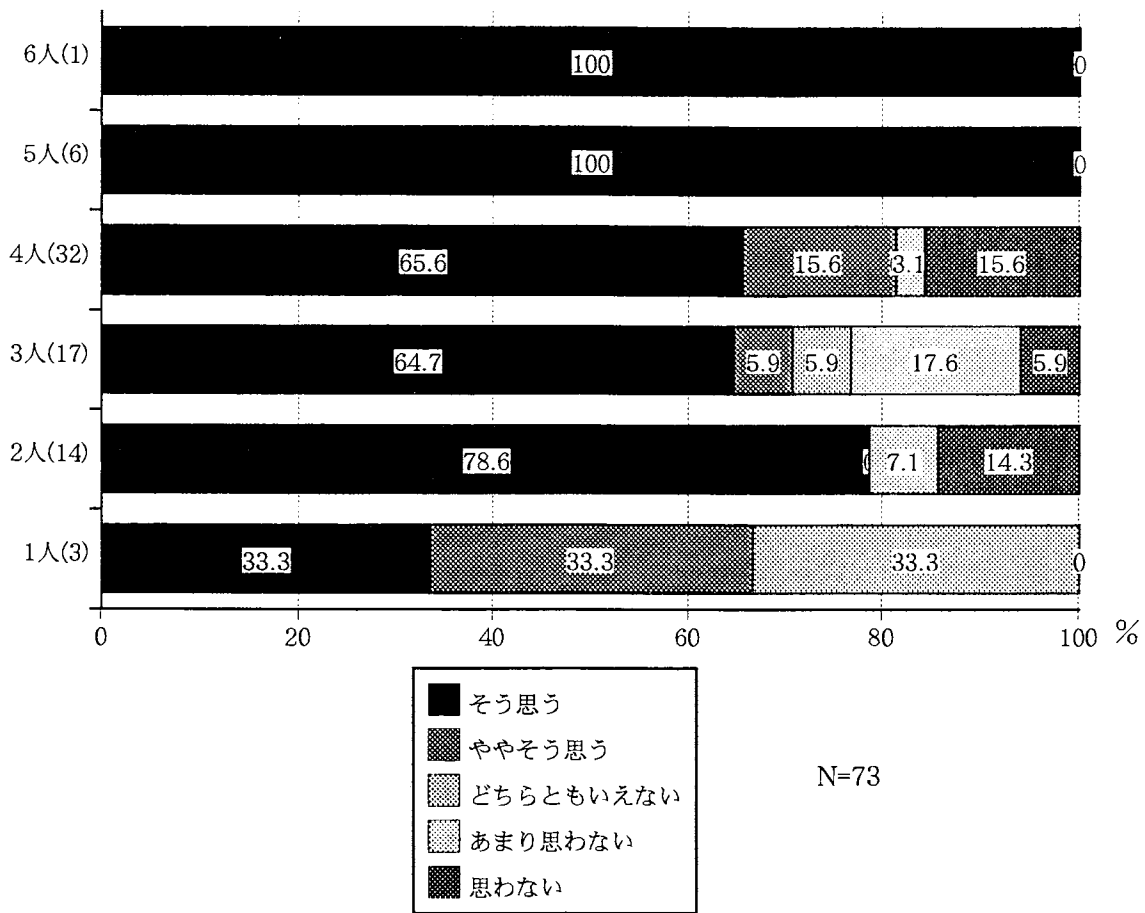


図8-3 家族人数と高齢者同居に対する住宅適応性に関する意見 『金沢』

(2) 『松任』

『松任』の三世帯同居の割合は、『金沢』より多く16.4%、28世帯である(第3章 第4節 表3-4)。世帯主年齢は、『金沢』よりやや低く、30代が中心で、20代が次いで多く、20代～40代で69.6%を占めている(第3章 第1節 表3-1)。

自分が高齢期になった時、子供とどう住みたいと考えているか、またその考えは現実とは異なるのかを探るために、以下の設問をした。

まず、「あなたはどのような住み方が理想ですか」という設問に対し、選択肢を次の5つ挙げている。「①親世帯と子世帯は同居する(寝室以外すべて共用する)。」「②親世帯と子世帯は同居する(玄関・トイレ・台所・浴室など一部、または全部を別に設ける)。」「③親世帯と子世帯は隣同士に別々に住む。」「④親世帯と子世帯は別居する(近所に住む)。」「⑤親世帯と子世帯は別居する(遠くに住む)。」である。

①はいわゆる完全(べったり)同居で、従来から多くの世帯でなされてきた形態の同居である。高齢者も子供も夫婦も、同じ家の中では各家族員で特別の配慮はしないという生活の仕方である。これは、高齢者のいずれか、あるいは両方のために個室が1つあればできる。住宅平面上、あるいは設備上の特別なことはないため経済的であり、同居がしやすいという特徴がある。その反面、設備も全て共用するため、行為が重なり不便であるという欠点がある。

さらに嫁と姑の問題に象徴されるように、生活習慣や生活時間、食べ物の好み、子供(孫)への接し方に対する考え方の違いなど、二世帯間にほとんどプライバシーがなく、過干渉になりがちなのが大きな問題である。このことが、同居が敬遠される大きな原因になっているといえる。

②はこの問題を、主にプライバシーを要求する行為の場を親世帯、子世帯で分離し、専用化するという住まい方である。①の欠点を空間を分離する方法で解消しようとするものである。専用化の度合いは様々である。一般には前述のように設備部分を分け、居間や食事の場など、家族が集まれる場所は共用である場合が多いと考えられるが、専用化がすすみ、いわゆる全く2軒の住宅が合わさっている二世帯住宅もこの範疇に入る。実際には、例えばトイレだけ別の住宅と、全く別々にある住宅では住まい方が全く異なり、このカテゴリーに含まれる住まい方は多様である。

③はいわゆる隣居である。住宅としては別になり、親世帯と子世帯の2軒の住宅があるということになる。それらが、例えば同じ敷地の隣同士に建てられるとか、集合住宅の場合は隣や向かいの住戸同士に居住するという住まい方である。当然、全ての空間は各世帯で専用化している。プライバシーを優先しながら、隣にいるという安心感が得られる大きな利点がある。しかし、全く2軒分の住宅が必要であるため、②よりさらに経済的には困難である。

④は別居であるが、いわゆるスープのさめない距離に居住している、近居である。距離は明確には定義できないが、同じ町内程度の距離感である。ただ現実的にはもう少し広い範囲を考えてもよいだろう。例えば小学校区内や、地方小都市であれば市内などである。全く別の生活を普段はしながら、必要があればすぐ行けるといふ安心感が得られるだけの距離であるということだ。

⑤は全くの別居である。短時間では行き来できない距離である。

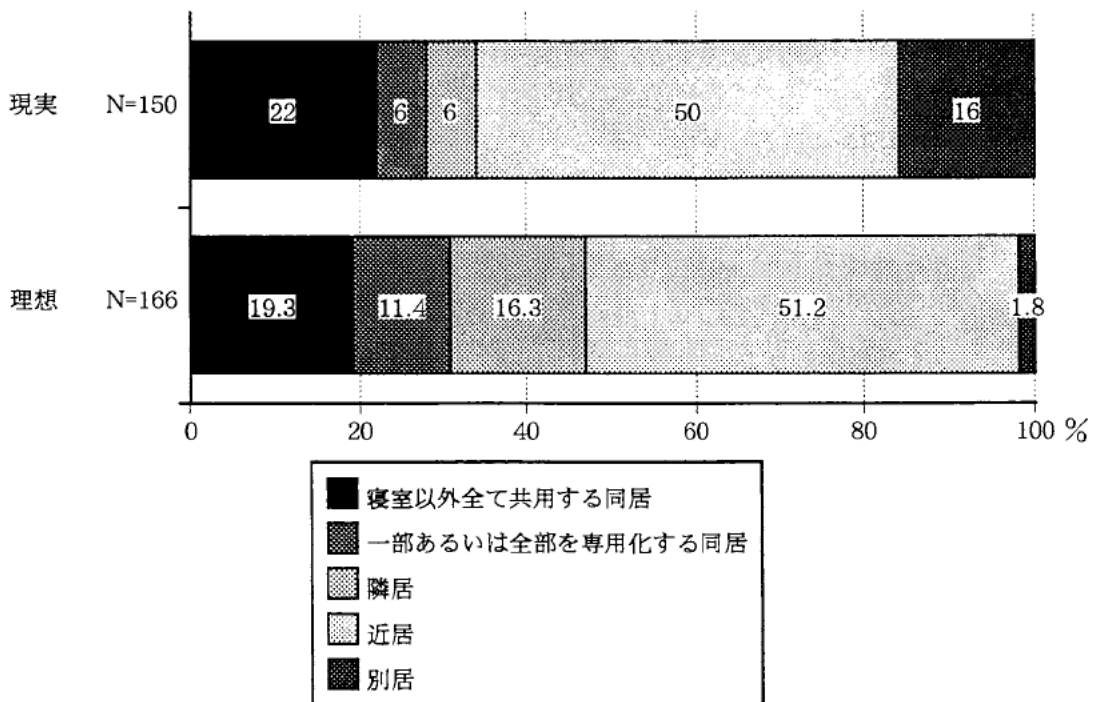


図8-4 高齢期の住まい方の現実と理想 『松任』

この調査の結果、5つの選択肢の中で最も多く回答が得られたのは「④近居」で、51.2%である。次いで多いのは「①完全同居」で19.3%である。「②専用化同居」「③隣居」はほぼ同程度の割合である。「⑤別居」は非常に少なく、理想としては子世帯とは離れたくないという心情がうかがわれる。

以上の結果から、高齢期の住まい方は、親世帯と子世帯は普段は独立して生活しているが、たまに会いたくなればすぐ会えるし、病気など何かあってもあまり心配ない距離にいて、手助けが容易である住まい方が理想といえよう。

それでは現実はどうであろうか。同様の選択肢を設け、「現実には、お子さんとの住まい方はどうなりそうですか」という質問を行った。その結果は図8-4に示すとうり、最も多いのは理想と同じ「④近居」である。理想より少なく50.0%を占める。次いで多いのは「①完全同居」で22.0%である。「②専用化同居」「③隣居」は非常に少数である。これらは前述のように住宅の改装や増築、建設などを行うことが必要になり、経済的には無理だとの判断であろう。また、理想より多いのが「⑤遠くで別居」である。理想としては子供が近くに住んでほしいという希望があるが、現実的には、子供は就職や結婚などで大都市圏や他地方に出ていき、帰る見込みがない、親もいくつもりがないということであろう。

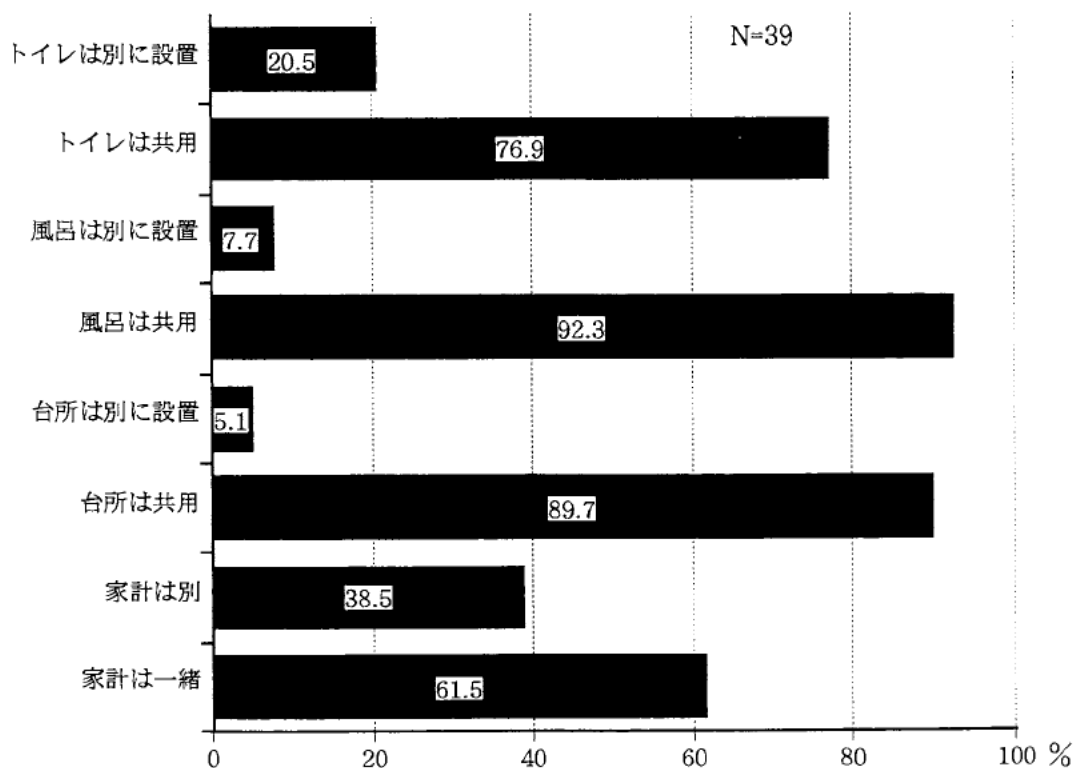


図8-5 同居の形態 『松任』

さて、前述の選択肢でもわかるように、近年、同居にもいくつかの段階がある。調査対象者の同居世帯は、どのような同居をしているのであろうか。「家計」「台所」「風呂」「トイレ」を親世帯と子世帯で共用しているか否かを調査した結果を図8-5に示す。

この4つのうち最も別々にしている割合が高いのは「家計」で、38.5%が別々にしていたが、一緒にしている割合は61.5%と高い。住宅平面上、設備上別に設置している割合が高いのは「トイレ」である。おそらく、夜間のトイレを配慮して高齢者の個室の近くに別に設けたものと思われる。風呂や台所を別に設置している世帯は非常に少ない。

(3) 『羽咋』

『羽咋』においても、高齢期の子供との住み方の理想と現実について、『松任』と同様の設問を行った。その結果を図8-6に示す。

理想は、最も多いのは「④近居」であるが32.2%しかなく、ほぼ同様の割合で「①完全同居」が28.9%あり、『松任』と異なり意見が分かれた。その他「③隣居」も比較的多く21.1%ある。近居の理想が少ないのは、独立した子供が羽咋市内に居住する可能性が、『松任』より低いと判断しての意見だと思われる。また、『松任』より完全同居を理想とする世帯が多い。『松任』は数年前に新築し、新しい住まい方を模索したと思われるが、『羽咋』は古くから同じ場所に居住しており、人々の考え方も昔からの考え方を踏襲している面があるだろう。

現実の住み方は、理想よりもさらに完全同居の割合が増加する。隣居や設備の専用化は経済的にできず、同居となるだろうと判断したのであろう。

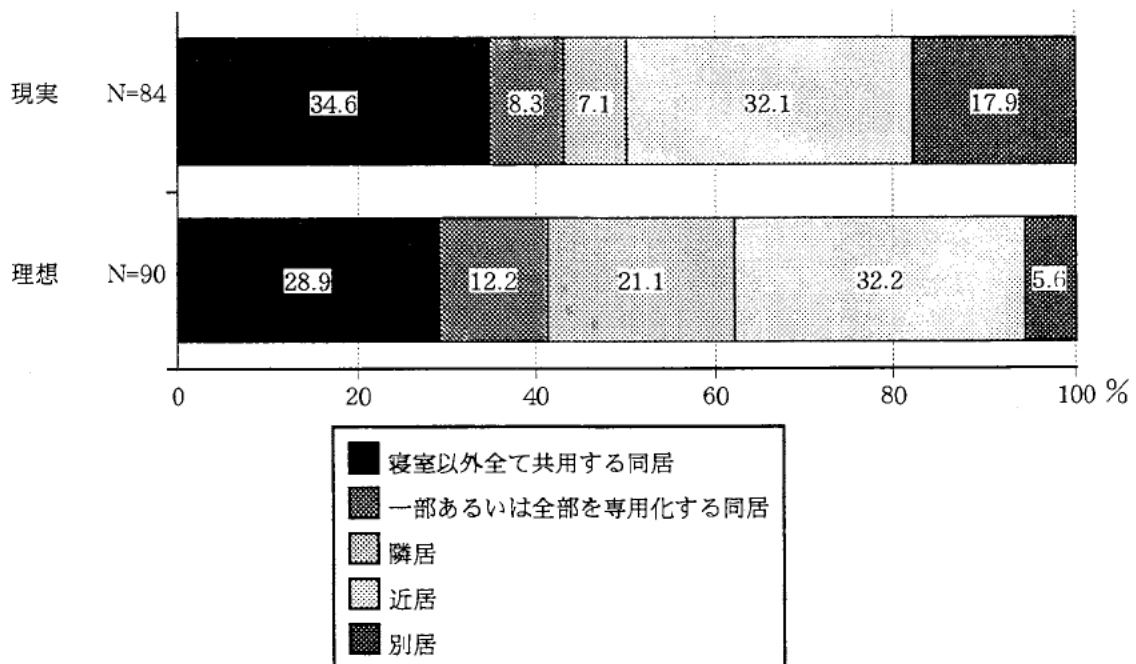


図8-6 高齢期の住まい方の現実と理想 『羽咋』

次に同居の形態についても調査した。その結果を図8-7に示す。「家計」を別にしている世帯が11.4%みられたが、『松任』に比べ非常に少ない。また、『松任』では住宅平面上、設備上、親世帯のものと子世帯のものを別にしている世帯が少ないものの存在したが、『羽咋』では全くみられない。トイレも別に設置されていない。『松任』は近年の新築であること、住宅規模が平均的に大きいことが理由であろう。

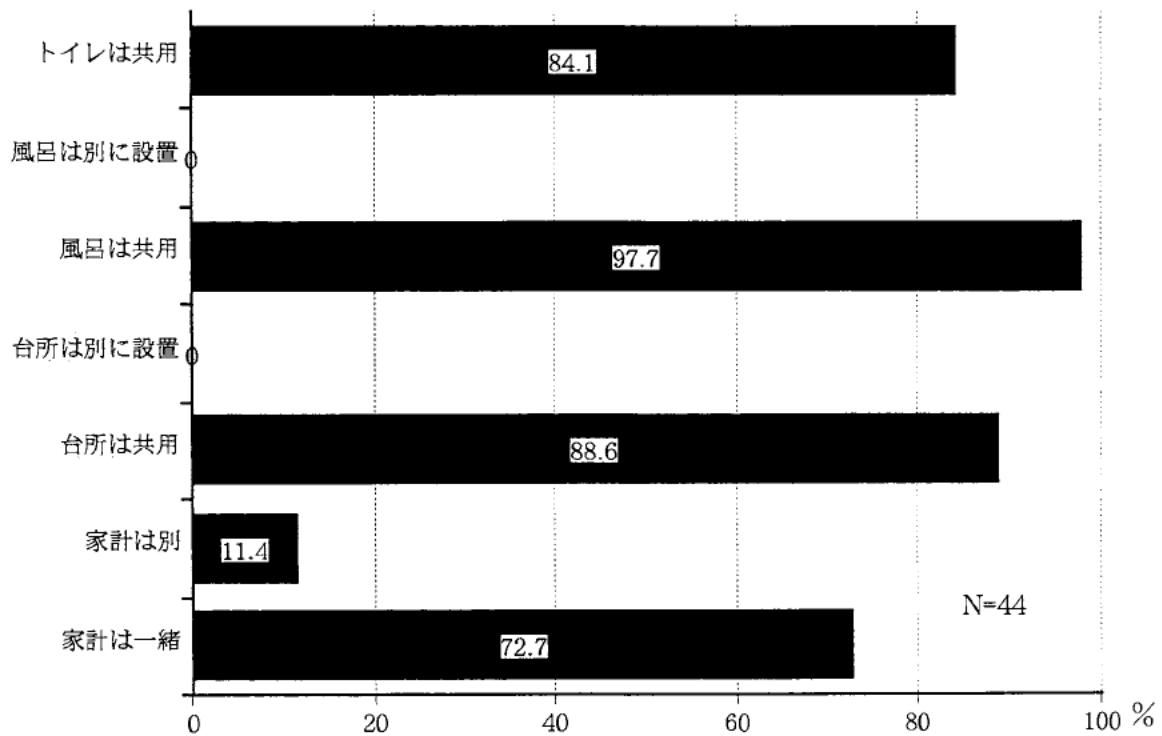


図8-6 同居の形態 『羽咋』

第2節 高齢期の不安

(1) 『松任』

高齢期になった時のことを考えると、様々な不安があるものである。そこで、ここでは住宅や住まい方に関して不安に感じることにについて、居住者の意見を聴取した。選択肢は以下のようなものである。「何も不安がない」「住宅の家賃やローンなどを払い続けられないこと」「段差や急な階段などがあり、体が弱った際に支障となること」「浴室・便所・階段・廊下などに手すりがなく、体が弱った際支障になること」「体が弱った際に、介護してもらえない適切な部屋がないこと」「体の衰えに合った住宅の改装などをする精神的・経済的余裕がないこと」「高齢者だけで住むと家の管理が十分できないこと」「その他」の8項目である。複数回答による。その結果を図8-7に示す。

最も回答が多い項目でも30%に満たず、全体的に項目の選択が少なく、高齢期の住宅、住まい方には不安感は大いとはいえない。その中で最も多いのは、「高齢者だけで住むと家の管理が十分できないこと」で、29.2%である。次いで「体の衰えに合った住宅の改装などをする精神的・経済的余裕がないこと」28.6%、「浴室・便所・階段・廊下などに手すりがなく、体が弱った際支障になること」26.7%、「体が弱った際に、介護してもらえる適切な部屋がないこと」26.1%である。「段差や急な階段などがあり、体が弱った際に支障となること」に対する不安は少ない。

全体的に不安感が少ないのは、『松任』は注文住宅が多く、段差や手すりなどの配慮は既にされている場合が多いためと推測される。そのため、住宅のハードな面よりむしろ高齢者だけで広い住宅を管理していくことが最大の不安点ということになる。

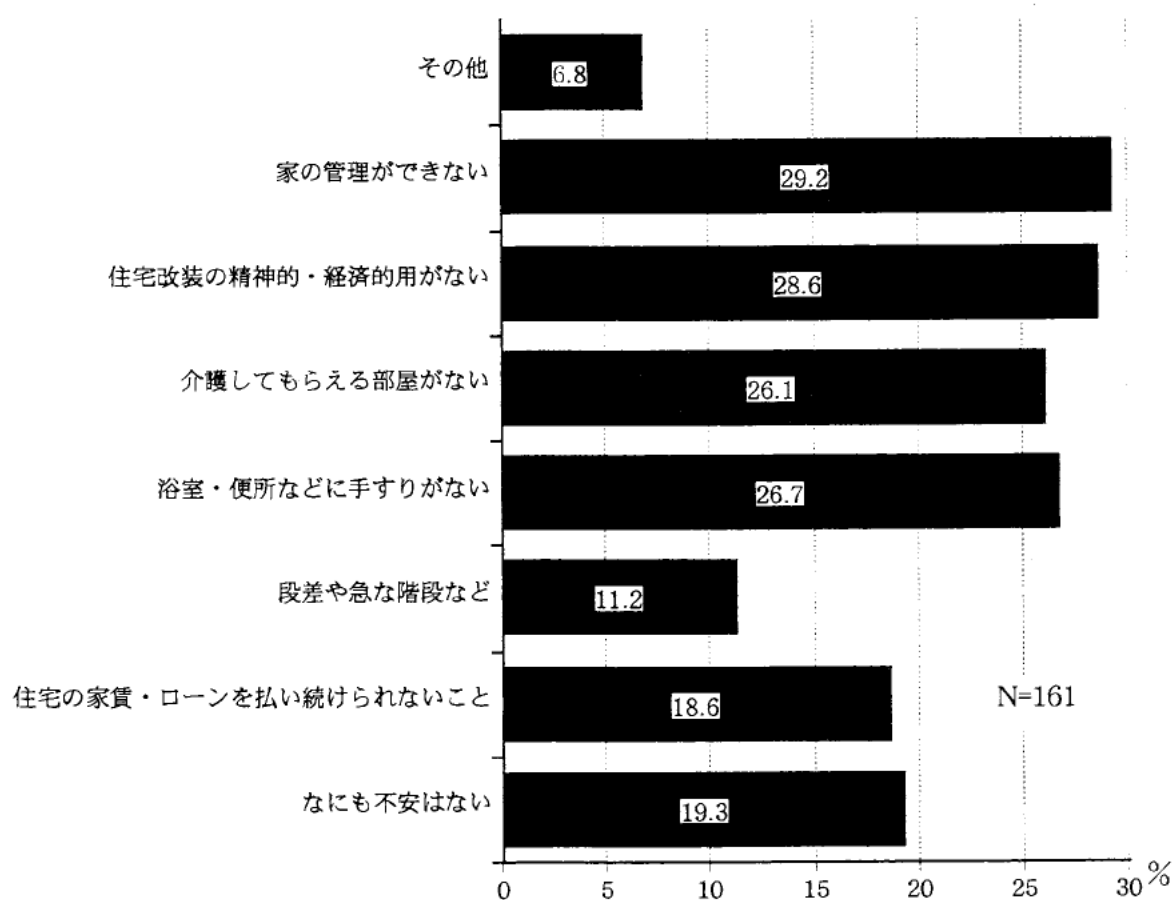


図8-7 高齢期の住宅に関する不安 『松任』

(2) 『羽咋』

『松任』と同様の選択肢で、高齢期の不安感について調査した。その結果を図8-8に示す。最も多いのは、「浴室・便所・階段・廊下などに手すりがなく、体が弱った際支障になること」で、48.9%である。次いで多いのは「高齢者だけで住むと家の管理が十分できないこと」で42.4%である。この2点が大きな不安点である。「なにも不安はない」には16.3%の世帯が回答した。最も選択された割合が少ない選択肢は「住宅の家賃やローンなどを払い続けられないこと」で6.5%しかない。『松任』ではこの項目は18.6%あり、この点でも相違がみられる。

『羽咋』では『松任』に比べ住宅の建築年が古いため、バリアフリーデザインでない設計が多いと思われる。そのため、高齢期になると手すりが必要になることは理解できているので、その点が不安になるのであろう。『松任』は前述のように近年の建築であるので、ある程度は高齢者対応住宅であろう。また、「住宅ローンや家賃」については、『松任』の方が多いのは現住宅のローンがまだ比較的多く残っているためであろう。『羽咋』も持ち家の割合が高く家賃を支払う必要はなく、既成市街地で古くから居住しているため、住宅ローンがない、あるいは少ないのではと推測される。

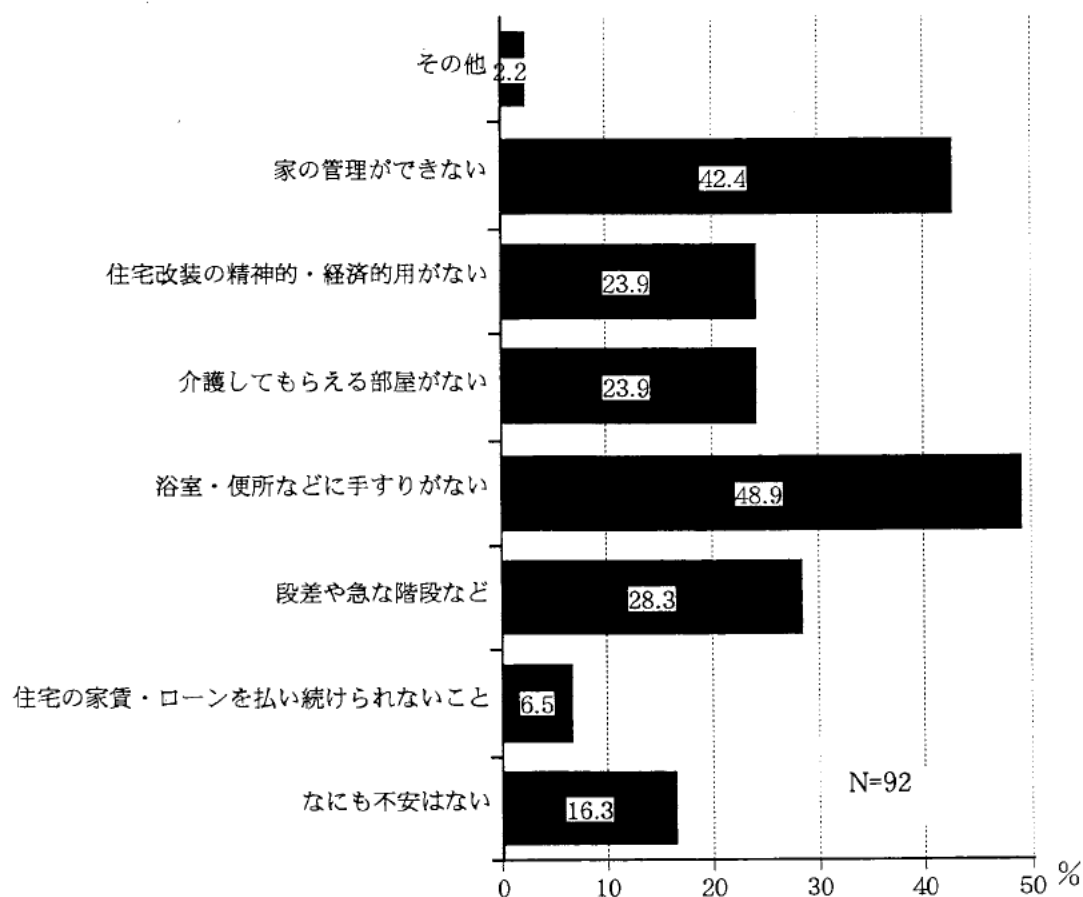


図8-8 高齢期の住宅に関する不安 『羽咋』

第3節 高齢期に対する住宅上の配慮

どんな健康な人でも高齢期になれば体力は低下し、心身に障害がでる可能性は高い。住宅には心身機能の低下に対応した間取りや設備が求められるだろう。

そこで、現在の住宅にはどのような高齢者対応の配慮がなされているかを調査した。選択肢は以下の7項目で、複数回答である。「廊下に手すりがついている」「トイレに手すりがついている」「浴室に手すりがついている」「高齢者に配慮して、床の段差がないようにしている」「高齢者にも使いやすい台所設備にしている」「その他高齢者に配慮したつくりや設備がある」である。

(1) 『松任』

調査結果を図8-9に示す。

最も多いのが「高齢者に配慮して、床の段差がないようにしている」で61.2%である。ほぼ同割合の回答が得られた項目は、「階段に手すりがついている」で60.3%である。60%以上の世帯では、段差の解消や階段の手すりの設置が行われている。その他多いのは「浴室に手すりがついている」で、49.1%、「トイレに手すりがついている」で31.0%である。高齢者対応の台所設備の設置や、その他、特別なつくりや設備を設置している世帯はわずかである。

手すりは、階段、浴室、トイレ、廊下の順で設置率が高い。しかし、廊下の設置はごくわずかである。廊下に手すりを設けることは、普通の住宅では困難である。それは、出入口などで手すりが連続しないためである。

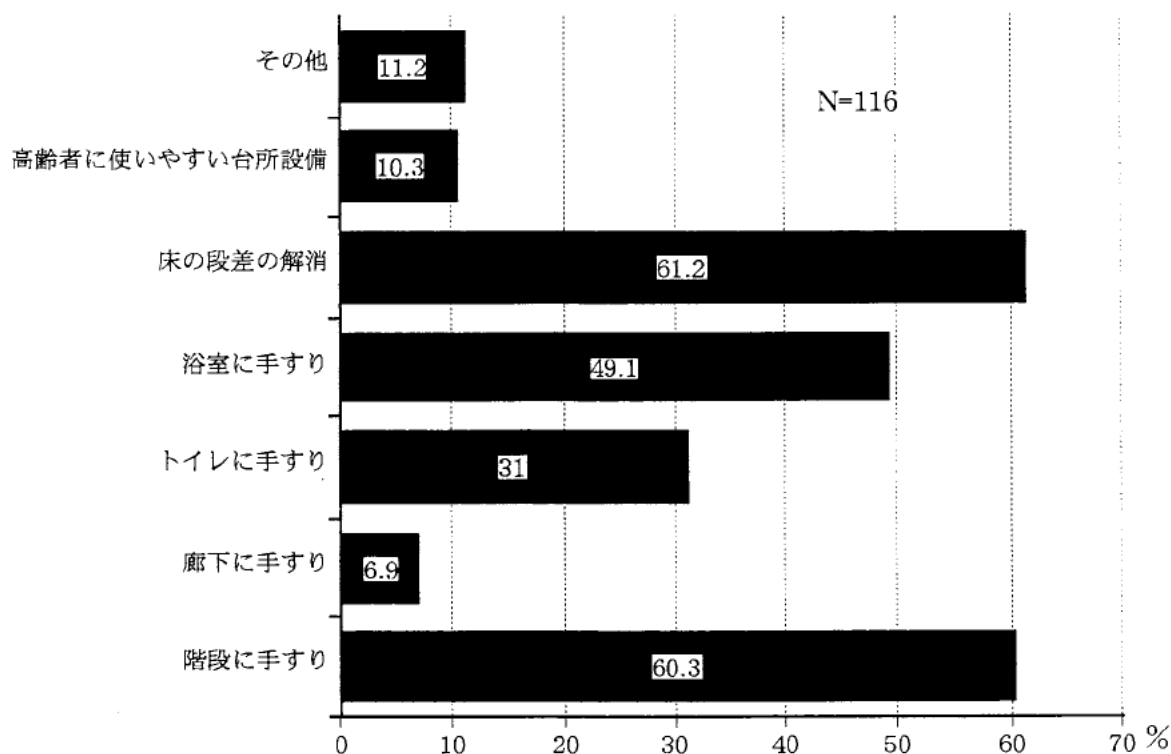


図8-9 高齢者対応設備の設置の有無 『松任』

(2) 『羽咋』

『羽咋』においても『松任』と同様の調査を行った。その結果を図8-10に示す。

最も多いのは「階段に手すりがついている」で68.3%にのぼる。次いで多いのは「トイレに手すりがついている」で41.5%、「浴室に手すりがついている」24.4%である。『松任』で最も多い「高齢者に配慮して、床の段差がないようにしている」は12.2%と少数である。また、『松任』でも少なかった「廊下に手すりがついている」はさらに少なく、「高齢者にも使いやすい台所設備にしている」は皆無である。

『松任』では住宅の計画時には社会的にバリアフリーデザインが話題になっている時期で、住宅供給側もバリアフリーを売り物にしているところがある。そのため、床の段差や浴室の手すりなどは当初から設置されていたものと思われる。しかし『羽咋』は古い住宅が多く、バリアフリーではないため、高齢者対応にしようと思うと、大規模な改造、改装になる床の段差の解消や、浴室の手すりはあまりなされず、壁下の補強と手すりの設置のみで済むトイレや階段の手すりを後から設置したものと思われる。困難な改装は少ないものの、高齢期の住まいに関しては関心は決して低いものではないと思われる。

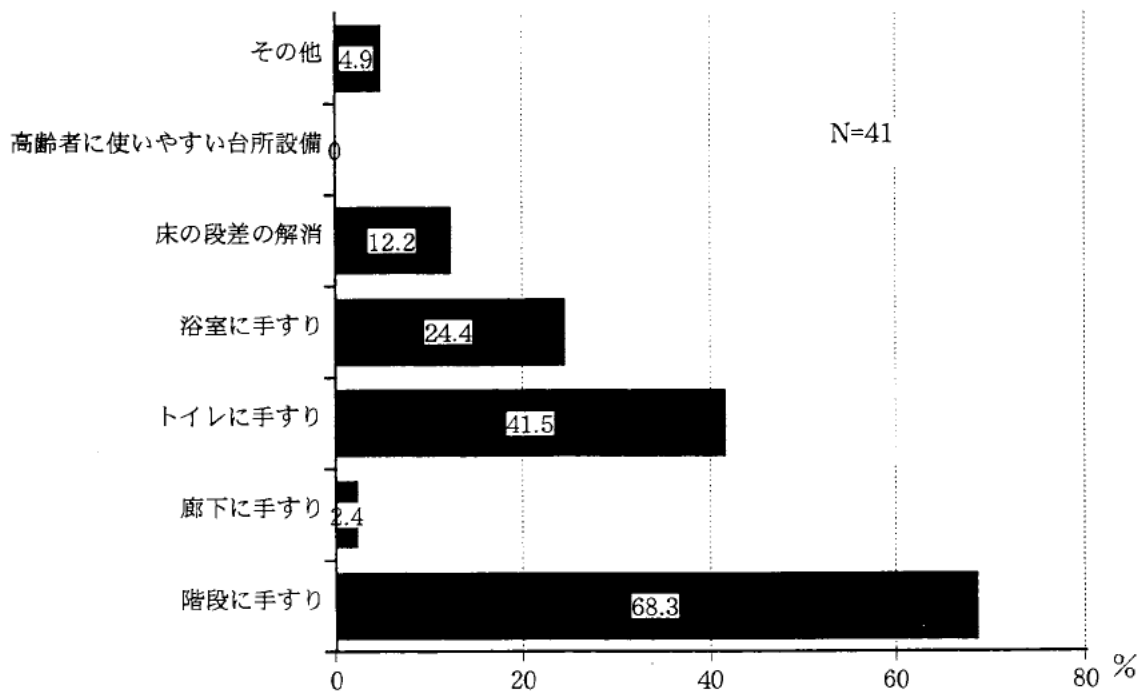


図8-10 高齢者対応設備の設置の有無 『羽咋』

第9章 総括

この章では、第1章から第8章まで述べた報告内容を総括する。

本研究は、石川県に立地する住宅の居住者を対象に居住実態や住居観に関する調査を実施し、その結果を分析することにより、これらの住宅や住環境の居住実態の地域性、及び住居観と地域性との関連性を探ろうとしたものである。そのため、以下の調査対象地を選定し、調査を実施した。

- (1)金沢市中心部に立地の民間分譲集合住宅……………以下『金沢』と表記
- (2)金沢市郊外(松任市)立地の計画的戸建て住宅地……………以下『松任』と表記
- (3)能登地方の中都市の既成市街地(羽咋市)立地の戸建て住宅……………以下『羽咋』と表記

第1節では本調査結果から、各対象地における居住実態及び、住宅・住環境性能評価、居住層の地域差について総括する。第2節では、住居観・住要求の地域性について総括する。

第1節 住まい方及び住宅・住環境性能の評価と地域性

(1) 住宅形態

『金沢』と『松任』『羽咋』は調査の対象住宅が異なる。『金沢』は集合住宅であるが、『松任』『羽咋』は戸建て住宅である。また、『松任』と『羽咋』においてもいくつかの点で違いが認められる。

住宅面積については、全体的にみて最も小さいのは集合住宅である『金沢』である。『金沢』は家族向け3LDK中心の集合住宅を選定したが、70～80㎡が半数を占め、70～90㎡で70%以上を占めている。『松任』は計画的に宅地造成されているため面積にあまりばらつきがみられず、130～165㎡で半数近く、100～200㎡で80%以上を占める。しかし『羽咋』は既成市街地であるため、『松任』のように計画的に宅地の面積を揃えていないためばらつきがある。多いのは130～200㎡の面積で約半数を占めるが、230㎡以上ある大規模な住宅も全体の25%もある。

住宅のタイプをみると、非常に地域性が表れた。『金沢』は前述のように3LDKを中心に調査を行ったため3LDKが80%を越える。『松任』は4LDKと5LDKが多く70%程度である。『金沢』『松任』はほとんどがLDKタイプであり、DKタイプはほとんど見られない。ところが『羽咋』ではDKタイプが非常に多く70%を占め、30%しかLDKタイプがない。また、住宅面積においてばらつきが見られたため影響しているとみられるが、部屋数にもばらつきが見られる。最も少ない世帯は3室で、最も多い世帯で13室ある。

(2) 居住者層

『金沢』は世帯主が40代、配偶者が30代、『松任』は世帯主も配偶者も30代が多い。『羽咋』は世帯主、配偶者年齢ともに広範囲に分布している。全体的にみると、最も年齢層が低いのは『松任』、次いで『金沢』、最も高いのは『羽咋』である。

職業は『金沢』は管理職、専門・技術職、事務職が多い。会社の通勤族であろう。『松任』もほぼ同様の職種が多いが、管理職の割合がやや低い。『金沢』より年齢が低いためであろう。『羽咋』は無職が最も多い。これは60代以上の年齢層である。仕事をもっているものの中では技能・労務職が多い。以上のように、世帯主職業は『金沢』『松任』は同様の職種

で、金沢市内及び周辺の会社のホワイトカラーのサラリーマン世帯が中心であることがわかる。『羽咋』は中都市において様々な職種のもが居住しているといえる。

配偶者の職業について、まず専業主婦率は『金沢』70%、『松任』45%、『羽咋』17%と大きい差異が生じている。『金沢』の専業主婦率が高いのは『金沢』は通勤族が多く、主婦は職業に就きにくいためであろう。『松任』はパートタイム労働が多いが、これは住宅購入のための経済的理由からであろう。『羽咋』の就業率は高く、技能・労務職や専門・技術職が多くなっている。

平均家族人数は、『金沢』3.1人、『松任』3.5人、『羽咋』3.8人となる。『金沢』は2~4人世帯が多く、『松任』は3~5人世帯が多く、『羽咋』は最も多いのは2人世帯であるが、人数の多い世帯も比較的多い。

家族構成をみると、『金沢』はほとんど全世帯が核家族世帯である。『松任』は16%が三世代で、核家族世帯の中では長子6才以下のライフステージが低い世帯が多い。『羽咋』は三世代世帯の割合が非常に高く、また高齢夫婦の割合も高い。

(3) 住まい方

住宅のタイプは前述のように『金沢』『松任』はLDKタイプが多く、『羽咋』はDKタイプが多い。更に、食事、団らん、就寝、接客の各生活行為がどの部屋でなされているかをみたところ『金沢』『松任』と『羽咋』とは、LDK以外の居室構成にも大きな相違が見られた。それは、『金沢』は和室1室、洋室2室の3LDKが主な住宅タイプである。『松任』は洋室が3~4室、和室が1室である4LDK、5LDKが中心である。『羽咋』は洋室が1~2室で残りは全て和室のnDKタイプが多い。以上のような居室構成であるため、生活行為を行う部屋も影響される。

食事の場合は、『金沢』は〔L〕が50%、〔D〕が60%、『松任』は〔L〕が30%、〔D〕が80%である。いずれも〔D〕の割合が高いが、『松任』の方が〔D〕が食事専用室として確立しているといえるだろう。〔L〕で食事をするのは、〔LD〕タイプで〔LD〕の面積が小さい場合や、家具をできるだけ少なくするために〔LD〕の中央にダイニングテーブルを置く住まい方の場合が考えられる。『金沢』で〔L〕の割合が多いのは、これらの理由のうち、〔LD〕の面積が小さいため〔L〕と〔D〕の行為が重複するためであろう。『松任』では『金沢』に比べ〔LDK〕面積が広いと、むしろ住まい方の問題であろうと思われる。

『羽咋』は『金沢』『松任』と異なり最も多いのが〔和室〕で40%である。また〔K〕が35%と多い。これは〔DK〕を〔K〕と表現したものと思われ、〔D〕と回答した20%と合わせると55%となる。従っていずれの調査地も〔D〕で食事をすることが多いが、『金沢』『松任』では〔L〕も使用され、『羽咋』では〔和室〕が非常に多い。

団らんは、『金沢』『松任』では圧倒的に〔L〕が多く、いずれも約85%を占める。その他は〔D〕が多い。〔L〕と〔D〕は空間的に連続している場合が多いので、〔D〕で団らんすることを含めれば、食事の後に引き続いて団らんが行われる様子が推察される。食事と同様に、『羽咋』では『金沢』『松任』と異なる傾向が見られた。『羽咋』では最も多いのは〔和室〕で80%を越えている。〔L〕は16%である。これは前述のように『羽咋』はDKタイプが多く、LDKタイプが少ないことから、住宅に〔L〕をもつ世帯が少数である。そのためLDKタイプでは団らんに〔L〕を使用するのであるが、DKタイプでは団らんに〔DK〕ではなく〔和室〕になる。食事と団らんの関係をみると、『金沢』『松任』は食事は〔D〕、団らんに〔L〕が主な使い方であるが、『羽咋』は団らんも食事も〔和室〕と、

食事が〔DK〕で団らんが〔和室〕という住まい方が多い。

夫婦の就寝については、『金沢』は〔和室〕50%、〔洋室〕75%で、『松任』は〔洋室〕75%、〔和室〕25%、『羽咋』は〔和室〕80%、〔洋室〕17%となり、調査地それぞれに違いが認められた。『松任』は新築注文住宅の割合が高く、〔和室〕〔洋室〕の割合は居住者の要求にあったものと考えられるが、『金沢』は〔和室〕1室、〔洋室〕2室の平面構成であるという限界があり、居住者の住要求に合致しているとは言いがたい。これは、『松任』ではライフステージによって夫婦寝室のとり方は変わらないが、『金沢』は子どもの年齢が低い世帯では夫婦は〔洋室〕に就寝することが多いが、ライフステージが上がると、特に子どもに個室を与える年齢になった世帯では、夫婦寝室は〔和室〕にとられやすい。〔洋室〕が子どもの寝室になるためである。また、部屋数が限られているため昼間に転用性がある〔和室〕が便利だと考えられるためであろう。『羽咋』は絶対的な和室数が多いことが影響していると思われるが、〔和室〕志向とも受けとめられる。

子どもの就寝室は、『金沢』『松任』では圧倒的に〔洋室〕のみにとられている。『羽咋』では〔洋室〕と〔和室〕が半々である。やはり『金沢』『松任』では〔洋室〕中心で、『羽咋』では〔和室〕の割合が高いのは、前述の生活行為で見た結果と同様である。しかし、夫婦寝室と比較すると〔洋室〕の割合が非常に高いことがわかる。子ども室は学習机、ベッドなどの家具が置かれることが多いため、〔洋室〕を与えることが当然という意識があるようだ。従って〔和室〕中心の平面の『羽咋』であっても、子ども寝室は〔洋室〕にとるのだろう。

接客室は、『金沢』は〔L〕が80%以上を占め、その他は〔D〕と〔和室〕である。『松任』は〔L〕が55%と『金沢』より〔L〕の割合が低く、〔和室〕が35%と多くなる。『羽咋』では〔和室〕が90%と圧倒的に多い。『金沢』では〔和室〕は前述のように、ライフステージが低い世帯では〔和室〕は余裕室である場合が多いが、子どもに個室を与えるようになると〔和室〕は夫婦寝室になりがちであるので、〔L〕が接客室になりやすい。また、このライフステージで〔和室〕を接客室に使用するのは夫婦寝室の転用である。しかし、『松任』では夫婦寝室は〔洋室〕にとられることが多く、これはライフステージに関わらないので、接客を〔和室〕ですると回答した世帯における〔和室〕は専用接客室である場合が多いだろう。『羽咋』は〔洋室〕や〔L〕で接客することはごく稀である。〔L〕や〔洋室〕の割合が非常に少ないことと、接客の〔和室〕志向が強いものと思われる。

(4) 住宅内部の居住性能評価

『金沢』の最も深刻な不満点は、どの居室もその狭さである。特に〔L〕〔D〕の規模への不満は非常に高い。これは、〔L〕〔D〕は家族の団らん、食事のほか、接客も行われ、その他の居室で行にくい多くの多様な生活行為が集中する場である。そのため、広ければこれらの行為が十分行える、あるいは行為によってエリア分けできると考えたものと思われる。また、〔L〕〔D〕以外では〔洋室〕も特に6畳未満の〔洋室〕がある世帯で不満が高い。その他収納スペース不足、柱や梁が出ていることなども挙げられる。〔和室〕は狭さのほか、住戸中央部に〔和室〕があるタイプでは特に採光の悪さが指摘された。また、押入が狭いことも大きな問題として挙げられている。

『松任』ではほぼ全体的に満足度が高いといえるが、収納スペースには半数が不満を訴えている。収納スペースはとっただけ収納品が増えるといわれるが、面積が限られており住戸外へ生活用品を収納できない『金沢』における問題よりは、深刻さが低いといえる。その他に

は台所の設備や広さに不満がやや多く見られたが、逆に非常に満足している世帯の割合も高い。台所に力を入れたか、後回しになったかという違いと思われる。『松任』で非常に満足度が高いのは、日照・通風の良さである。住宅の基本性能といえるだろう。

『羽咋』で不満の高いのは、『松任』と同様収納スペース不足である。また、台所の設備・広さの不満も高い。更に住宅の防音性・遮音性・断熱性も不満が多く聞かれた。全体的にみると『松任』のほうが評価は良いものの、住宅に対する不満点は、地域や住宅の形態、居住者層が異なっても同様である。住宅の不満が出やすい項目であるといえるのであろうが、全国的にこのような点で住宅の質の水準を上げる必要性も感じる。

(5) 住宅外部の住環境性能評価

『松任』は自然環境や騒音、緑地・公園などについて、非常に高い満足が得られている。不満が高いものには、交通の便の悪さ、文化施設や生活利便施設の不足が挙げられる。『松任』は自然環境や宅地環境に恵まれた住宅地であるが、公共交通が十分でないことや、文化施設、生活施設など、生活する上で日常必要な地域の居住性が欠けていると言わざるを得ない。

『羽咋』では『松任』のように項目によって不満率が大きく異なることなく、全体的に自然環境も、生活上も大きな不満は見られない。その中で『羽咋』では近所づきあいに不満が高い。多様な社会経済階層の居住者が混在しているためではないかと考える。

以上の違いは、『松任』はニュータウンとして新たに全てを作っており、『羽咋』は地方の中都市で駅前立地している違いと思われる。

(6) 高齢者対応設備

『松任』と『羽咋』について高齢者対応の設備が住宅に設置されているかを調査した。

『松任』では床の段差の解消や階段の手すりの設置率が60%を越え、高い。廊下の手すりや高齢者対応の台所設備などは設置率が低い。『羽咋』では階段の手すりは70%の設置率であるが、その他はトイレに手すりを設置している世帯が40%いる程度で、『松任』で多かった床の段差についてはほとんど解消されていない。『松任』は新築時にバリアフリーをある程度意識したものと思われるが、建築年が古い『羽咋』では、建築時に配慮されていたのはわずかと思われ、その後も手すりをつける程度で、大がかりな改造となる段差の解消はなされていないのが現状である。

第2節 住居観・住要求の地域性

(1)冠婚葬祭

冠婚葬祭は、『松任』と『羽咋』のみ調査を行った。本研究では、従来住宅内で行われてきた「正月の祝い」「結納」「結婚披露宴」「法事」「葬式」をとりあげ、自宅で行うことに対する意見を聴取した。その結果、『松任』『羽咋』は全体的な傾向としては同様であることがわかった。最も自宅で当然行うと考えられている行事は「正月の祝い」である。次いで「結納」「法事」となる。いずれの行事もある程度の格式と一般的には広い座敷を必要とするが、身内の集まりであり、規模を小さくすることなどで今後も十分対応できると判断されたのであろう。自宅で行う希望が比較的少ないのは「葬式」で、更に少ないのは「結婚披露宴」である。家族・親族以外の多数の人間が一時に集まることなど空間的に対応しにくいことのほか、食器などその他の物理的な困難、更に家族の心理的負担が大ききことなどがその要因と考えられる。また、結婚披露宴は洋式化傾向にあり、今後もさらに減少することが予想される。『松任』と『羽咋』では傾向は同様であるが、地域性がみられたのは、それぞれ自宅で行いたいとする希望も含めて、『羽咋』のほうが『松任』より割合が高いことである。また、自宅内でも自宅外でもこれらの行事は行わないとする世帯も『松任』のほうが割合が高い。

(2)スペース要求

現在の住宅にあと12畳自由に増やせるとしたらという条件で、12畳を予め挙げた選択肢の中で配分させた。

『金沢』では〔L〕を広くすることと、収納スペースを広くすることに回答が集中している。これらの問題が最も切実であるのだろう。〔L〕へは12畳全てを配分するなど、多くの面積を欲している。収納スペースは、各室の収納部分を増加するという増加の仕方と、納戸などの収納部屋の要求かと思われる。接客空間としては応接間と座敷の選択肢を用意したが、回答は座敷が22%、応接間が7%という結果である。座敷要求は接客室の和室志向と受けとれるが、子供のいる世帯で多いことから和室の転用性・融通性を期待しているものと思われる。

『松任』でも〔L〕を広くすることと、収納スペースを広くすることが要求されている。これらは住宅にできるだけ広くとりたいと感じる場所といえるだろう。また『金沢』と比較し、洗面・脱衣室を広くすることや書斎を作る、食事室を広くすることなどの回答も多く得られた。これらは住宅計画の際に全ての用途の場の面積を十分にとることはできないので、諦めた場所と受け止められる。接客の場としては『金沢』と同様応接間より座敷が求められている。『松任』は個室が〔洋室〕中心であり、〔L〕も洋室であるため、和室空間を欲したのであろう。

『羽咋』では収納スペースを広くする希望が圧倒的に多い。しかし『羽咋』では〔L〕を広くする要求があまりない。これは〔L〕をもつ世帯が少ないためである。しかし16%程度あり、〔L〕をもつ世帯の数が少ない割に回答は多いといえる。やはり〔L〕をもつ世帯にとって〔L〕が広いことは重大な住要求といえる。『金沢』『松任』では座敷要求が高いが、『羽咋』では座敷要求より応接間要求のほうが強く、『金沢』『松任』と全く逆の現象がみられた。『金沢』『松任』は間取りの構成が洋室中心であるため、融通性や格式、家具購入などの経済性から和室を希望しているのに対し、『羽咋』では和室中心の平面であるため、既に座敷がある、あるいは改まった接客には洋室のほうが非日常的で良いと判断したのであ

ろう。

(3) 高齢者との住まい方

集合住宅である『金沢』は、高齢者との同居に関して不向きだと感じている世帯が80%を占める。圧倒的に高齢者との同居は集合住宅という形態では困難であるとしている。それはどの用途の部屋も狭いという不満が高いことから、部屋数の問題というよりは部屋の規模や住宅の総面積の問題であるといえるだろう。

『松任』と『羽咋』では高齢者との住まい方の理想と現実について意見を聴取した。理想の住まい方として『松任』では近居を半数の世帯があげている。次いで完全同居が22%となる。『羽咋』では完全同居と近居が30%程度と意見が二分した。『羽咋』で近居の理想が少ないのは、独立した子供が就職機会の点で考えると羽咋市内に居住する可能性が低いと判断したのであろう。

現実には完全同居と別居の割合が増加する。世帯間で設備や平面を分離したい要求はあるものの、二世帯住宅などは経済的に困難であるため完全同居となるのであろう。また、近居の理想を持っていても、実際には子供の職場や結婚などの関係で遠方にならざるを得ないということに思われる。

高齢期の住宅上の不安な点は、『松任』では年寄りだけでは家の管理ができないこと、住宅改装の精神的・経済的余裕がないこと、介護してもらえない部屋がないこと、浴室・便所などに手すりがないことなどが挙げられた。段差や階段の手すりなどの配慮は既にされているため、回答は少ない。『羽咋』では多いのが浴室・便所の手すりがないことと、家の管理が年寄りだけでできないことの二点である。『松任』で挙げられていたその他の点に加えて段差や階段の手すりがないことへの不安も比較的多く挙げられていた。『松任』より『羽咋』のほうが住宅のハード面、ソフト面両方の不安が高い。『羽咋』のほうが低い項目は住宅のローンである。『松任』では新築時のローンが多額残っていることが不安材料の一つとして挙げられている。

(4) 定住・転居

『金沢』は定住志向が低く、10年維持用住み続けたいとする世帯は35%しかいない。これは転勤族の社宅として供給されている場合や、転勤するまでの住まいとして社宅と同様の考え方をしている場合、戸建て住宅に住めるまでの仮の住まいと考えている場合などがその理由である。『松任』『羽咋』は『金沢』と異なり定住層の割合が高い。定住層は『松任』で87%、『羽咋』で90%である。『松任』『羽咋』は戸建て住宅であるために、居住の最終目標を達成できていることが大きな原因であろう。また、転勤族が非常に少ないことも理由にあげられるだろう。

おわりに

石川県の『金沢』『松任』『羽咋』における調査事例より、住宅の基本性能に関する問題点、住まい方及び住要求の地域性について、これまで述べてきたようにいくつかの点が明らかになった。今後、石川県の能登地方の過疎地における調査を実施し、その結果を加え分析し比較することにより、石川県における地域性と住要求は一通り終了することになる。さらに本研究は北陸三県に拡大していくものである。

本研究の資料の収集・データの整理に当たり、多くの住居学研究室の院生、学生諸姉にご協力いただきました。特に当時の院生の李時さん、学生の山本由香里さんには多大なるご協力をいただきました。お礼を申し上げます。